

平成8年度 宮小路中益線原田遺跡発掘調査報告書

原田・鎌田原遺跡

福岡県嘉穂郡嘉穂町大字馬見における考古学的調査の成果

嘉穂町文化財調査報告書

第 18 集

1997

嘉穂町教育委員会

Ⅱ 鎌田原遺跡

1 はじめに

本遺跡は、土取り工事の際に地権者である鎌田義光氏によって発見されたもので、平成3年7月初めに同氏が町教育委員会を訪れ、甕棺等が地表に露出している現況を報告された。早速筑豊教育事務所に連絡し、当時の担当者であった新原正典氏と共に現地の踏査を行う。そこで、数基の甕棺が露出し、一部には赤色顔料が見受けられた。その中で、銅剣切先を発見、ただちに状況を教育委員会に報告し、緊急調査の開始となった。

遺跡は、福岡県嘉穂郡嘉穂町大字馬見字カマタの123-1に所在する。

発掘調査は、町が調査主体となって平成3年7月16日から同年9月30日の間で実施した。

なお、平成7年1月9日をもって鎌田原弥生墳墓群は、福岡県指定史跡となった。ご協力下さった地権者であり発見者でもある鎌田義光氏に改めてお礼申し上げます。

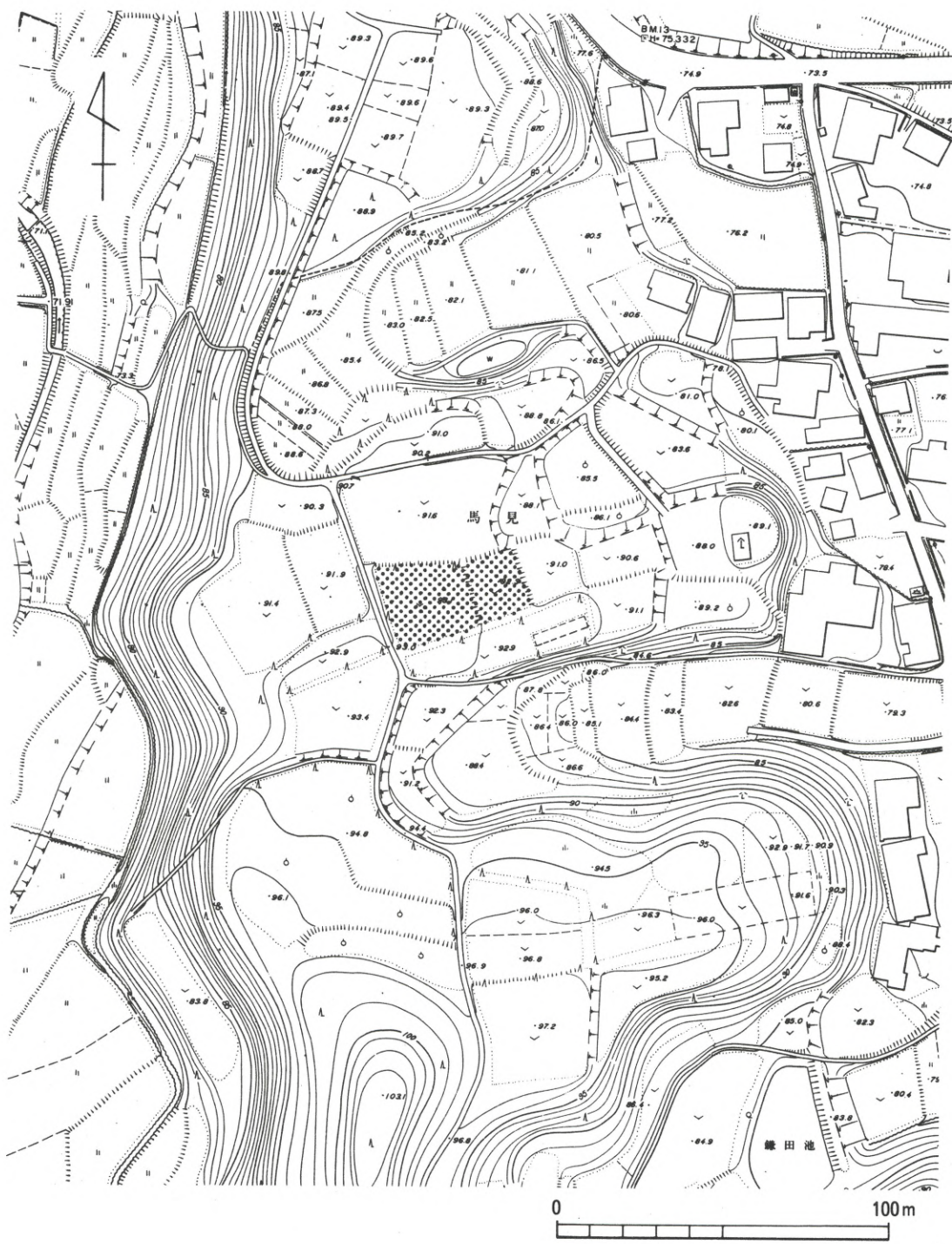
2 位置と環境

馬見山麓から北側には、丘陵が何本も出ておりその1本が鎌田丘陵である。馬見はこの丘陵を境として西馬見と東馬見の両地域に分離する形となっている。また、丘陵は、西側と東側の様相が異なるが、原因は丘陵上の開折が進展することによって生じたものである。西側は直線的なラインを示し、丘陵頂部上ラインからほどなく沖積地へと下るが、東側は所謂リアス式状のように凹凸が著しく、鎌田の集落に対して半島状に丘陵が何本も突出している。つまり、丘陵頂部の開折谷は総じて東側に落ちる形であり、当初の形としては西から東へと緩に傾斜していたことが想像されよう。

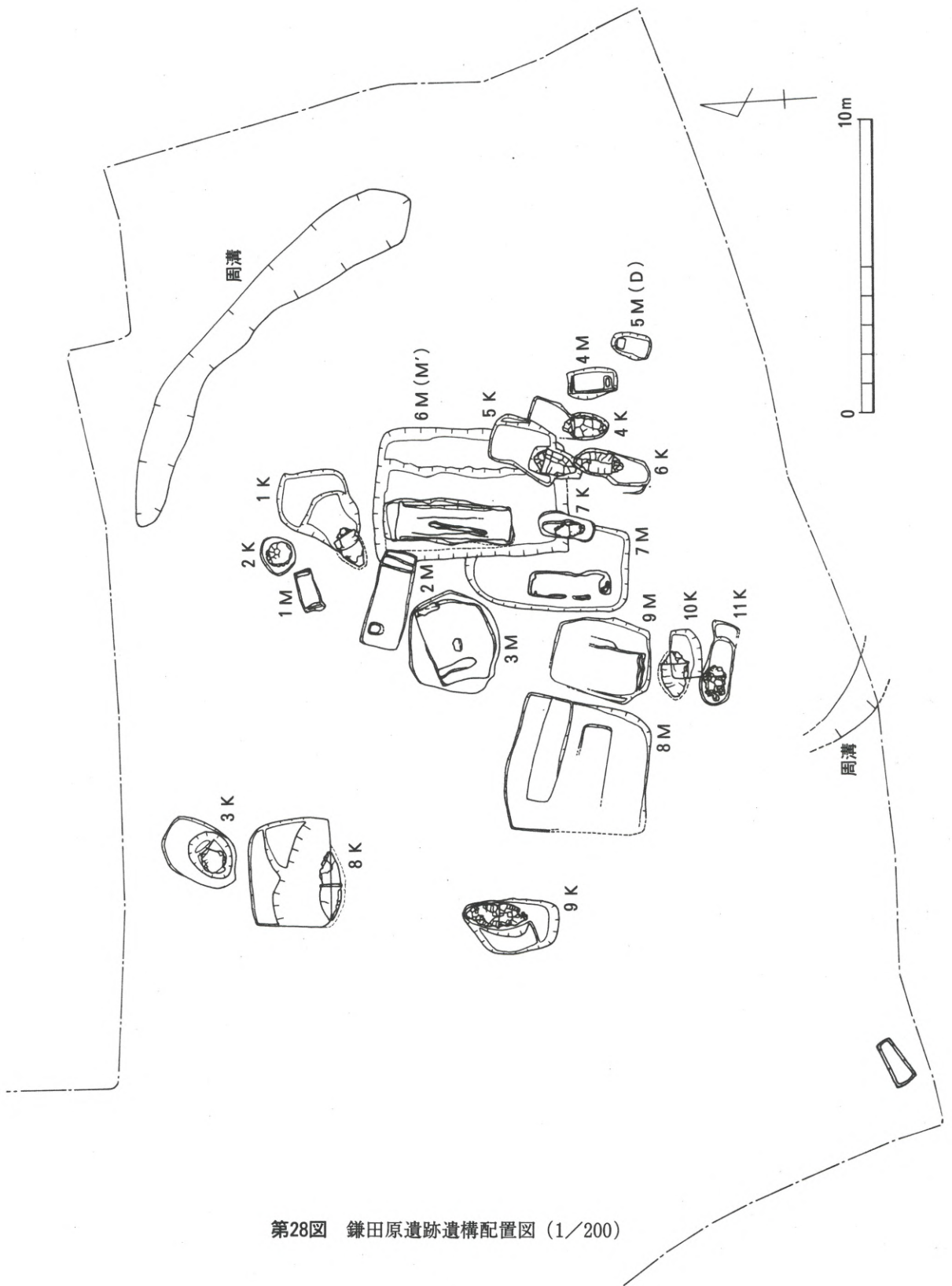
遺跡の位置する地点は、半島状に突出した丘陵の基部付近で、標高92~93mを測る。この部分からの見晴しは良好で、特に鎌田丘陵の西側にあつて平行状に位置する馬見台地の原田遺跡が眼下に広がっている。また、東には遠賀川（嘉麻川）の流れと平野部が広がり、南には馬見山の頂上を望むといったものである。

丘陵を構成する基盤は、花崗岩の風化土でありその上部に礫層が、その上に赤褐色の粘質土（赤土）が堆積しており、洪積世の堆積土を示している。これは、馬見台地や屏・椎木の段丘も同様の構成をなす。つまり、馬見山の北側には、嘉穂町内でも最も広い範囲で洪積層が広がっており、その後の河川による開折の結果によって、台地や丘陵、段丘といった状景が展開されるようである。また、この地質的特徴が、当地域を嘉穂地方でも有数の遺跡集中ケ所となった要因の一つともいえよう。

安閑二年（535）筑紫に穂波屯倉と鎌屯倉が置かれた。鎌は後に嘉麻という字があてられ嘉麻郡へと移行した。馬見は嘉麻郡であり、嘉穂町を流れる川を嘉麻川（遠賀川）と称する。当遺跡の所在地は、大字馬見字カマタとあつて、鎌田の字があてられ、住民には鎌田姓が多く見



第27図 調査地点地形実測図 (1/2,000)



第28図 鎌田原遺跡遺構配置図 (1/200)

受けられる。ここでは古くに用いられた鎌という字が残っていて、鎌の田つまり鎌屯倉と深く関係していたものと思われる。

承平年間(931~939)嘉麻郡に馬見郷が置かれている。この場合、旧足白村(馬見、椎木、⁽²⁾屏)が範囲となろう。

以上、古墳時代後期から平安時代と文献資料にも見受けられる地域であり、遺跡も多く集中する。各遺跡については、付1馬見地域の遺跡に提示する。

註1. 2は川添昭二編著「嘉穂地方史」(古代中世編)1968 嘉穂地方史編纂委員会

3 遺構について

(1) 墳丘墓

今回の調査では、面積1,150m²の範囲を発掘調査した結果、木棺墓(木槨墓を含む)8基、土壇墓1基、甕棺墓11基(大形棺10基、小形棺1基)が検出された。それら墳墓群は一面に集中するように存在し、北東側と南西側にそれらを区画する溝の一部を検出すると共に、断面観察の結果、墳丘部と思われる盛土の一部を2ヶ所で確認した。また、6号木槨墓の墓壇内への崩落土は、墳丘の盛土を含むものと思われ、全体に区画の周溝を有する墳丘墓(低墳丘)と判明した。

各墳墓の配置について6号木槨墓は超大形の墓壇を有するが、他の木棺墓も大形の墓壇を示し、それらは、墓域の中央に集中している。また、甕棺墓の場合は、その周囲に分布しており、同一墳丘内での占める位置が大きく異なる点の特徴である。

周溝

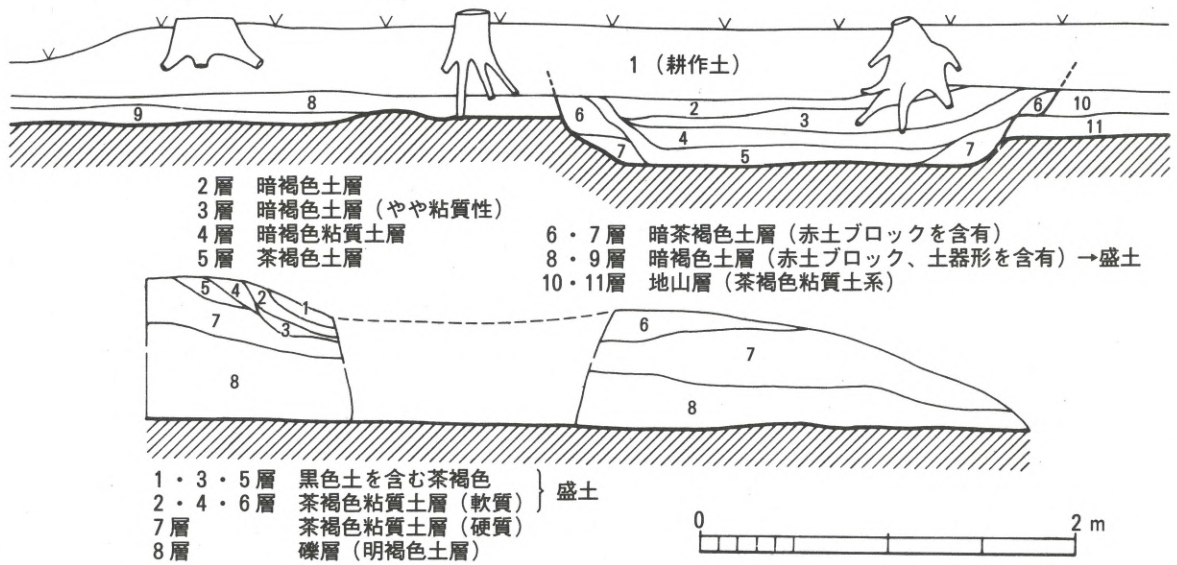
発掘調査区では、北々東と南々西の二ヶ所で溝状遺構が検出されており、前者は幅1~2.2mで深さ20~30cm、底部は平面で断面形がU字形を呈していたようで、壁面の立ち上りは緩やかである。後者は土層断面(第29図、図版14)で観察されたもので、幅2.7m、深さ40cm以上を測り、底部の幅は2m程もあり、立ち上りは緩やかでU字形を呈すものである。溝内の土層は、当初、底部両側から埋り始め、後に底部中央が序々に埋って行く様子を示しており、あくまで自然に進行した状況が見られる。断面観察では、溝の内側に墳丘の盛土と思われる土層も確認されており、墳丘を溝が切っていることが判明した。ある程度盛土を行った段階か、あるいは完全に盛土を行った後に溝を掘り込むという、それらの前後関係が示されたわけである。また、先に検出された二ヶ所の溝状遺構は、約1mの比高差があつて、これが、丘陵の形状(旧地形)と関係するようである。つまり、南々西から北々東へと1mの比高差をもって緩やかに下って行くという丘陵本来の地形を示しており、溝自体この地形的制約を大いに受けていたことになる。北々東の溝の外側では、やや急傾斜で谷に落ちる旧地形が確認されており、この溝のラインは、緩やかな傾斜が急傾斜となる境界付近に位置したこととなる。幅や形状が均一でない上に、地形に合わせて溝を掘り、その結果1m前後の高低差を生じている。もちろん空

堀であったことはいうまでもないが、溝は墳丘を切っており、間隔なく墳丘のサイドに位置していたことは確実であろう。しかし、機能的には、墳墓群を包括する墳丘を外界から区画するという1点に絞り込むことが可能であり、溝の幅や深さ、全体の高低差等は考慮されていないようである。区画という本来の目的からすると、溝は墓域を全周するもので、周溝と考えたい。ただし、形状等は曖昧なものであったようだ。

墳丘

墳丘は削平が著しく、ほとんど確認されなかった。原因は昭和初期の開墾と平成2～3年の土取り工事によるもので、特に、後者によって甕棺が露出するまで削平を受けた点は大きい。それでも、先の断面観察(第29図、図版14)によってごく一部に人工的な盛土を確認した。一ヶ所は周溝の内側にあつて、赤褐色土をブロック状に含み土器片や炭化物を混入した厚さ10cm前後の層が2層存在し、盛土を周溝が切っているという前後関係が判明した。2ヶ所目は自然層としての茶褐色粘質土層に喰い込むように盛土があつて、黒褐色土を含む暗褐色粘質土層と赤褐色粘質土層が交互に重なっていた。全体には南側から北側へと傾斜しており、土層中には土器片が含まれていた。1層は厚さ10～20cm程で5層あり、水平ではなく斜行する点では版築状というよりも、雑然とした状況を示す。ただし、盛土部を確認したヶ所では、旧地表面の黒色土層はなく、その下層まで削平した段階から盛土しているようで、地山整形を行ったと見られる。周溝のヶ所でも触たが、旧地形に高低差があることから、整形を行って平面的に仕上げた後に盛土を開始したようだ。南側の高い部分を削平した上で、北側の低い部分に盛り土として利用したことも充分ありうる。盛土に関しては6号墓(木槨墓)の墓壙内における崩落土(木槨部が朽ちた後に上部の土が落ち込んだ部分)の存在によってもある程度窺えよう。その厚さは1m近くあつて少なくとも木槨の上部に積れていたものである。現状で掘り方の肩部標高が91m近くあつて、崩落土はさらにその上にあつたものと思われる所から、標高92m付近までに達していたことは確実で、そうなるレベル的には、断面観察地点での盛土開始の高さと並ぶことになる。ちなみに、断面で確認された土層と墓壙内崩落土とはかなり近いものであり、旧地形の傾斜地を地山整形し表面を平面に仕上げたようである。少くとも、北側には地表から1m近い墳丘があつたことになる。また、南側では標高92mラインから上部に盛土を行っている。

墳丘の規模については、削平を受けており不明とした方がよいが、断片的な事実から想像的に組み立てていく他はないだろう。高さについては、断面観察と6号墓内の崩落土から、地山整形によって標高92mラインでの高さは確実であり、盛土の存在からさらに高くなろう。次に視点を各墳墓群の深さに移すと、古い段階での深い例を除くと標高90.5～91mの範囲に納まるようである。甕棺の場合大半が水平であり、深さ1m以上ないと棺は露出してしまふ。福岡市の樋渡墳丘墓⁽¹⁾は墳丘高を2mと推定しており、墳墓群は全て盛土内に納り、地山下には達してない。本墳墓群の場合は全て地山層中にあることから盛土は低く形式的なものであり、所謂低墳丘墓としてよかろう。先の墓壙深度が1m以上必要という点から、概ね2m程の深さと想定



第29図 周溝及び盛土部の断面図 (1/40)

すれば、標高93mラインが墳丘墓の頂部となろうか。発掘前の畑の高さが93.1mであり、レベル的にはいいようである。ただし、下方から見えるという条件であれば、もう少し高く見積る必要はあるが、今度は墓墳があまりに深くなる点も考慮せねばならない。

大きさについては、南北で対する周溝検出部の間隔 (内法) 約23m、周溝の内側ラインと最も近い墳墓の間隔が約3.5mずつで南と北で同じである。次に東西方向で最も遠い位置にある5 M (D) と3 K及び8 K間で約24mであり、それに先の周溝までの距離3.5mずつを加えると約31mとなる。周溝自体が地形に制約を受けた上に区画を強調するだけの構造であるならば、形状にこだわることなく、長方形、楕円形、隅丸長方形のどれかとなるが、特に、北北東部に残る周溝のコーナー部分を考慮するなら隅丸長方形が妥当であろう。北西方向に主軸を持つ隅丸長方形の墳丘が想定され、規模は長さ31m、幅24m、高さが南側で1m、北側で2mを測る。この場合、問題となるのは、墳墓群の主軸方向と約45°のずれが生じる点である。また、墳墓群の主軸方向に墳丘の主軸を合せ、周溝との位置関係から見て行くと、南北に24m、東西に24mの隅丸方形となり、3 K、8 K、9 Kは墳丘の裾部に位置し、その部分だけ突出した形となって不整形なものとなる。いずれにしてもその2案を提出して置こう。

1案 長さ31m、幅24m、高さ南側1m、北側2mで周溝が巡る。形状は隅丸長方形

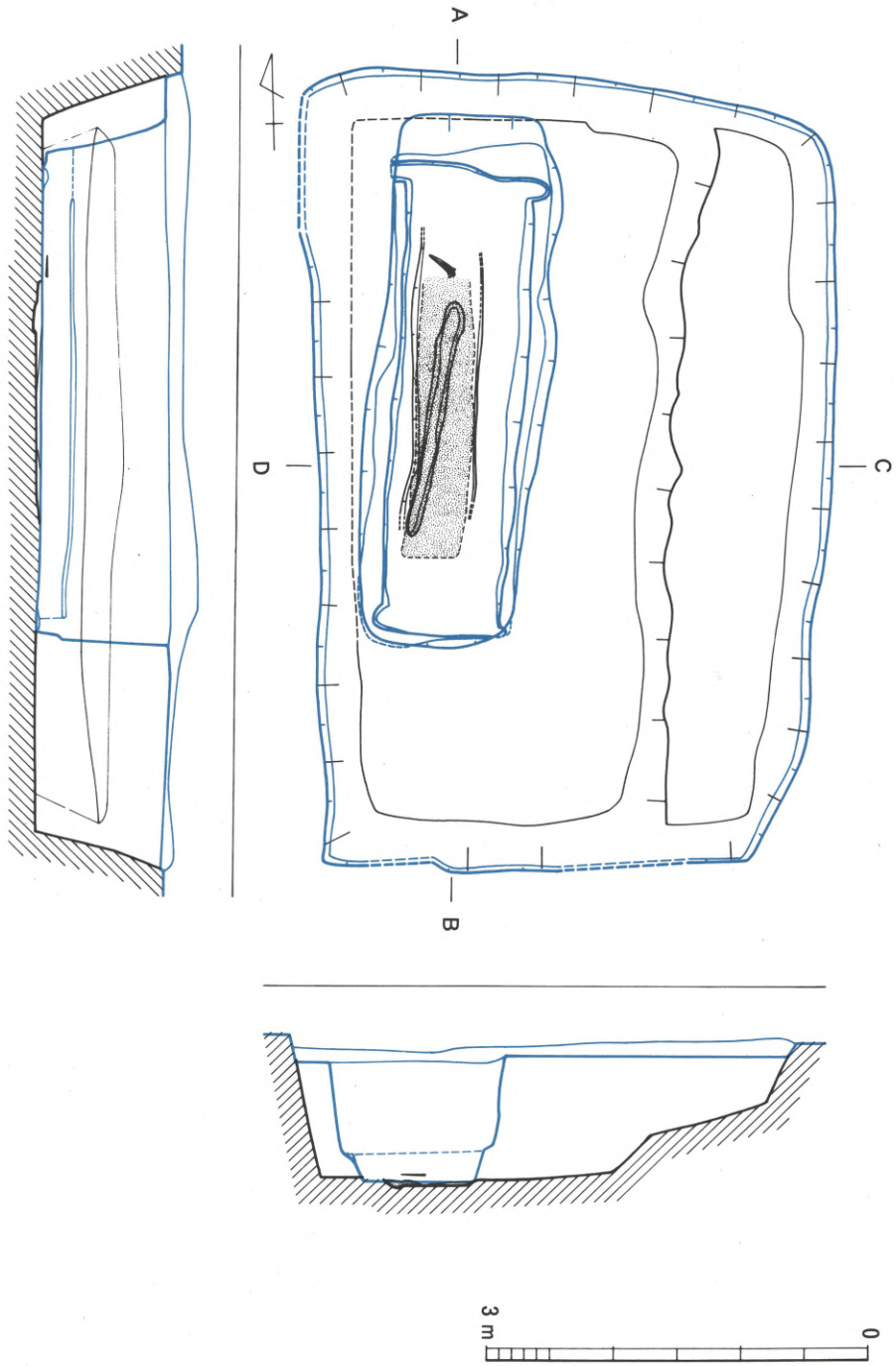
2案 長さ24m、幅24m、高さ南側1m、北側2mで周溝が巡る。形状は隅丸方形だが、北西側が一部突出する。

(2) 木槨墓

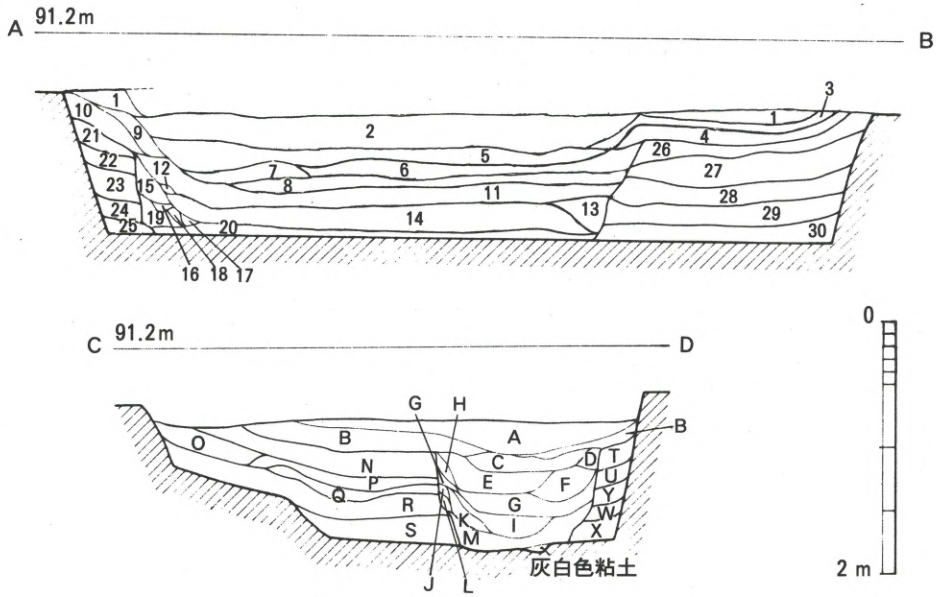
6 M (M') (第30図、図版15・16) と記したものである。墓壙の形状は、北側がやや広がるものの幅広の長方形を呈し、西側の壁面下には、底部から30~40cm上がった所に傾斜した段が一段存在する。これは、墓壙内へ降りる時に我々も利用しており、階段状あるいは埋土によってスロープ状になる部分であり、深い墓壙を構築する際や埋葬時には役立つ構造と思われる。墓壙の規模は、長さ6.4m、北側の幅4.24m、南側の幅3.4m、内法は長さ5.7m、幅(底部)2.4m、段の奥までが3.54mで深さは1.2m程である。次に木槨であるが、墓壙の北西側に片寄せて設置されており、その東から南側にかけては空間が出来ている。構造は痕跡から推定すると、南北両木口板部が側板よりも両側に突出しており、側板を木口板で挟み込む方式のものである。木口板跡の長さは、北側が1.2m、南側1.02m、側板は木口板間の内法で3.48m、木口板の外方からは3.8m、幅は86~90cmを測る。棺については、木槨中央付近で検出された長さ2.2m以上、幅(内法)44~48cm、深さ5cm程の掘り込みと、その上部に敷かれた長さ2.26m、幅36~48cmの灰白色粘土部分から推定されよう。粘土敷の部分は棺底か棺床ということで考えられようし、棺自体は板材の痕跡がなく床面も平坦であることから箱形の木棺と思われる。また、粘土敷の下方には、長さ1.9m、幅12cm程の溝が掘り込まれていて、排水的な機能を考えたい。主軸方位N-3°-E

出土遺物としては、棺の北側から中細形銅戈1点がある。状況は床面直上であり、中軸線に対し斜方向で切先を北西に向け水平な立置で検出された。問題はこれが棺内か棺外という点であろう。粘土敷は銅戈の直前まで確認したが下方では未確認である。ただ、銅戈が床面よりわずかに浮いている点やその一部に粘土がかかっている点で棺内とも考えられる。棺内副葬であれば棺の長さは2.5mくらいにはなろうし、もし、棺外であれば2.26mと想定される。従って、箱形木棺は、長さ2.26~2.5m、幅が48cm程の大きさであったと考えられる。なお、埋土中から磨製石検の切先部が検出されているが、位置等については判然としない。

続いて墓壙内の土層観察から、墳墓の構築について示そう。まず、墳墓底部の南、北、西側に15cmの厚さで暗褐色の粘質土を敷いている。さらに、東側では厚さが30~35cmと倍の厚さで敷かれ、1段設けてある部分は緩やかなスロープ状を呈している。これが、木槨の木口板及び側板を外側から支える基礎となり、その上部に4層から6層くらいを版築状に積み上げている。縦断面図(第31図)では、裏込めの版築状土層は21~30層を基本とし、3・4層と9・10層を加えることも可能と思われる。横断面図(第31図)でも同様に、基本はN・P~XにB層を加えるかどうかであろう。いずれにしてもこれだけの重厚な構造は木槨の材を支えるためのものである。裏込めの高さから木槨の高さを推定すると、21~30層であれば5層上面くらいの高さ3・4と9・10の各層も加えるなら、2層上面の高さということになろう。前者であれば65cm前後、後者であれば95cm前後となるが、長さ等のバランスからして後者の方であり、1m前後と考えたい。従って、2~10層は木槨上層にあったものが崩落した結果と把握されよう。



第30图 6号木棺墓(木槨墓)实测图(1/60)



第31図 6号木棺墓（木槨墓）内土層図（1/60）

6号墓（木槨墓）内土層図（縦断面）

- | | |
|---|--|
| <p>1 茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有、全体にしまっている。</p> <p>2 暗褐色土層、3～4 cm大の黄褐色土をブロック状に含有、フワフワしている。</p> <p>3 茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>4 暗褐色土層、2 cm内外の黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>5 暗褐色土層、黄褐色土粒を含有、しまりが無い。</p> <p>6 黄褐色土層、ややしまりがある。</p> <p>7 暗褐色土層、細い粒状で、ポロポロと崩壊する。</p> <p>8 茶褐色土層、粒状でしまりが無い。</p> <p>9 明褐色土層、細粒の層である。</p> <p>10 黄褐色土層、やや硬くしまっている。</p> <p>11 明褐色土層、黄褐色土層粒よりなり、ポロポロとくずれる。</p> <p>12 レンズ状の黄褐色土ブロック</p> <p>13 明茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>14 明茶褐色土層、黄褐色土粒を多く含有</p> | <p>15 茶褐色土層、黄褐色土粒を多く含有</p> <p>16 茶褐色粘質土層</p> <p>17 黄褐色粘質土層</p> <p>18 黄色粘質土層</p> <p>19 明褐色土層、茶褐色土をブロック状に含有</p> <p>20 黄褐色粘質土層</p> <p>21 明茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>22 明褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>23 黄褐色土層、黄色土をブロック状に含有</p> <p>24 暗茶褐色粘質土層（30に同じ）</p> <p>25 黄褐色土層、茶褐色土を霜降り状に含有</p> <p>26 暗褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>27 黒褐色土層（粘性有り）黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>28 暗茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>29 暗褐色土層（粘性有り）</p> <p>30 暗茶褐色粘質土層（24に同じ）</p> |
|---|--|

6号墓（木槨墓）内土層図（横断面）

- | | | | |
|--|--|--|---|
| <p>A 2層と同じ</p> <p>B 茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>C 5層と同じ</p> <p>D 茶褐色土層</p> <p>E 6層と同じ</p> <p>F 茶褐色土層</p> <p>G 8層と同じ</p> | <p>H 暗褐色土層</p> <p>I 11層と同じ</p> <p>J 明茶褐色土層</p> <p>K 明茶褐色土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>L 灰白色粘質土層</p> <p>M 20層と同じ</p> <p>N 茶褐色土層</p> | <p>O 茶褐色土層</p> <p>P 黒褐色土層</p> <p>Q 暗茶褐色土層</p> <p>R 暗茶褐色粘質土層</p> <p>S 暗茶褐色粘質土層、黄褐色土をブロック状に含有</p> <p>T 茶褐色土層</p> | <p>U 暗茶褐色土層</p> <p>V 黄褐色土層</p> <p>W 暗褐色土層</p> <p>X Sに同じ</p> |
|--|--|--|---|

整理すると、木槨の規模が長さ3.5m前後、幅90cm前後、高さ1m前後となり、両木口板で側板を挟み込む形態をとる。棺は長さ2.3~2.5m、幅50cm前後で、高さは50cm以上はあろうと思われる。

(3) 木棺墓

1 M (第32図、図版14)

墓壙は西側がやや広がるものの長方形を呈し、東西両壁下に木口板の差し込み口を残す。木口部分は、互いに南北に少しずつ片寄っていて□のような組方をしていた可能性を示す。墓壙は、長さ1.5m、西側の幅64cm、東側の幅52cm、深さ27cmを測る。底部東側寄りに赤色顔料を検出していて40×36cmくらいの円形状に広がっており、中心10cm四方に集中部分がある。主軸方位N-78°-E

2 M (第33図)

墓壙は長方形を呈し、その東西両端には木口板の差し込み口と見られる痕跡を残す。墓壙の規模は、長さ3.43m、幅1.2m、深さ3~5cmを測る。全体にかなり削平が行われていることから遺構検出もかなり困難であった。西側の木口板差し込み口付近から20cm四方の赤色顔料と細形銅剣の切先1点を得た。しかし、それらは表面に露出しており、ブルドーザーのキャタピラによってかなり荒らされており、原位置に存在しないことは明らかである。その上、銅剣切先は、先端を上に向けて立っており、折れた部分にキャタピラの三角形が当たった状況である。折口は古いようだが、土中で折れていれば、下半を重機のために失われた可能性がある。一応ここでは切先の出土としよう。主軸方位N-80°-W

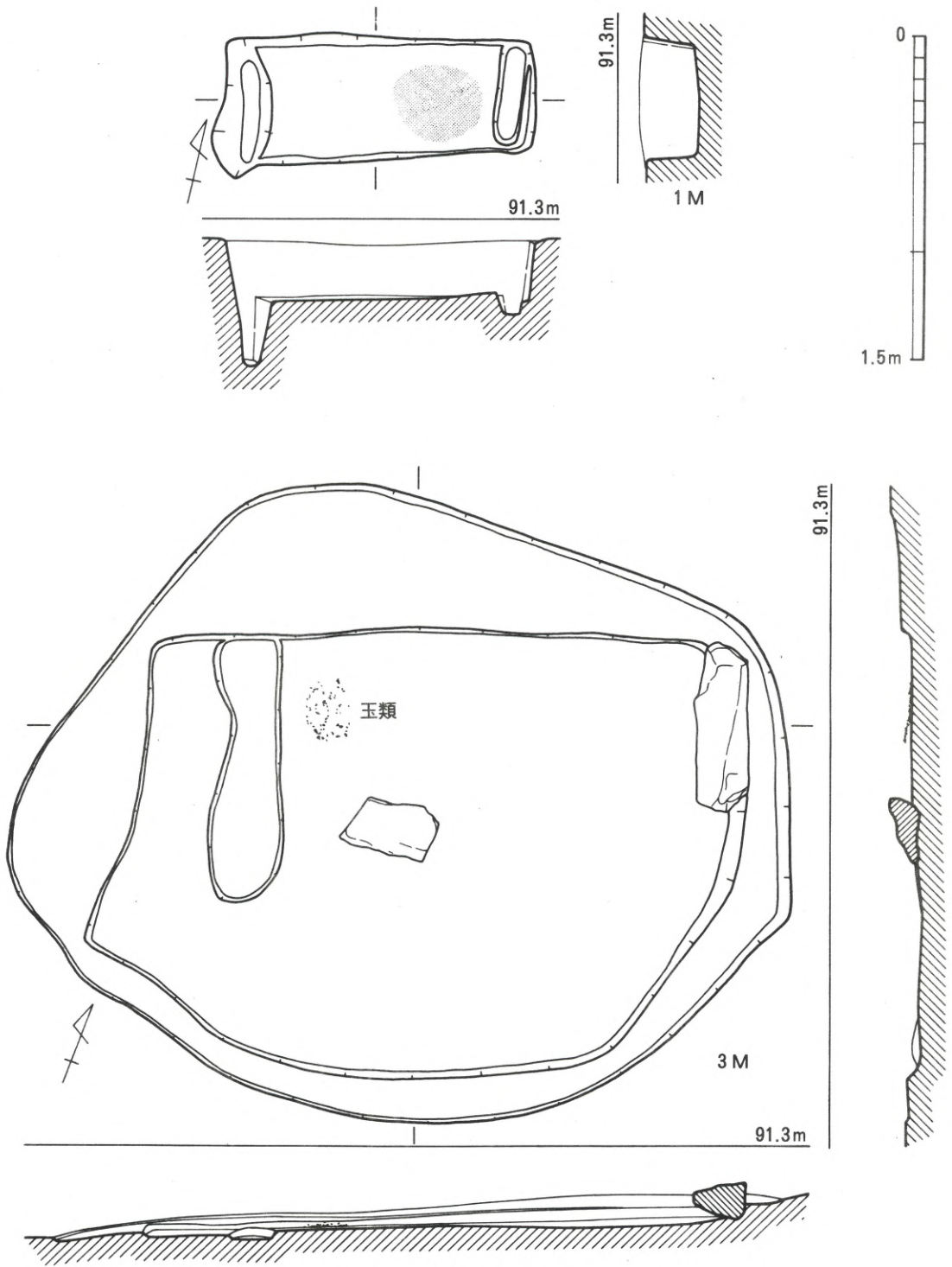
3 M (第32図、図版14)

墓壙は隅丸の五角形状という歪なものである。一応2段掘り込みの形を示すが、南東側の2段目の掘り込みも大きく外側に張り出している。中央壙の東側には木口板に相当するヶ所に、長さ70cm、幅24cm程の石を配している。また、反対の木口部分は3cm程の浅い掘り込みとなっている。この場合は、東側と同様に石が配されたようで、両方で木口板を支える機能を有したであろう。棺は箱形で長さ160cm前後、幅は80cm前後と推定される。棺底と思われる部分の西側から玉類(大形獣形勾玉1点、小形勾玉6点、管玉178点)が20×30cmくらいの範囲で集中して検出されており、被葬者の頭位方向を確認する上でも重要なものとなった。

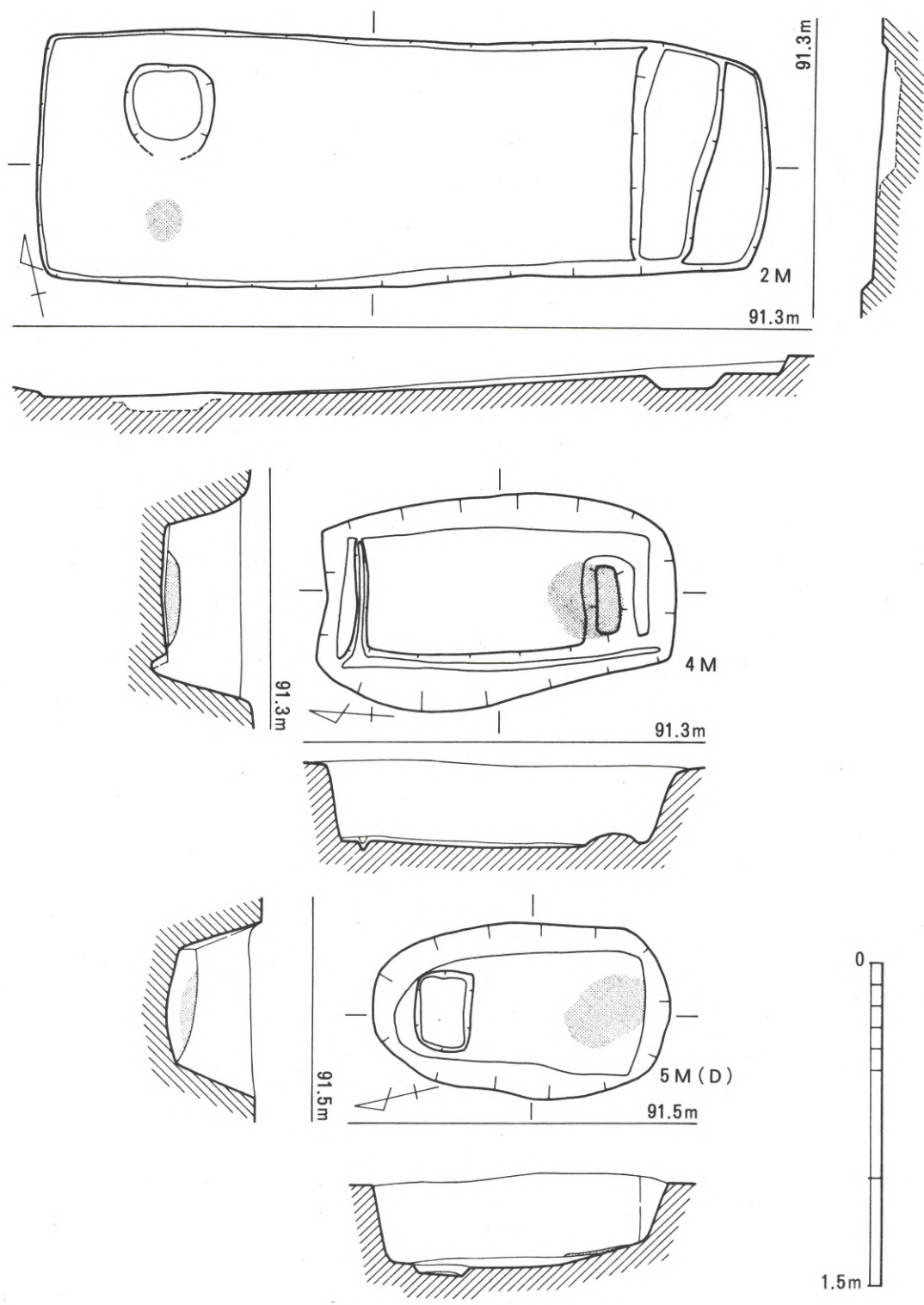
墓壙規模は、長さ4.05m、幅2.96m、深さ15cmを測り、赤色顔料は玉類検出地点に集中したが、木口部分の石の下にあったことから、本来は全面に塗ってあった可能性があろう。主軸方位N-70°-E

4 M (第33図、図版15)

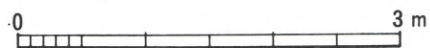
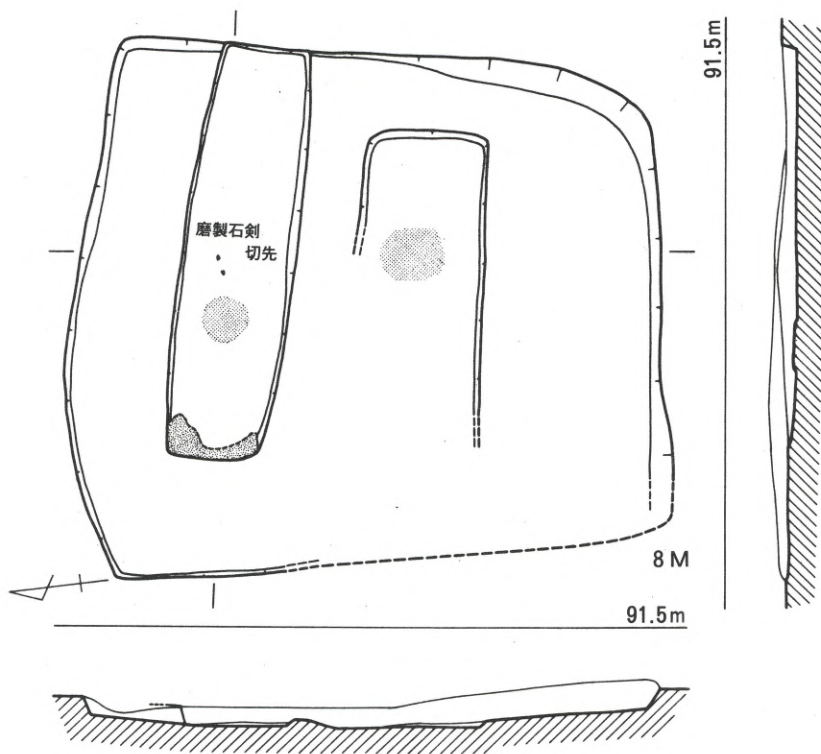
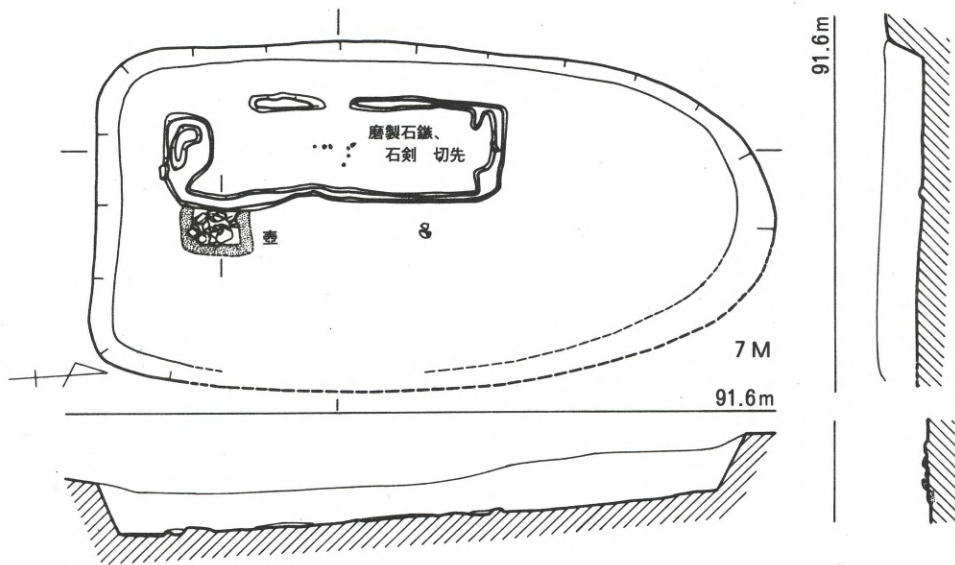
墓壙は胴張り型の長方形を示し、一方には木口板の痕跡があり、側板の痕跡との組み合わせが側板によって木口板を挟み込むという形態をなす。木口板の痕跡とは反対側に長さ36cm、幅23cm、高さ7cm程の枕状の高まりが確認された。また、その位置付近には直径35cmの範囲で赤色顔料が検出されており、枕状の高まりとの関係からして、頭位部分に相当しよう。主軸方位N-



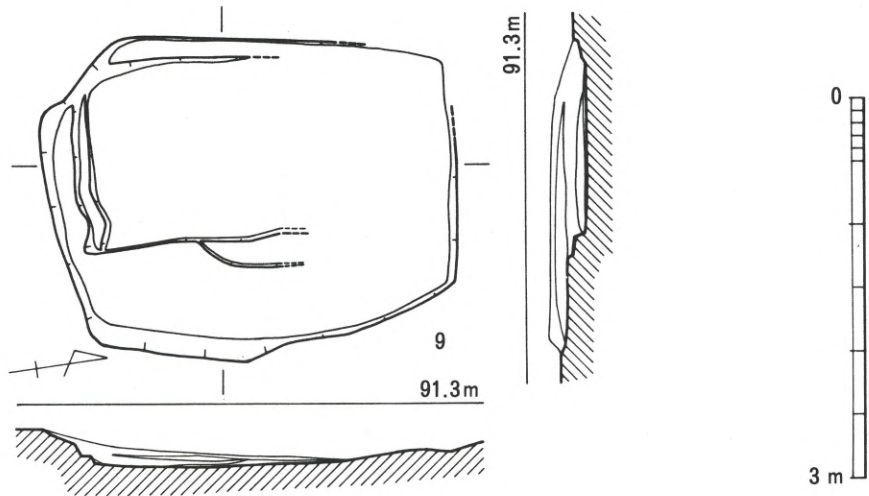
第32図 1・3号木棺墓実測図 (1/30)



第33图 2・4・5号木棺墓(土坑墓)实测图(1/30)



第34図 7・8号木棺墓実測図 (1/60)



第35図 9号木棺墓実測図 (1/60)

4°-W

7M (第34図、図版17)

墓壙は長方形を基本とするが、北側は緩やかな弧を描く。1段掘り込みで棺は南西のコーナー付近に位置しており、墓壙中央からかなり片寄った部分にある。墓壙の規模は、長さ5.3m、幅2.9m、深さ40cmを測る。棺の形態は、その痕跡から側板で木口板を挟み込むものと思われる。しかし、棺材は底部に差し込む一般的方法を採用せず、底部に直接設置して行くものである。棺周囲には明黄色の粘土が約幅10~20cm、高さ5cm程で残っている。これは、おそらく官材の固定に関連するもの、あるいは目張りに使用されたものであろう。棺底中央部から磨製石鏃7点(内1点は不明)、磨製石剣切先1点が検出された。また、南側端部に40×50cm幅で別区画が設けられていて、壺形土器(口縁部を欠く)がつぶれた状態で検出された。主軸方位N-5°-E

8M (第34図、図版18)

墓壙は正方形状で、2段掘り込みを呈す。2段目の壙は中央付近に2ヶ所確認されるものの、南東側は削平によって失われている。墓壙の規模は、南北2.2m、東西2.3m、深さ17cmを測り、壙は、①が長さ1.15m以上、幅50cm、深さ5cm、②が長さ1.7m、幅40cm、深さ10cmを測る。②の南端には粘土が検出された。ここでは、底面の掘り込みが浅く底が平面であり、一部に粘土が認められる点で、一応木棺墓として取り扱っておく。なお、両方の棺底からは赤色顔料が円形の広がりで見出されており、これが頭位を示すものと思われる。従って、①は東側、②は西側と交互の頭位方向を示すものであり、注目されよう。また、②の赤色顔料よりやや東側に磨製石鏃の切先部が見出されている。切先がさらに二つに折れており、それが8cmほど離れた状態で検出され、状況に問題を有する結果となっている。主軸方位N-80°-W

9 M (第35図、図版18)

墓壙は方形を呈するものの、ほとんど削平されて判別出来ない。棺は木口板の差し込み口が残っており、箱形に組み合わせるのであろう。棺は墓壙の西側に片寄せてあり、東側に若干のスペースを有している。墓壙は長さ3.34m、幅2.56m、深さ26cmを測る。棺は長さ1.6m以上、幅1.38mを測る。主軸方位N-9°-E

(4) 土壙墓

5 M (D) (第33図、図版15)

墓壙は隅丸長形状を呈し、南側がやや広がるバチ形ともいえるものである。底部は緩やかであるが船底を呈し、北端部に20×40cmほどの方形の掘り込みを設ける。これは、所謂足元掘り込みとして把握されよう。また、南端部では、赤色顔料が検出されており、底部幅が広い点を考え合せると、頭位部分とも思われる。墓壙の規模は長さ1.37m、幅83cm、深さ44cmを測る。主軸方位N-13°-E

(5) 甕棺墓

1 K (第36図、図版18・19)

墓壙は、不整形状を呈し2段に掘り込まれている。よく観察すると、1段目は長さ2.3m、幅1.6m、深さ45cm規模で長方形に掘り込み、その西側壁面から南西方向に横穴を設けている。その長さは2.85m、幅1m程で、深さは2段目のはじまりが25cmで、緩やかに深くなり検出面からは105cmの深さとなる。棺は水平に納められ、1段目の掘り込み口から約2.6m付近に蓋が来るような位置である。副葬品等は別に検出されておらず、棺外にも存在しなかった。主軸方位N-65°-E

2 K (第36図、図版19)

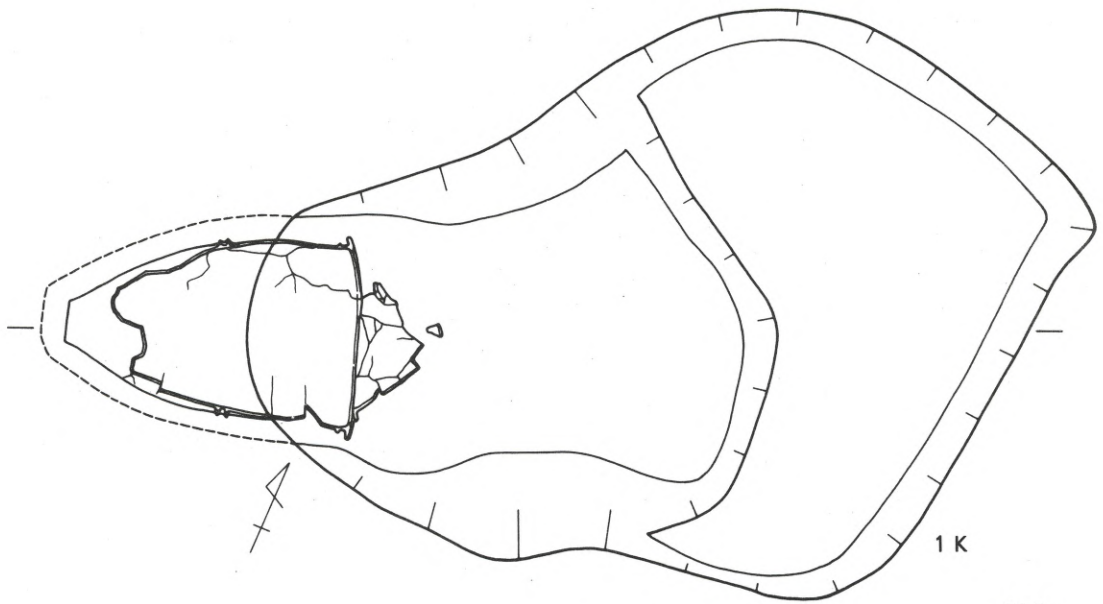
墓壙は削平のために失われている。棺を納める壙は傾斜しており棺を納めるのにギリギリの大きさである。規模は、直径1.2m程の円形で、深さ70cmを測る。主軸方位N-78°-W

3 K (第37図、図版19)

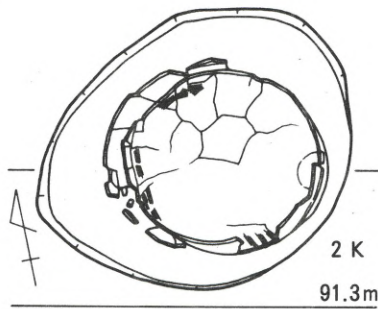
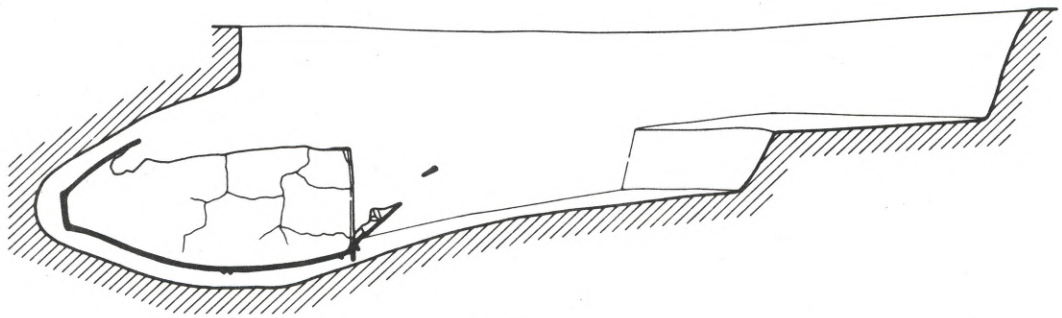
墓壙は削平を受けており、棺も半分を残すのみとなっている。形状は楕円形を呈し、長さ3m、幅1.9m、深さ22cmで、その中央より若干南側に棺を納める楕円形の壙を設けている。この規模は長さ1.77m、幅1.24m、深さ71cmを測り、棺は水平に納められている。棺の口縁部付近には目張り用的な粘土が検出されたが、土器片の検出はなかった。ただ、口縁部前方には底部の長さ56cm、幅18cm程の溝があり、先の粘土とを考えると木蓋か石蓋の可能性が考えられよう。溝幅等からして後者と思われるし、実際に片平な板石の存在を確認している。主軸方位N-47°-E

4 K (第37図、図版19)

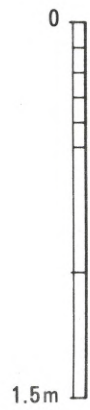
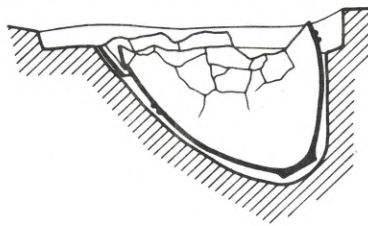
墓壙は大半を削平されており、その形状等は不明点が多いが、方形壙と棺を納める横穴は存



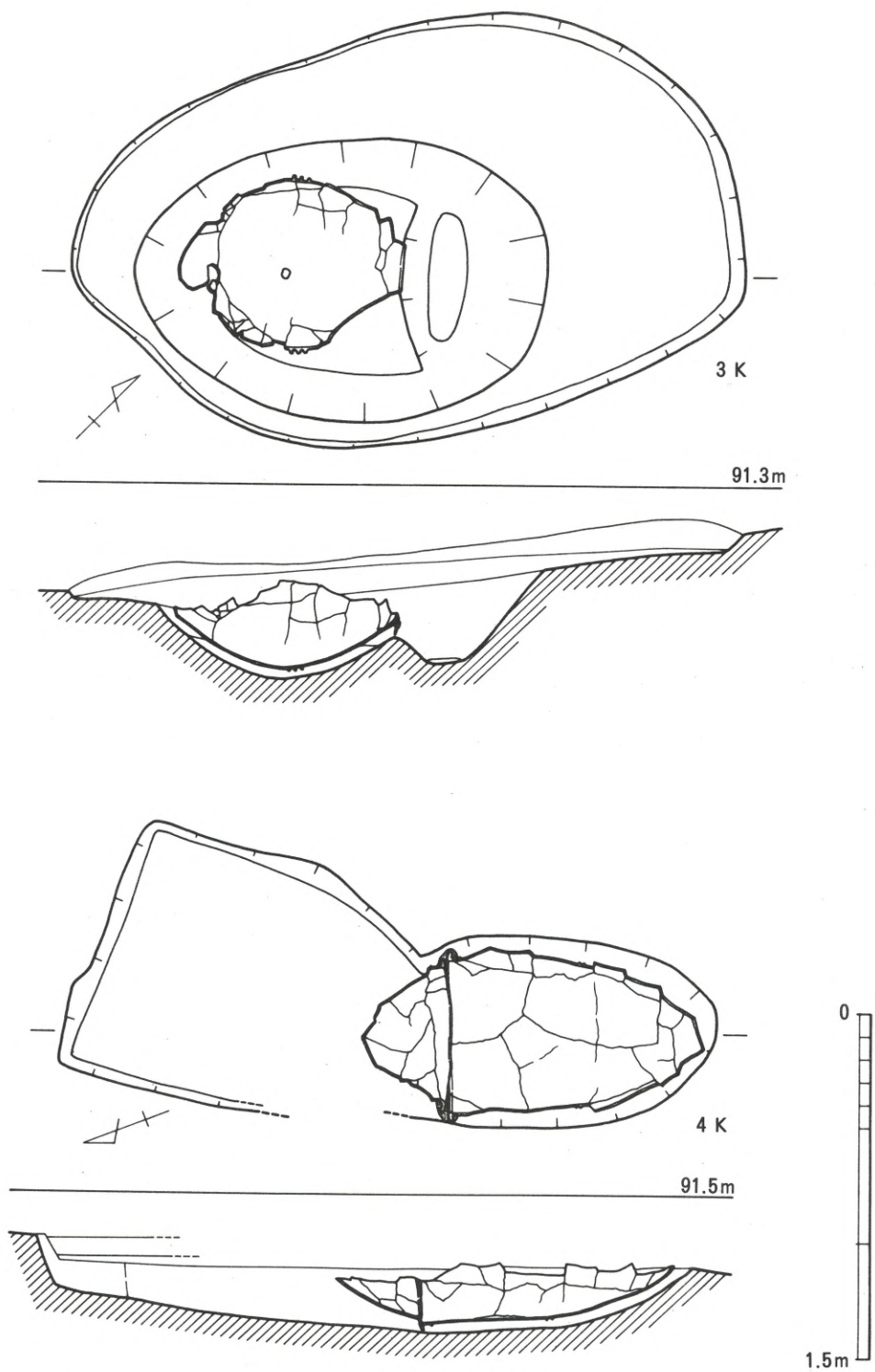
91.5m



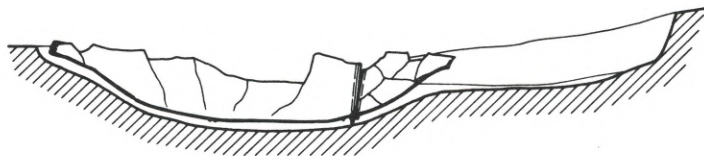
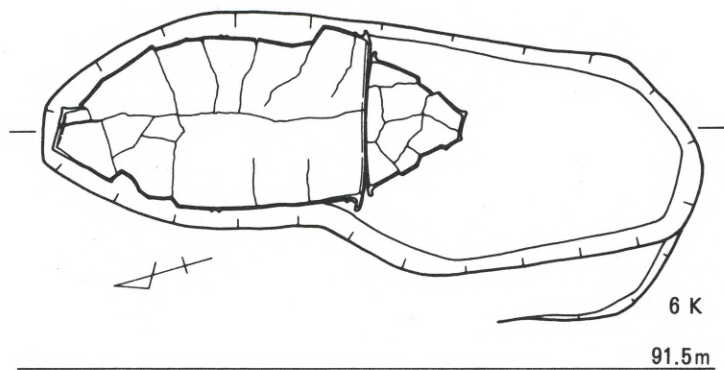
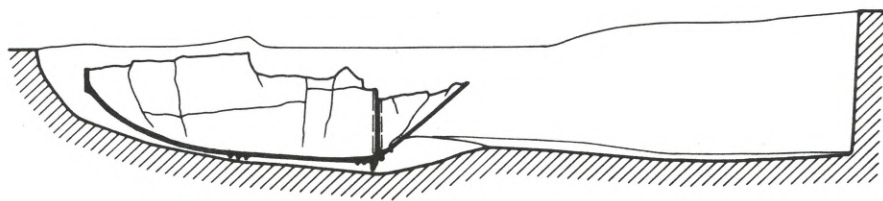
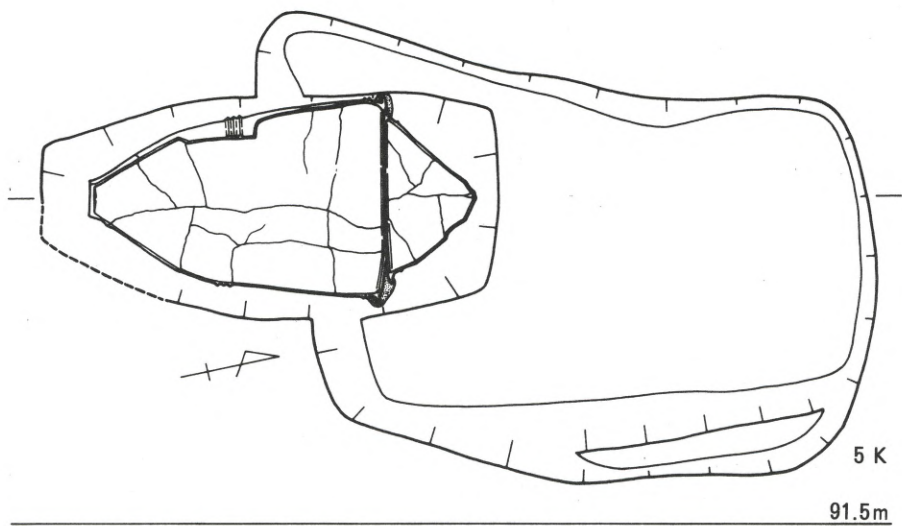
91.3m



第36图 1·2号甕棺墓实测图 (1/30)



第37图 3·4号甕棺墓实测图 (1/30)



第38图 5·6号甕棺墓实测图 (1/30)

在したようである。前者は長さ85cm、幅1.14mの長方形で、深さは21cmから40cmへと棺に向けて深くなる。横穴は棺を納めるのにギリギリの大きさで、棺が水平に納まるために底部は水平となっている。横穴の長さ1.3m以上、幅84cmを深さ40cmを測る。なお、方形壙と横穴は断面でも底面が連続していて両者の判別不可能。目張り用の黄白色粘土が検出されているが、副葬品等は存在しなかった。主軸N-21°-E

5 K (第38図、図版20)

6号木槨墓を大きく切り込んで構築したものである。墓壙は長方形を呈し、その底部から一段低い位置に下甕が挿入出来るほどの長さの横穴を掘り込むようである。横穴は下甕を挿入し固定化する深さであり、その後に蓋を取り付けるようである。長方形の墓壙は、東側が2.18m、西側が2.3m、幅1.6m前後で深さ55cmを測る。横穴は、底部を1段掘り込んだ所からの長さが1.76m、幅90cm、深さ65cmに達し、形状は長方形に近い。棺は水平に納められ、横穴の底部も水平を示す。目張り用の黄白色粘土が検出されているが、副葬品等は検出されなかった。主軸方位N-12°-E

6 K (第38図、図版20)

全体にかなりの削平を受けており、墓壙等の確認はかなり困難である。墓壙は底部のみであるが、隅丸長方形を呈し、棺を納める横穴は、墓壙底部を1段掘り下げて構築しているようで基本的には、下甕を挿入するスペースを確保しているようである。墓壙及び横穴を含めた全長が2.6m、幅1.08mで深さ45cmを測る。棺は水平に納められ目張り用粘土及び副葬品等は検出されなかった。主軸方位N-16°-E

7 K (第39図、図版20)

当資料は、由一の小形棺であり小児を埋葬対象としたのであろう。墓壙は大半を削平されており、隅丸長方形の底部が残されているのみで、形状等の詳細は不明である。棺は水平に置かれており、北側の棺底には赤色顔料が残されていたので、頭位が北側で、その棺が下甕を示すと考えられた。墓壙の底は2段掘り込みになっており、長さ1.8m、幅80cm、深さ17cmを測る。6号木槨墓と7号木棺墓を切って位置している。主軸方位N-4°-W

8 K (第40図、図版20・21)

墓壙は隅丸長方形を呈し、北側から一部階段状に2段掘り込んだ後、緩やかなスロープをなして棺を納める穴を掘り込む。穴は、墓壙の南側壁面を40cmほど横に掘り込み、また、墓壙から下るスロープの端から30cm程の深さを呈し、棺は墓壙の主軸に平行するように穴の中に固定されている。発掘後、棺は南側壁面から身を半分程露出する状況であるが、本来は壁面に棺全体が隠れたものと考えられる。この様式は土壙墓に見受けられ、墓壙内側壁面に横穴を設けるというものに近い。当墳墓群中では規模が違うものの10号甕棺墓が類似していよう。

棺は上甕と下甕とがあり、前者は後者より若干小さいもので、接口式の形態を示す。ただし、

両者は5cmほど放れていて、口縁部周囲を厚く灰白色粘土が包み込んでいる。下甕の中央部からは中細形銅戈が1点検出されており、切先を北に向け、棺の主軸に直交して置かれており、棺底から5cm程浮いた状態で水平な位置にある。棺内の埋土は、口縁部の目張り粘土が少しずつ内部に堆積したもので、多量の赤色顔料が混じる。顔料は、上甕口縁部付近から下甕の底面の3/4に広がるほどの量である。頭位は東側を向くようで、銅戈は腹部から腰部にかけての位置にあったように思われる。主軸方位N-88°-E

墓壙の規模は、長さ3.5m、幅2.7m、深さが10cm~1.1mとなっており、棺は長さ2.18mに及ぶ。

9 K (第39図、図版21)

墓壙は大半が削平されており、形状は判然としない。現状の規模は、長さ3.2m、幅1.8m、深さ48cmを測る。墓壙底部付近を観察すると、棺は墓壙の一方に寄っており横に一段の傾斜面を見出す。棺は接口式で、口縁部には目張り用の粘土が見られるが、側面のみで棺底では観察出来なかった。下甕は上甕より若干大きく、北側が下甕南側が上甕となろう。棺はほぼ水平に置かれており下甕中央よりやや北側には、細形銅戈が底から浮いた状況で検出され銅戈の茎付近に赤色顔料が最も付着しており、頭位はその付近かとも推定される。そうすると、下甕の奥に向って頭を入れ、その上方に銅戈が置かれているという形も想定されよう。銅戈は西側に切先を向けており、棺の主軸に対して斜方向に置かれている。また、関部下方に木質が残っており、木柄が装着されていたものと思われる。しかし、柄の延長は棺内壁面までであり、30cm程を残し下方を切断したことが推定される。主軸方位N-5°-E

10 K (第41図、図版21)

墓壙は長方形を呈すが歪であり、規模は長さ1.65m、幅1m、深さ68cmを測る。墓壙の西北コーナを中心に西側に横穴を設け、棺を水平に設置する。横穴は長さ1.7m、幅1.02m、深さ1mを測る。棺は下甕に蓋を装着させるもので、目張り用粘土が検出されているが、副葬品は検出されなかった。主軸方位N-85°-E

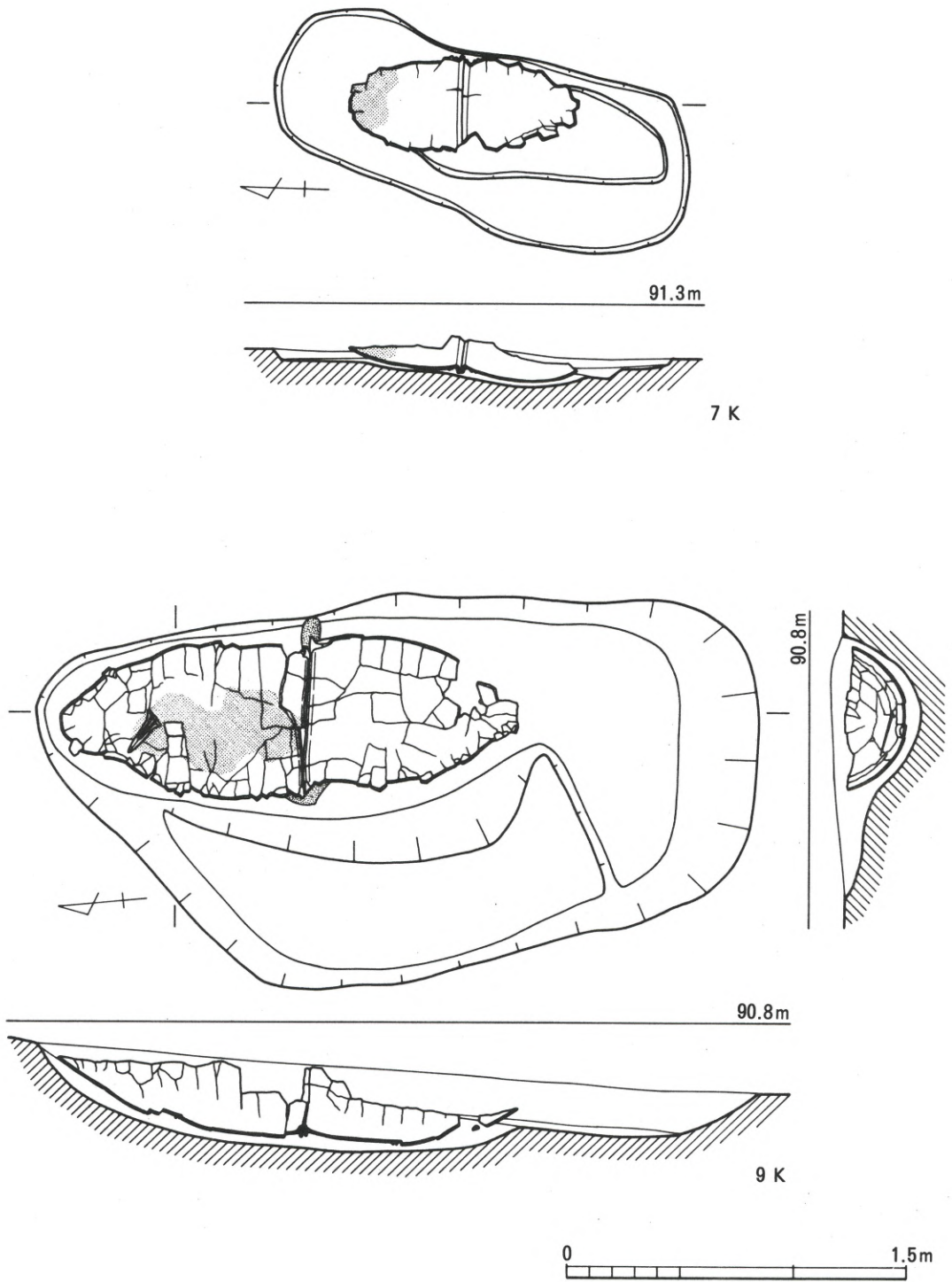
11 K (第41図)

墓壙は大半が削平されており、長楕円形の底部を残すのみである。断面を観察すると東側に墓壙の一部が残っており、その底部から一段掘り込んで棺を納める壙を設けたようである。棺もほとんど失われているが、上甕は口縁部を欠いたもので、挿入式であった可能性があろう。棺は水平であり、目張り用粘土や副葬品は検出されなかった。墓壙及び壙の規模は、長さ2.35m、幅96cm、深さが墓壙底で36cm、壙底では65cmを測る。主軸方位N-85°-W

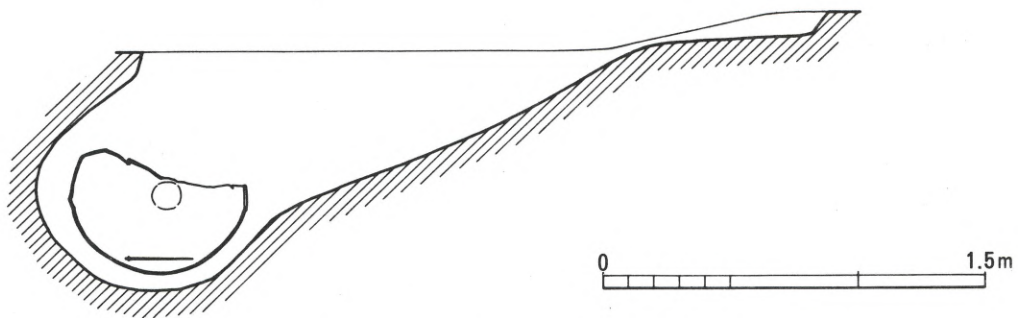
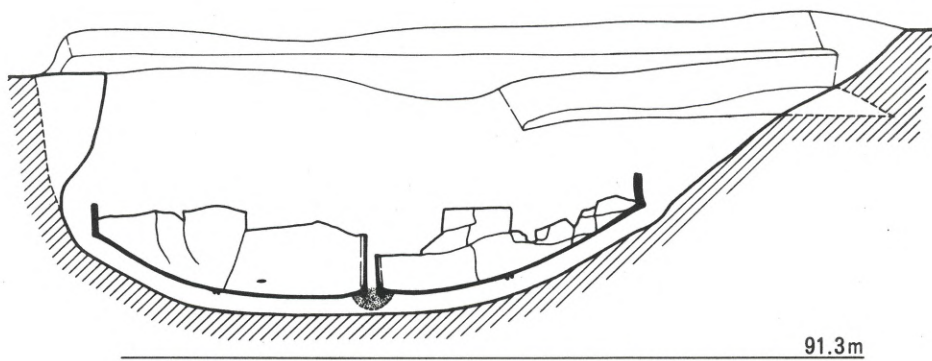
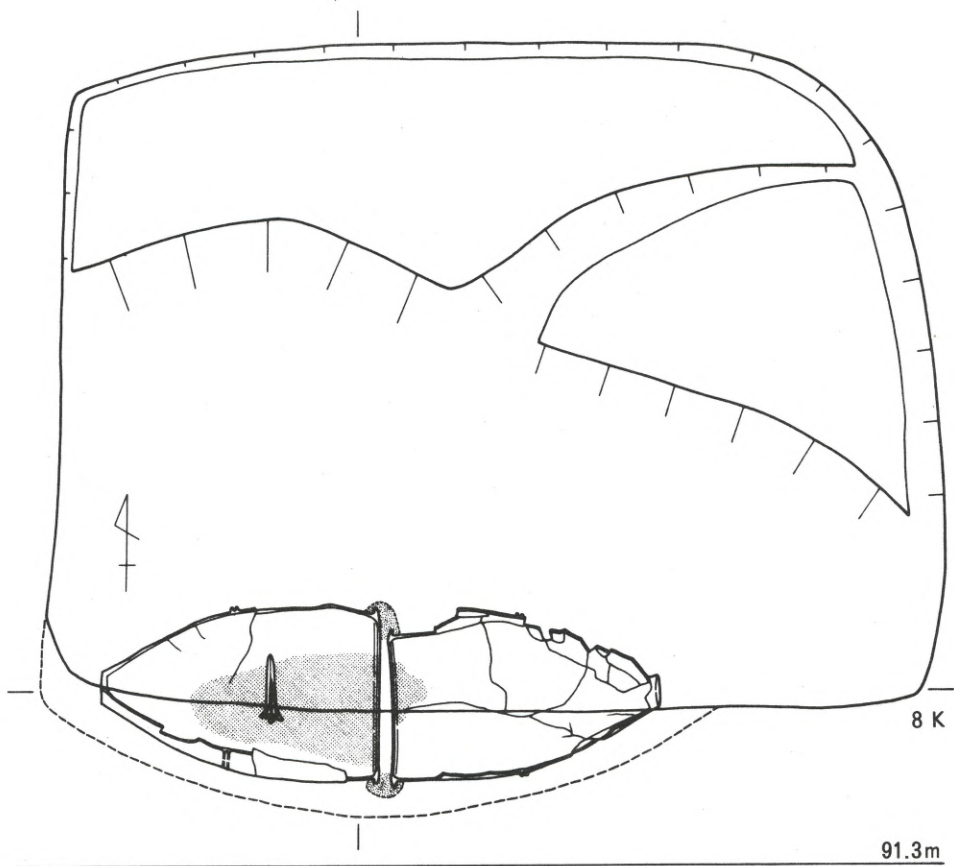
今回検出された墳墓群中で、切り合関係が確認されたものを記して置く。

木棺墓(木槨墓、土壙墓を含む)は、7M⇒6M⇒2Mという順序が成り立つ。甕棺墓では、4K⇒5K、6K⇒5K、11K⇒10Kという関係が示される。

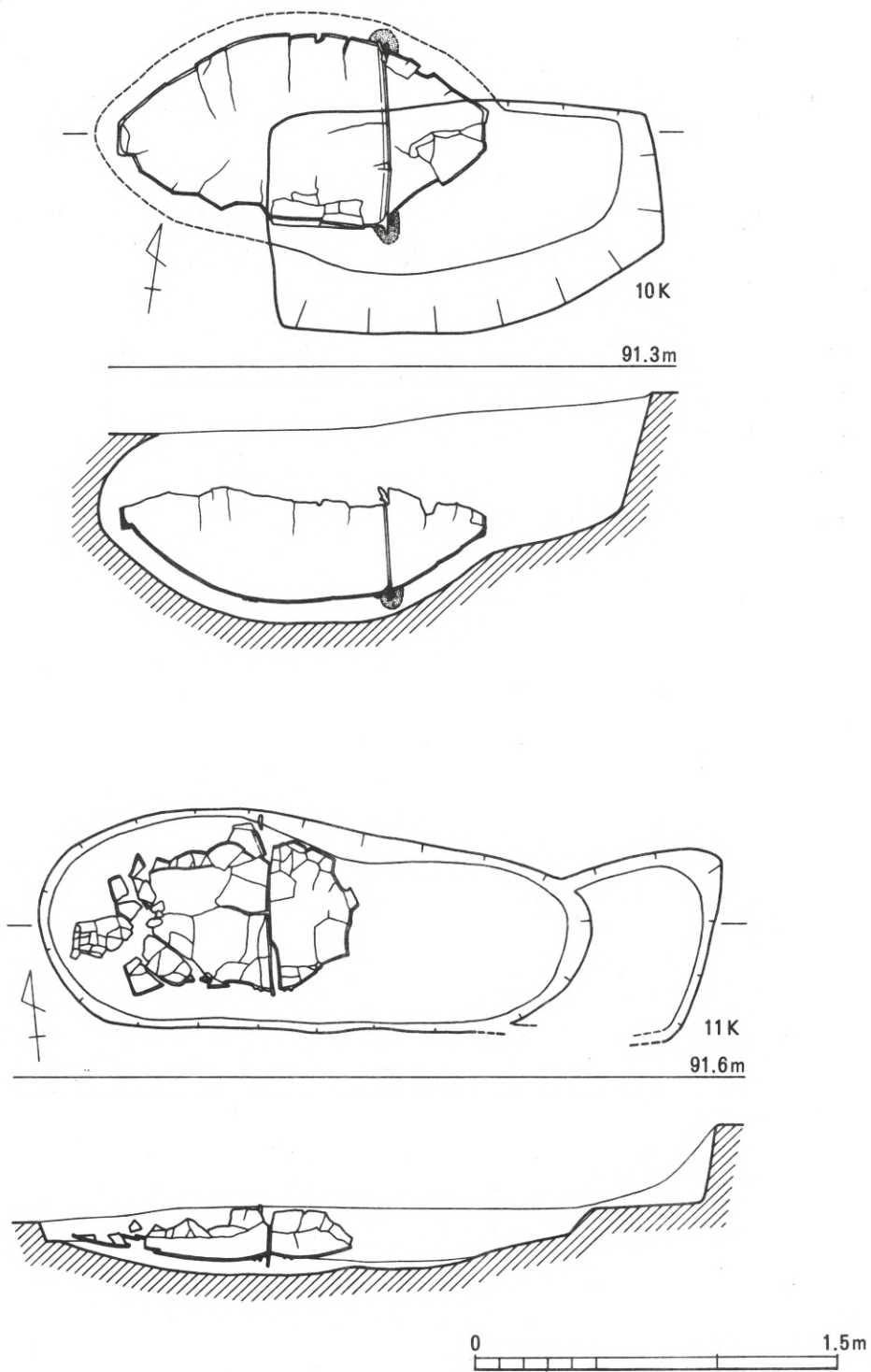
両方では、6M⇒5K、7M⇒6M⇒7Kという関係である。



第39图 7·9号甕棺墓实测图 (1/30)



第40图 8号甕棺墓实测图 (1/30)



第41图 10·11号甕棺墓实测图 (1/30)

4. 遺物について

(1) 甕 棺

1 K (第42図、図版22)

上甕(鉢)口縁部は内面がやや突出するものの、外方へはL字状に大きく張り出し、外面角度は浅いものとなる。壁面は薄く、底部成形の際の凹部が残る。口径72cm、器高推定37.2cm、底径14cmを測る。色調は明茶褐色、胎土に細い砂粒を含む。焼成は不良で全体に軟質気味である。

下甕(甕)口縁部は厚くT字状をなし、内面に張り出しが強く、外方へはややタレている。口縁下5cmあたりに三角突帯を配し、胴部は中央よりやや上方で底部から60cmあたりに三角突帯2条を配す。突帯間は2cm程開いている。全体には張りも少なくストレートな感じで底部へとつながるが、底部付近のしまりがなく底部が大きく感じる。最大径は胴部のかなり上方にあって、若干肩が張るといった印象である。口径77cm、器高111cm、底径14cmを測る。色調は明灰色、胎土は砂粒を含み、石英や金雲母が目立つ。焼成は上甕と同様に不良である。

上下甕共に壁面はナデで仕上げられ、下甕の胴上半には黒斑を有している。

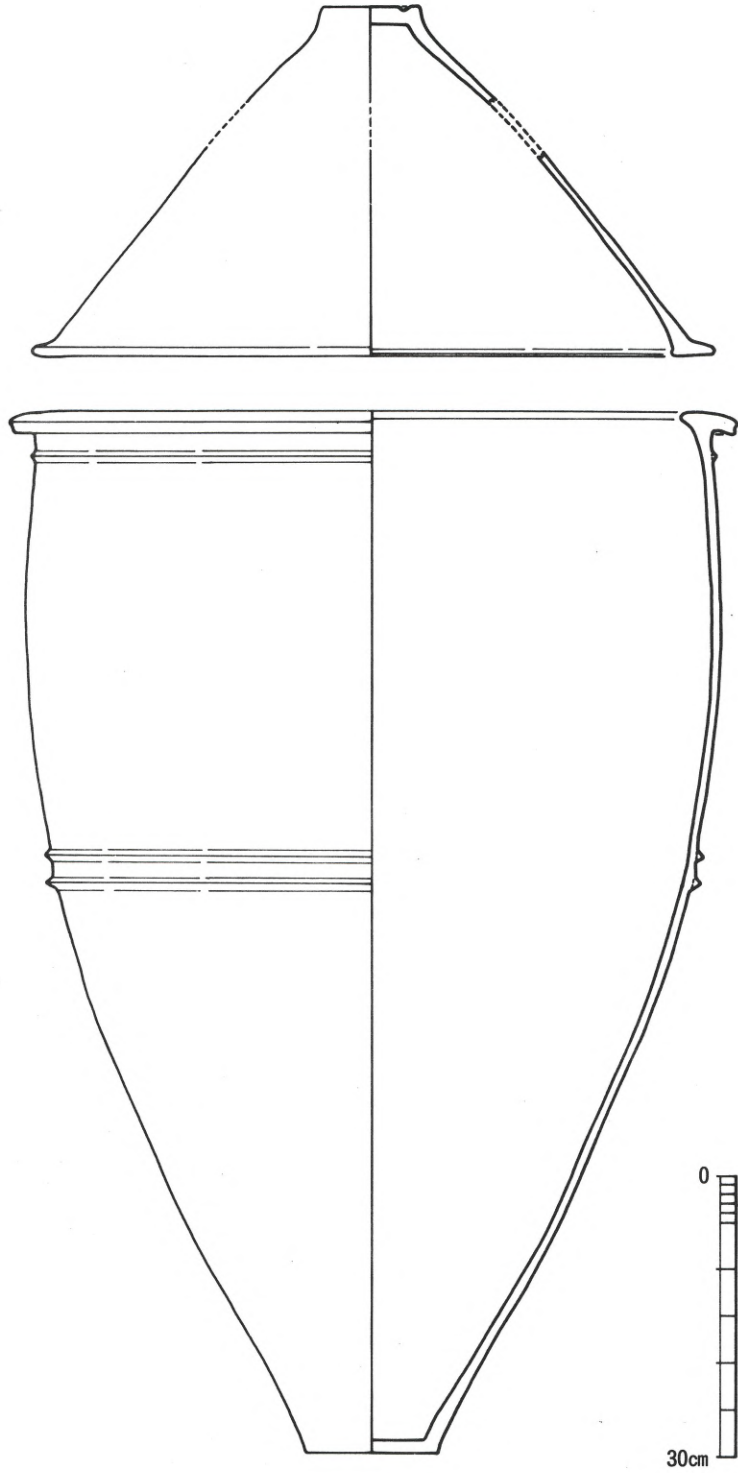
2 K (第43図)

上甕(甕)胴上半部を打ち欠いた甕で、最大径の位置に三角突帯が1条付されるものである。胴部は大きく張り底部はしまっている。外面の一部には縦方向のハケ目が残りに、内面の底部付近もハケ目が残るが、多くはナデによって消している状況が見られる。打ち欠かれた胴部の径は75cm、器高推定59cm、底径16.4cmを測る。色調は暗褐色、胎土は細礫(片岩、石英等)を多く含む。焼成は不良である。

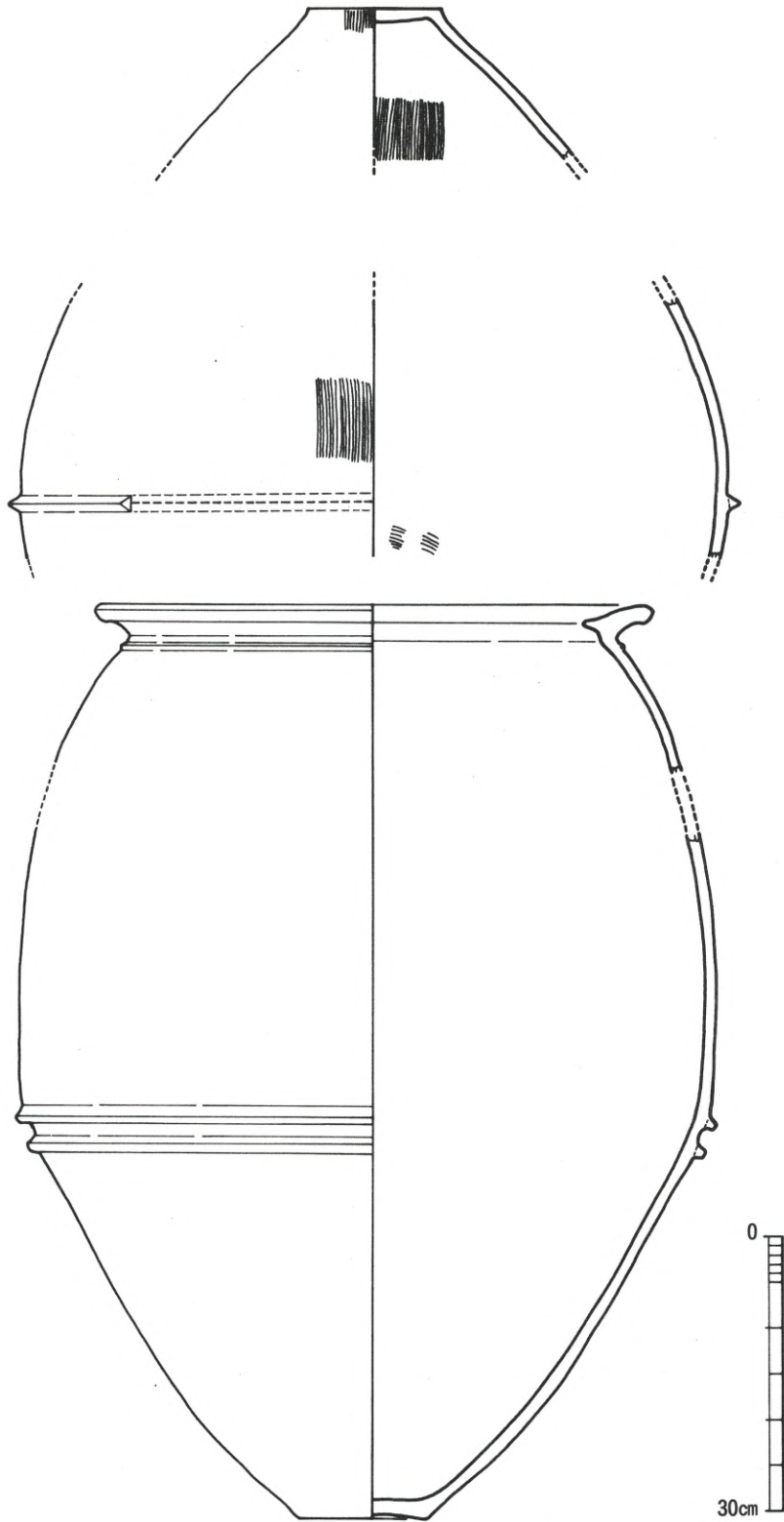
下甕(甕)口縁部は逆L字状を呈し内側に強く突出し、全体に内側に傾斜する。口縁端部は丸く納められ、頸部よりやや下方に三角突帯を1条配する。肩部から胴部中央にかけて緩やかに張り出し、中央からやや下方に2条のコ字状突帯を配す。胴部下半は直線的に細くなりしまりのない底部へと移行する。底部は若干の上げ底をなす。外面はナデで仕上げるが、内面はハケ目が消されずに残っている。口径60cm、器高推定99cm、底径14cmを測る。色調は明茶色、内面は黒色である。胎土には細礫(片岩、石英等)を多く含み、焼成は不良で全体に軟質である。

3 K (第44図、図版22)

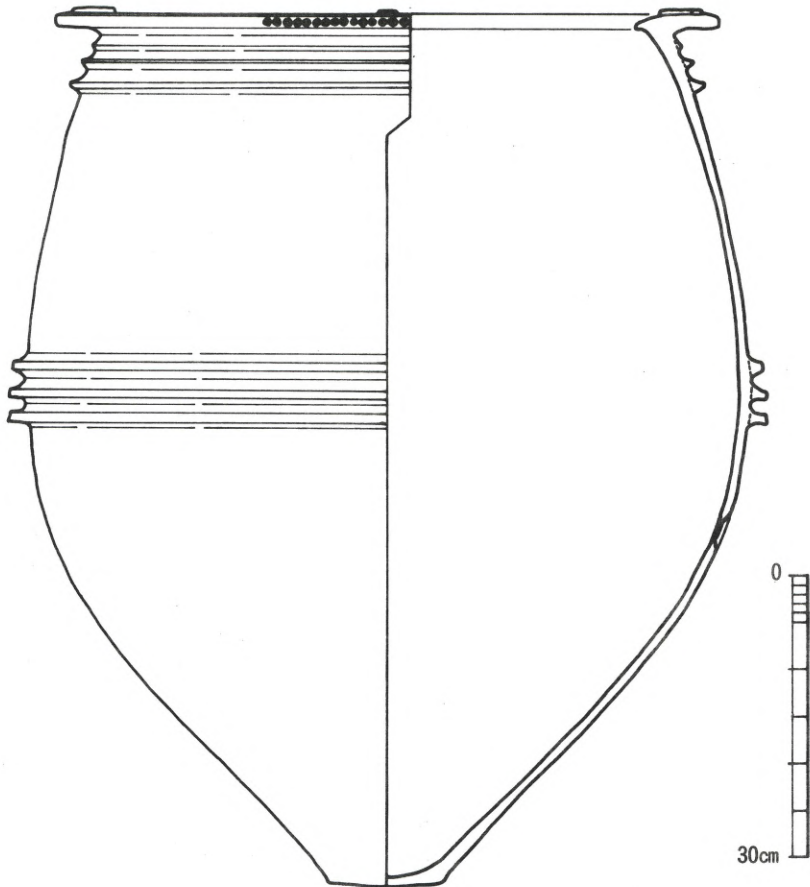
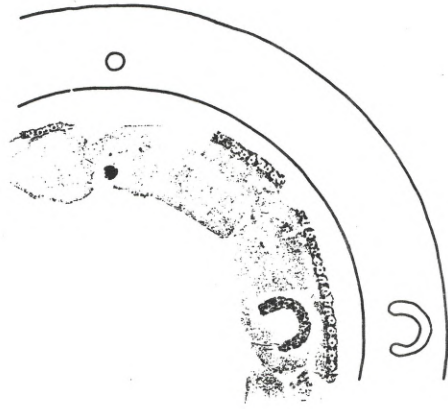
下甕(甕)単棺である。口縁部は逆L字状を呈し、口縁端部はかなり外側へと延び、口縁部内面は突出する。頸部から下方に3条の三角突帯を配すが、全体に大きく突出する。胴部は樽状に張り、しまった底部へと続く。胴部は大形のコ字状突帯が3条配される。底部は外方に若干張り出している。突帯の装飾以外に、口縁部の上面に円形とU字形の浮文を配しており、その位置からして、上面の4ヶ所に付されたものであろう。また、口縁端部には、円形の刺突文が連続して施してあり、個性が強いものである。浮文は須玖Ⅱ式段階での遠賀川流域の土器に見られるが、刺突文は8Kの凹線文状のものと同様に甕棺分布外の地域に求めねばならない。



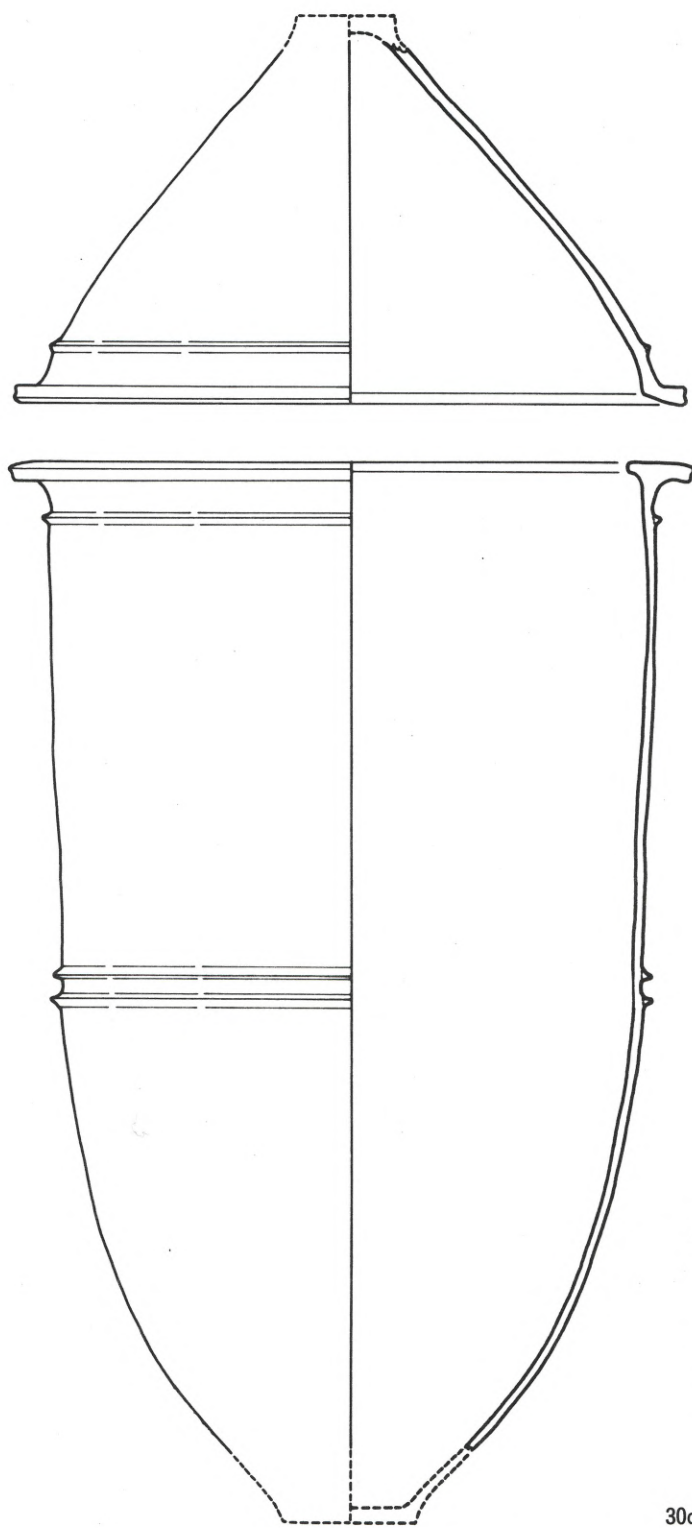
第42图 1号甕棺实测图(1/8)



第43图 2号甕棺实测图(1/8)



第44图 3号甕棺实测图 (1/8)



第45图 4号甕棺实测图(1/8)

内外面はナデで仕上げられ、ハケ目は見られない。口径70cm、器高93cm、底径12.4cmを測る。色調は黄褐色、胎土は荒く砂礫を多く含み、焼成はやや不良で軟質気味である。

4 K (第45図、図版22)

上甕(鉢)口縁部は逆L字状で内面への突出はなく、やや内傾する。口縁下には1条の三角突帯を配し、底部へと緩やかなラインで細くなる。底部は欠くものしまった造りであろう。内外面ともナデで仕上げるが、ごく一部にハケ目が残る。口径70.6cm、現高推定41.5cm、底径推定10.6cmを測る。色調は黄白色、胎土は細く良質で、焼成も良く硬くしまる。

下甕(甕)口縁部はT字状を呈し、外方にやや長く突出する。口縁上部は若干外傾し、口縁端部はナデによって内湾する。口縁下方に三角突帯を1条配し、肩部以下は直線的で胴部中央から緩やかにしまつて底部へと移る。胴部突帯は2条の三角突帯で2.5cmの間隔がある。内外面はナデで仕上げられ、口径72cm、推定器高105.5cm、底径12cmを測る。色調は白黄色、胎土は細く良好で茶色の粒子を含む。焼成は良好で硬くしまつている。

5 K (第46図、図版23)

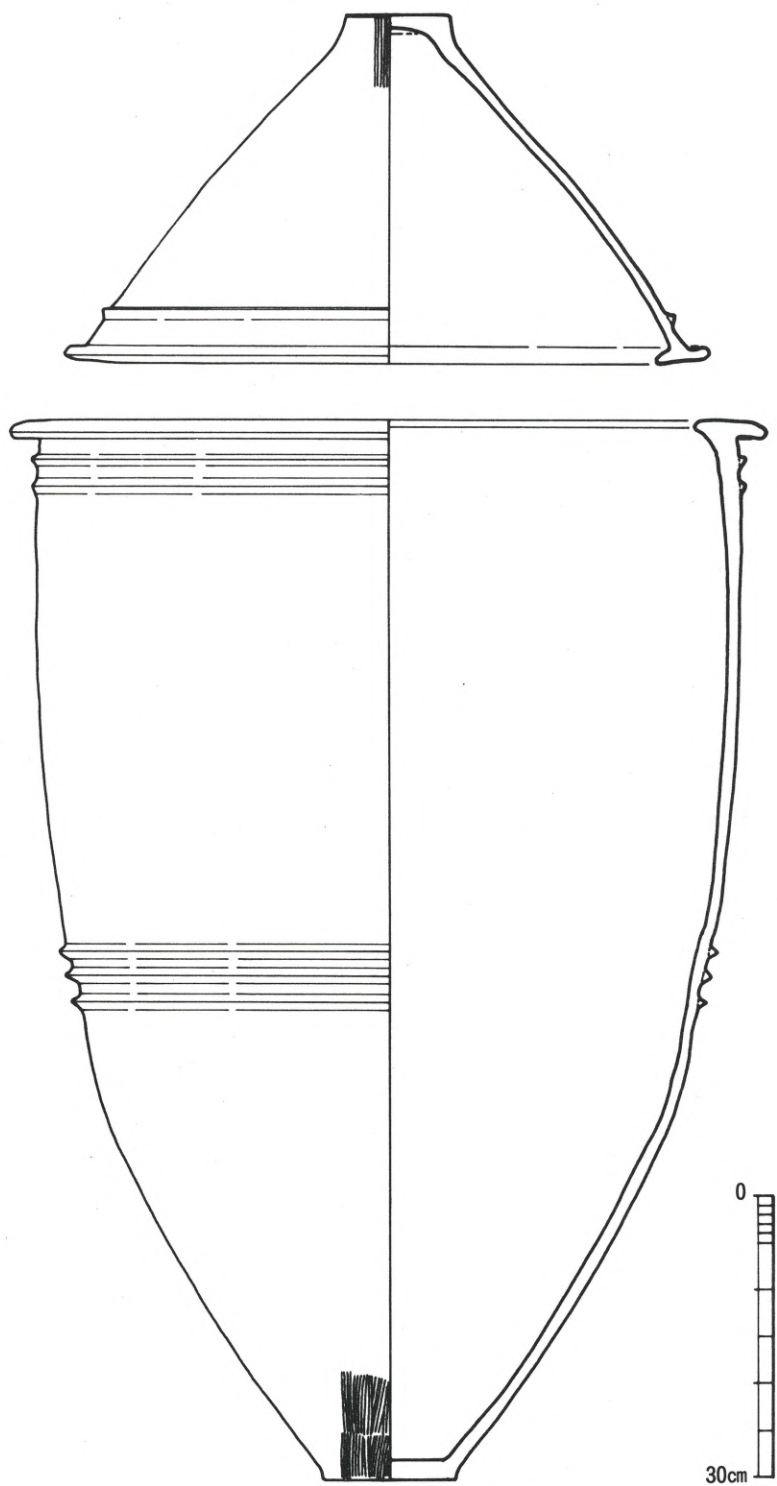
上甕(蓋)口縁部はT字状を呈し、外傾する。口縁下部には1条の三角突帯を配し、外壁のラインは直線的に底部へと続く。外面には1次調整のハケ目残り、ナデ仕上げが不充分である。口径67.8cm、器高37.2cm、底径11cmを測る。色調は白黄色、胎土は細い砂粒を含むが良好で、焼成は良く硬くしまつている。

下甕(甕)口縁部はT字状を呈し、上面は水平である。口縁下に2条の突帯を有し、わずかに肩部が張るものの緩やかに細くなり底部へと続く。胴部には3条の三角突帯を配し、底部はややしまる。内外面はナデで仕上げられるが、底部付近にハケ目が残る。また器壁はやや厚いが特に口縁下突帯付近は2cm程である。口径79.5cm、器高113cm、底径14cmを測る。色調は明黄褐色で、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で硬くしまつている。

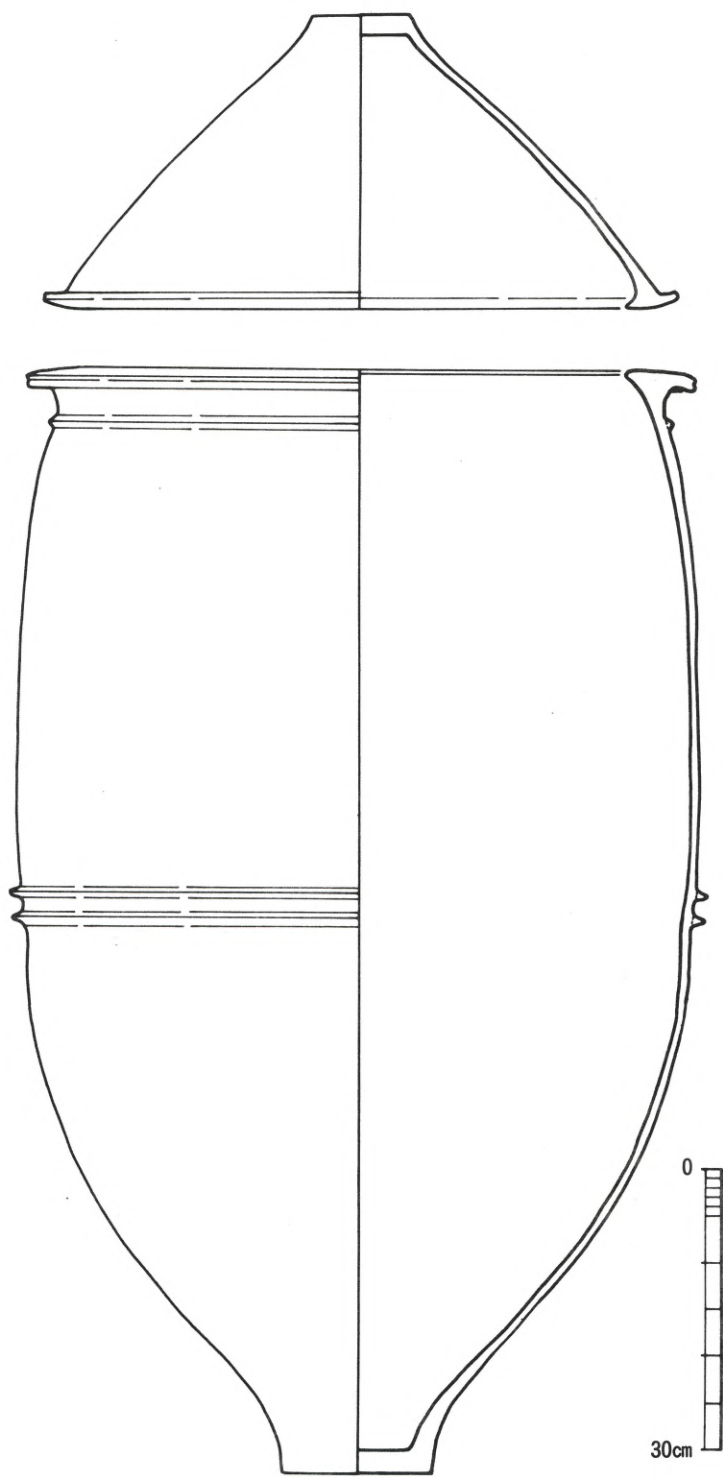
6 K (第47図、図版23)

上甕(蓋)口縁部はT字状を呈し、やや外傾する。胴部は若干張り出しながらも、底部へと細くなる。内外面はナデで仕上げられる。口径67cm、器高31cm、底径10cmを測る。色調は赤褐色で、胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや不良で軟質さを示す。

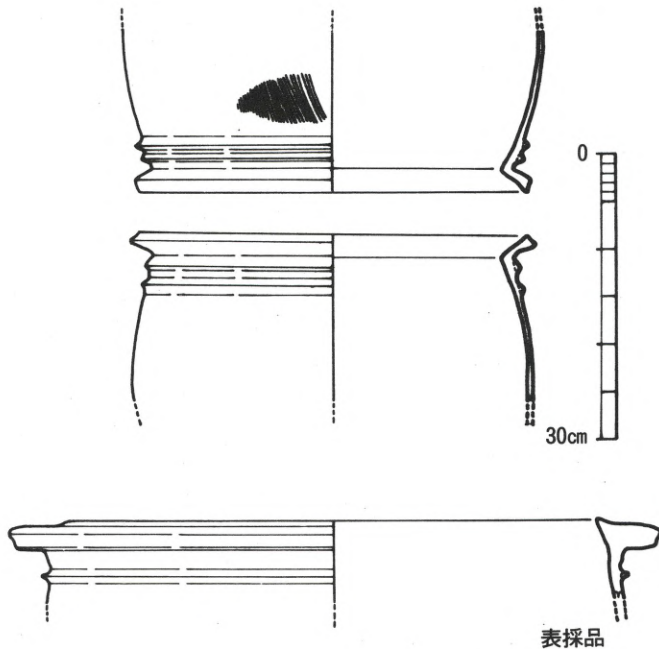
下甕(甕)口縁部はT字状を呈し、やや外傾する。内面の張り出しは強く、口縁下に1条の三角突帯を配す。肩部から胴部中央、そして下半へと緩やかな曲線で張り出すが、底部付近では急に細くしまる。胴部突帯は2条の三角突帯で、間隔はやや広い。内外面はナデで仕上げる。口径は70.4cm、器高117.8cm、底径16cm、色調は赤褐色、胎土は片岩、石英、雲母、桂化木⁽²⁾(1×0.3cm)等を含み、粘土は白色系と赤色系のものを混ぜたものか、接合面を境として白色系と赤色系に分離している。焼成はややよい。



第46图 5号甕棺实测图(1/8)



第47图 6号甕棺实测图(1/8)



第48図 7号甕棺と表彩品実測図(1/8)

7 K (第48図)

7 Kは由一の小形棺である。

上甕(甕)口縁部は屈接口縁で跳ね上げ状である。口縁下に2条の三角突帯を配す。胴部は緩やかに張り出して行く。外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。口径21cm、現高8.4cmを測る。

下甕(甕)口縁部は屈接口縁で跳ね上げ状を呈す。口縁下に2条の三角突帯を配す。胴部は緩やかに張り出して行く。口径21.4cm、現高8.8cmを測る。

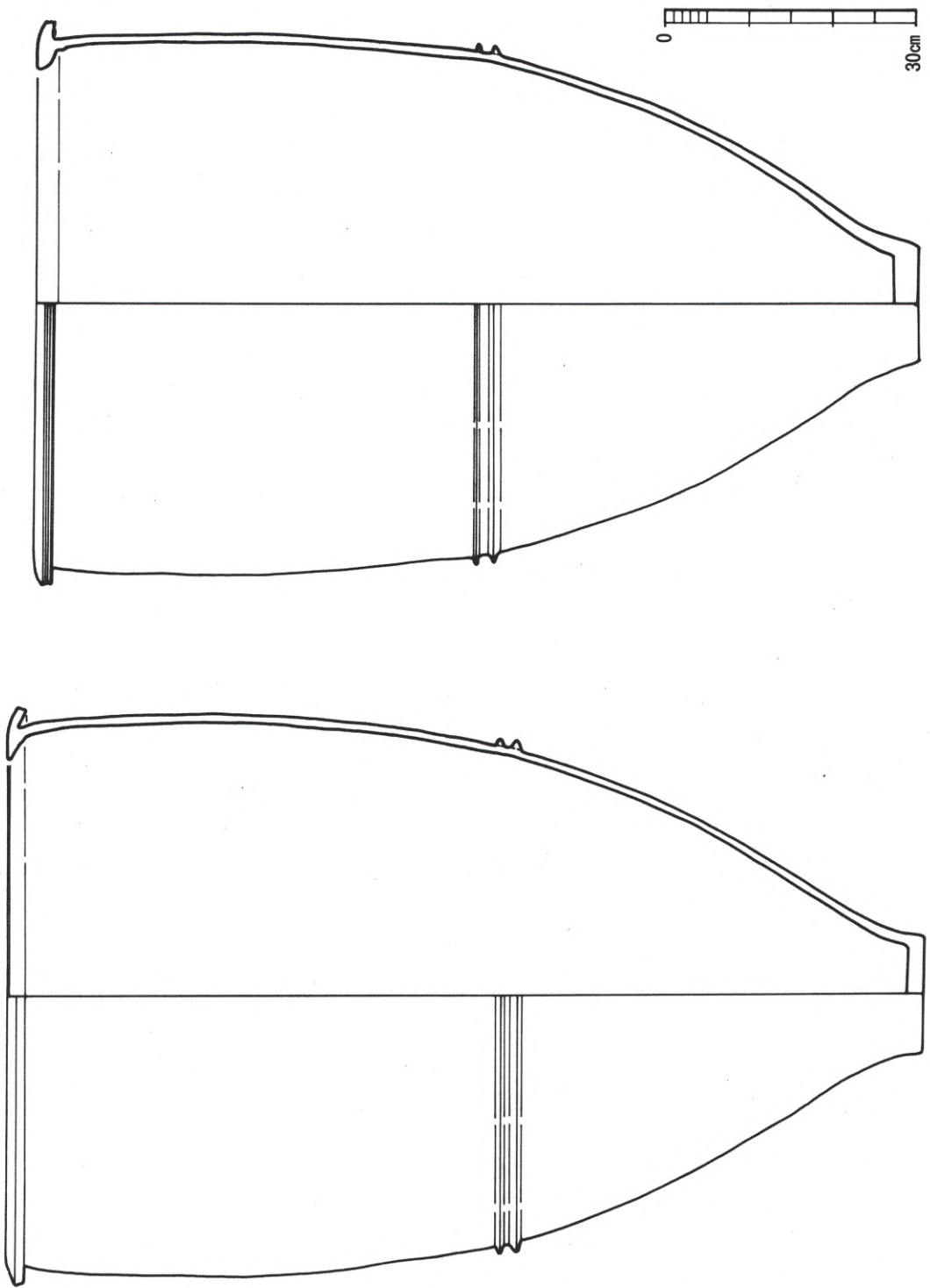
上下甕ともに色調は明茶褐色で胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良である。

8 K (第49図、図版23)

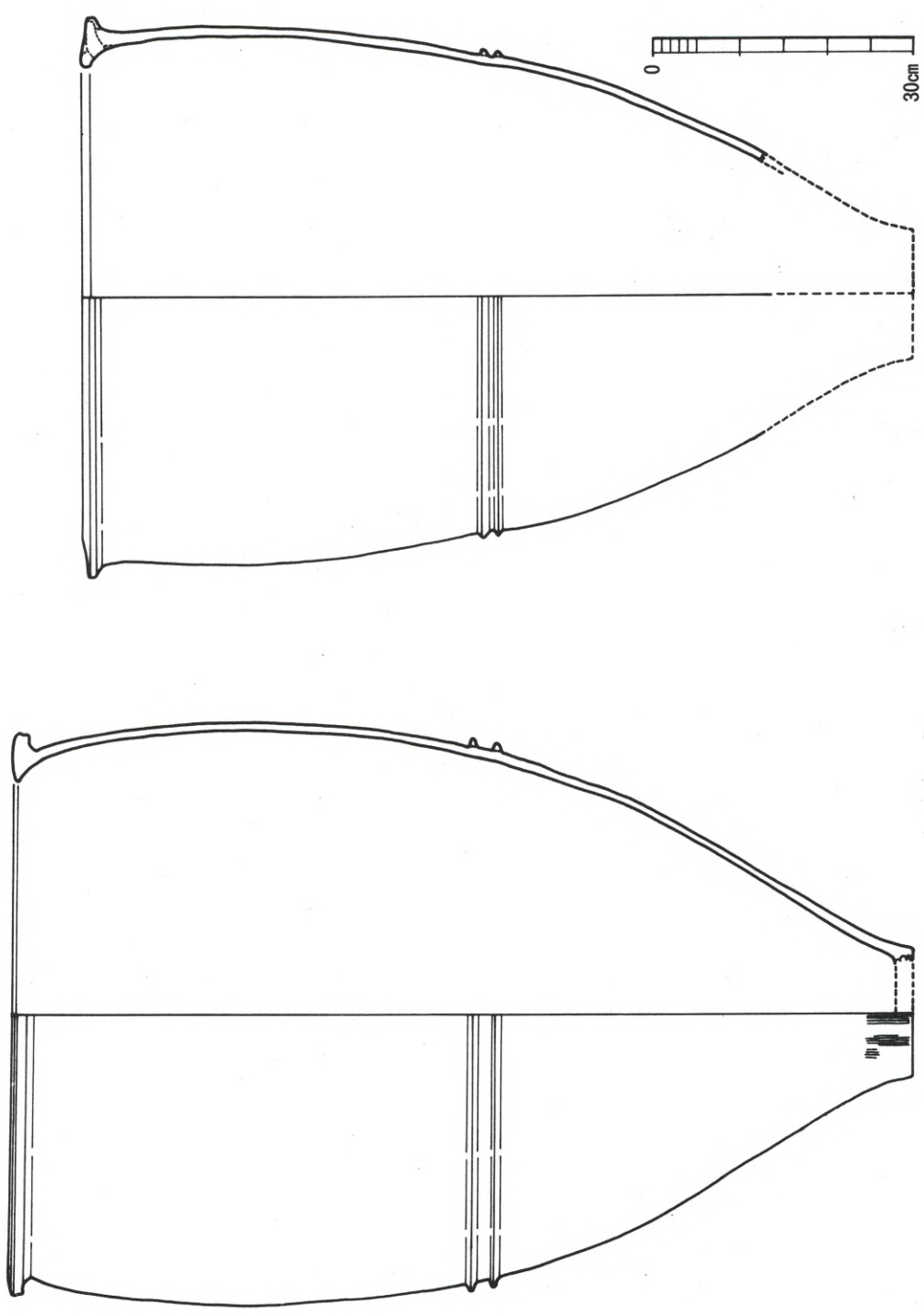
中細形銅戈を副葬した甕棺である。

上甕(甕)口縁部は厚くT字状を呈し、やや外傾する。外面よりは内面への突出が若干強い。口縁下の突帯はなく、胴部上半は直線的で、胴部突帯付近から下へと急に細くなり底部へと続く。胴部突帯は2条の三角突帯で、上段が薄く造られ、間隔が2cm程ある。特記する点として口縁部に2条の凹線文状のラインが見られる。これは全体の1/2程で装飾として施されたものとは考えにくい。しかし、明確なラインはあり、口縁調整過程での産物ではなかろうか。例えば、ナデによって口縁端部を仕上げる際に工具もしくは技術的に2条のラインをうむ原因があろう。ただ、口縁の周囲1m以上に連続して付されており、回転台等による回転運動を利用しての製作を行っていた可能性もあり、凹線文との関係も考慮する必要がある。内外面はナデで仕上げられている。口径69cm、器高105cm、底径14cmを測る。色調は黄褐色、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良で表面の剥離が見られ。

下甕(甕)口縁部はT字状を呈し、外傾している。内面への突出は外面のそれより強く、厚味を有する。口縁下の突帯はなく、緩やかなラインが底部へと続いて行き、ごく自然な感じを与える。口縁端部はナデによって凹面をなす。胴部突帯は中央よりやや下方で、2条の三角突帯であり、上段が若干小さい。内外面はナデで仕上げられ、口径71cm、器高108.5cm、底径14.3cmを測る。色調は黄褐色、胎土は砂粒を多く含み焼成はやや不良で表面の剥離が見られる。



第49图 8号甕棺实测图(1/8)



第50图 9号甕棺实测图 (1/8)

9 K (第50図、図版24)

細形銅戈を副葬した甕棺である。

上甕(甕) 口縁部は厚くT字状を呈し、外方より内側へ強く突出するもので、やや外傾するタイプである。口縁下の突帯はなく、胴部上半がやや張り出し、中央部から底部へと緩に細くなる。胴部突帯は2条の三角突帯であるが、全体に貧弱である。内外面はナデで仕上げられる。口径66cm、推定器高95cm、底部は不明である。色調は黄灰褐色、胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良である。

下甕(甕) 口縁部は厚くT字状を呈し、内側へ強く突出するもので、口縁上部は水平であるが緩な曲線を描く。口縁下の突帯はなく、胴部上半が張り出しており、曲線を描いて底部へと続くもので、上甕に比べ丸味を有している。胴部突帯は2条の三角突帯であるが、薄手の造りで貧弱である。内外面はナデで仕上げられているが、底部付近に一部ハケ目が残る。口径66cm、器高103cm、底径15.2cmを測る。色調は黄灰褐色、胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良である。

10 K (第51図、図版24)

上甕(蓋) 口縁部は逆L字状を呈し、内側への突出はなく全体に外傾する。胴部ラインは直線的に底部へと続き、底部自体はしまりが無い。器壁は均一的で底部の厚味はない。内外面は1次調整のハケ目が残る。口径88cm、器高37cm、底径14cmを測り、他の蓋に対し器高は変化ないが、口径が広がっている。色調は明赤黄色、胎土に砂粒(荒い石英粒)を含む。焼成は良い。

下甕(甕) 口縁部は水平なT字形を呈し、内外両方に突出する。口縁下には1条のコ字状突帯を施し、胴部上半は強く張り出し中央部付近から細くしまり始める。下半で再びしまりが強くなって底部となる。全体に器壁は薄く、特に下半部は極度に薄くなっている。胴部突帯は3条のコ字状突帯を配す。内外面はナデで仕上げる。口径77cm、器高112cm、底径15cmを測る。色調は黄灰色、胎土は砂粒(石英、長石、雲母、桂化木)を含み、焼成はやや良好となっている。

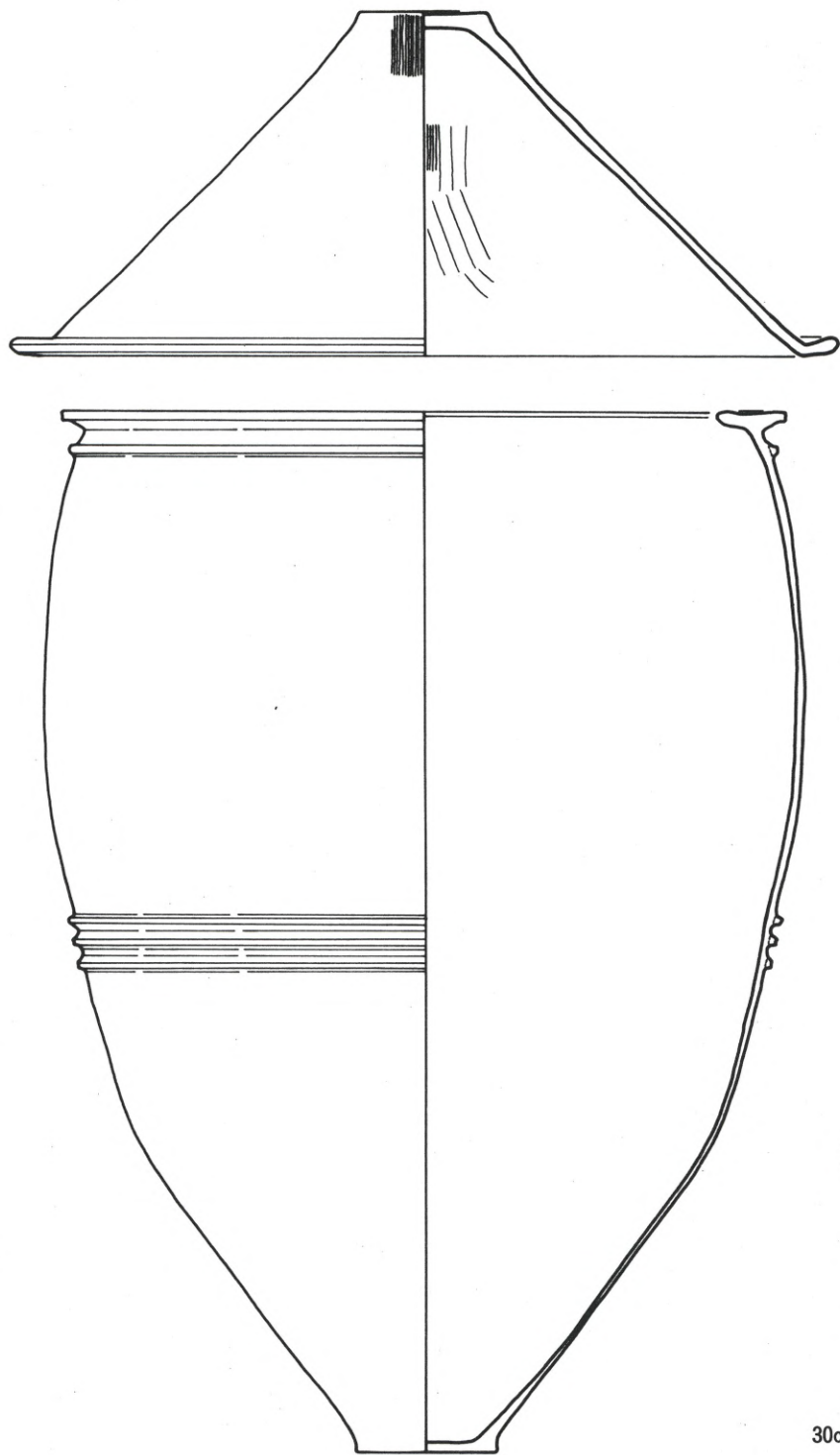
11 K (第 図、図版24)

上甕(壺) 壺の上半を打ち欠き下半部を使用する。胴部最大径付近に三角突帯2条を配す。内外面はナデで仕上げる。最大径60.6cm、現高40.5cmを測る。色調は明灰褐色、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良い。

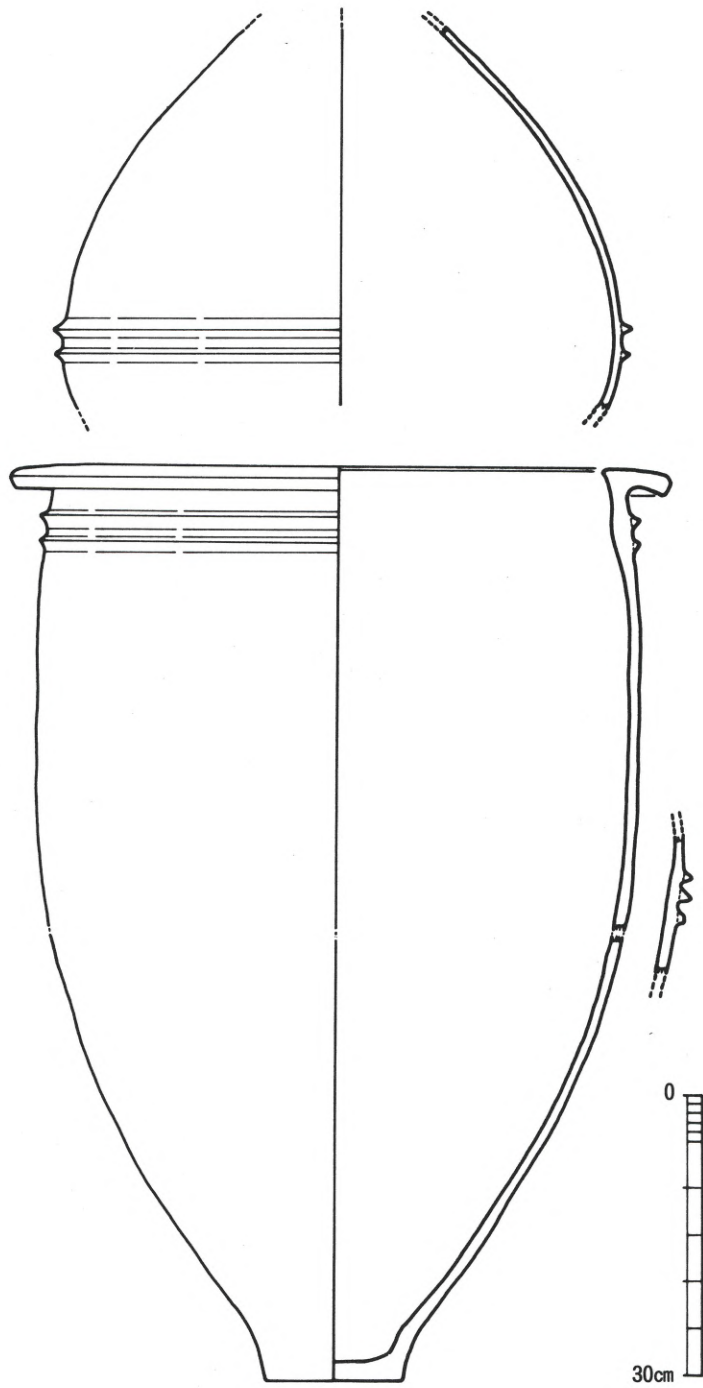
下甕(甕) 口縁部は逆L字状を呈し、内面への突出は少なく、外方は大きく突出しやや厚味があり、若干ではあるが外傾する。口縁下には2条の三角突帯を配し、胴部は直線的で、緩やかな自然のラインで底部へと移行する。胴部突帯は3条であり、上段2条が三角突帯で下段の1条はコ字状突帯である。内外面はナデで仕上げる。口径69cm、器高105cm、底径14cmを測る。色調は赤黄褐色、胎土は砂粒を含み、焼成はよい。外面に黒塗りの跡が残る。

表採の甕棺 (第48図)

口縁部片である。口縁部はT字状で厚味がある。内面の突出は上方に向い段を形成する。外



第51图 10号甕棺实测图 (1/8)



第52图 11号甕棺实测图 (1/8)

方への突出は大きく角張る。口縁下の突帯は1条の三角突帯である。口径70cm、現高8.5cm、色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は良好で硬くしまる。

表採品は大形棺の一部であり、少なくとも12基の甕棺が存在したことになる。

甕棺の編年については後に述べることとし、ここでは、墓壙の切り合関係を示し、大まかな変遷について記して置く。

墓壙の切り合によって前後関係の明確な点を先に示すと、4Kと6Kは5Kに切られており4K⇒5K、6K⇒5Kという前後関係が明確になる。また、11Kは10Kに切られている点で11K⇒10Kという関係が成り立つ。前者の4～6Kの関係では、三角突帯数の変化に注目しよう。口縁下が1条から2条へ、胴部が2条から3条へと増加する点で、古から新への変化を読みとることが出来る。また後者では、三角突帯からコ字状突帯への変化という点で重要である。口縁下2条の三角突帯から2条のコ字状突帯へ、また、胴部では3条突帯の中で2条の三角突帯と1条のコ字状突帯の組み合わせから3条すべてコ字状突帯へと移行する点が見られる。

以上を整理すると、大形棺において口縁下突帯が1条三角突帯から2条に増加し、さらに形状がコ字状へと変化する。胴部も同様に2条の三角突帯が3条へと増加、さらに三角突帯がコ字状へと変化するのが明確となった。

口縁下に突帯を配する一群と異なり、胴部のみに突帯を有する1群(8K、9K)は、一線を異にするもので、さらに古式に位置されよう。次に、2K、3Kであるが、これらは最終段階に位置する一群として位置付けられよう。つまり、8、9K⇒1、4、6K→5K→11K→10K⇒2、3Kという大まかな変遷が提示される。

(2) 土器 (遺構内検出)

7M内埋置土器 (第53図)

口縁部を欠くが壺であり、形状は胴部が大きく張り出すソロバン玉形を呈す。頸部から胴部にかけて細身のコ字状突帯を4条配すもので、多条突帯となる。内外面はナデで仕上げられ、現高24.5cm、最大径24.4cm、底径6.6cmを測る。色調は黄褐色で胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良である。須玖I式である。

1M検出土器 (第54図. 1)

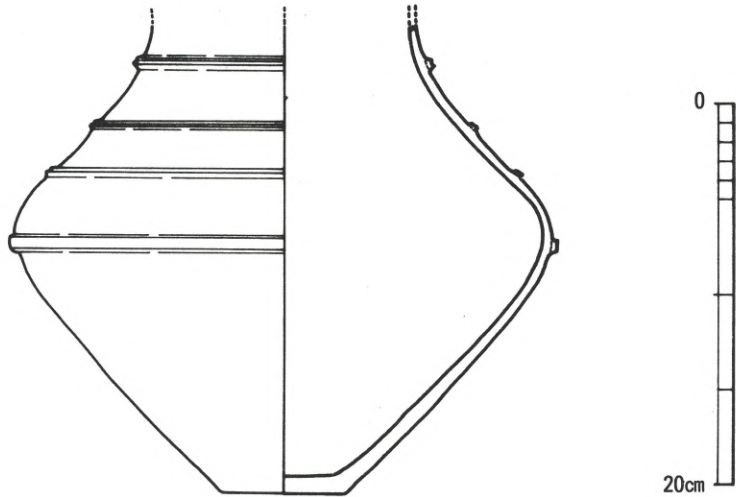
広口壺の底部片であり、胴部から底部へのラインは比較的緩やかである。須玖式である。⁽⁴⁾

2M検出土器 (第54図. 2)

甕の肩部片であり、屈折状の口縁部と頸部下方の三角突帯を特徴とする。須玖I式である。

4M検出土器 (第54図. 3～6)

3は逆L字口縁の甕口縁部片、4は屈折口縁の甕口縁部片である。5は厚味のある未発達な鋤形口縁壺の口縁部片で、6は短頸壺の頸部片である。須玖I式である。



第53図 7号木棺墓内検出土器実測図(1/4)

6 M検出土器 (第54・55図. 7~27)

木槨崩壊に伴う崩落土中より大半が検出されている。7~18は、逆L字状か屈接状の口縁部片である。突帯を付すものは三角突帯で、頸部から下方に位置する。19、20は甕の底部であり20は底が高くなっており古式の例である。21~27は鋤形口縁及び広口の壺の口縁部と胴部の破片である。23が外方に延びて若干垂気味の部分と、内側への突出もある点で新相の部分を示すが、その他はどれも短く、発達していない造りであり、古相を示す。全体に見るならば、城ノ越式を一部に含むが他は須玖I式であり、大半は古相を示すものの、3は新相を示している。

7 M検出土器 (第55図. 28~32)

28は屈折口縁の甕の口縁部片で、29は甕の底部である。30~32は鋤形口縁及び広口の壺の口縁部片である。特に鋤形口縁壺は口縁部が未発達であり、須玖I式と思われる。また、他の土器もそう考えて矛盾はなかろう。

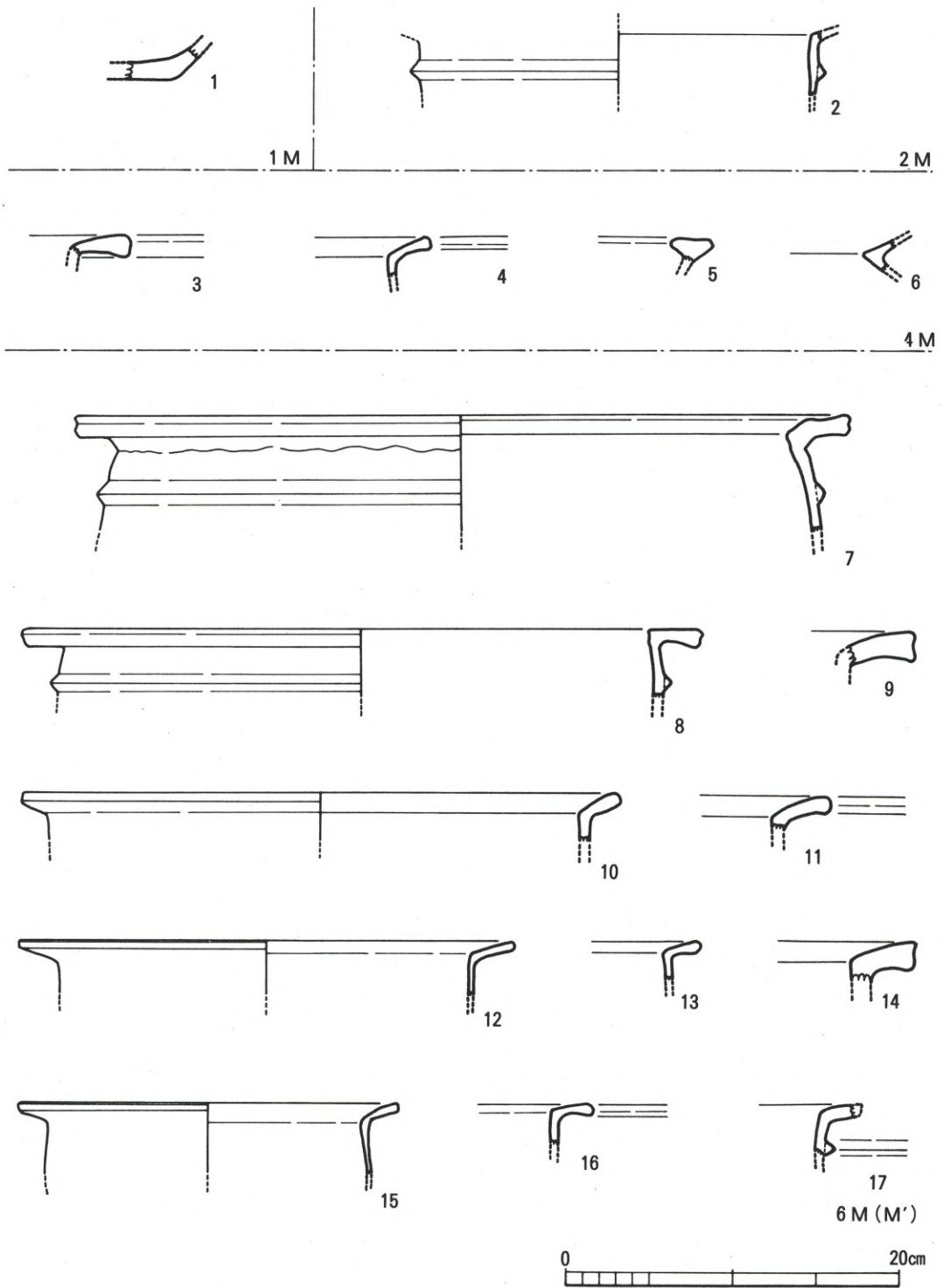
8 M検出土器 (第55図. 33~38)

33、34は甕の底部である。37は口縁部が未発達な甕の口縁部片で、やや古相の印係を有す。35は壺の胴部片であり、38は鋤形口縁壺の口縁部片で、若干の発達を見ることが出来る。36は脚状の底部を付す甕の破片かとも考えられる。34は底が薄いし、38は若干内外両方に突出しはじめている点で、須玖I式でも若干の新しさを感じる。

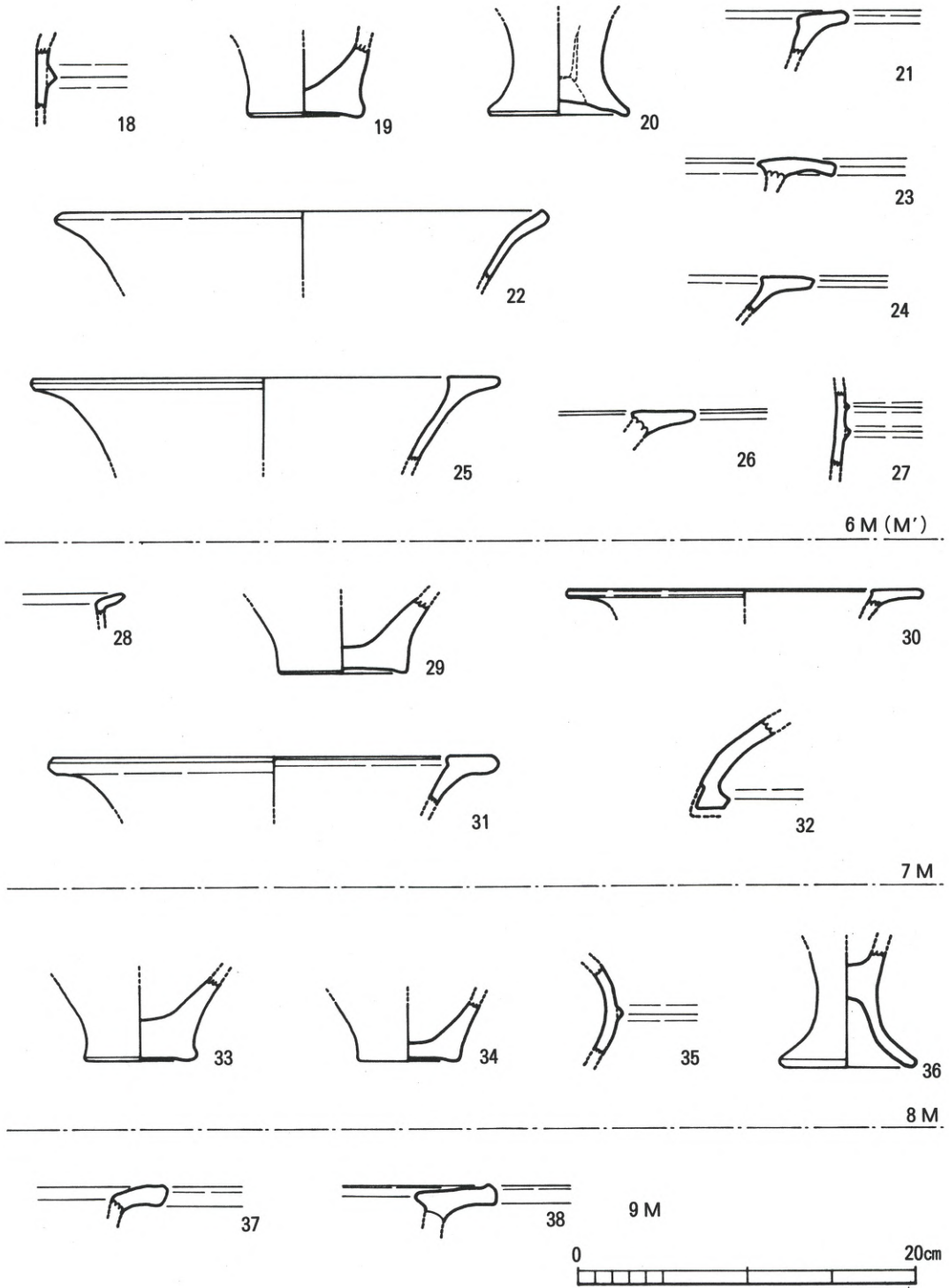
3 K検出土器 (第56図. 39、40)

39は甕の頸部片で下方に三角突帯を1条配す。

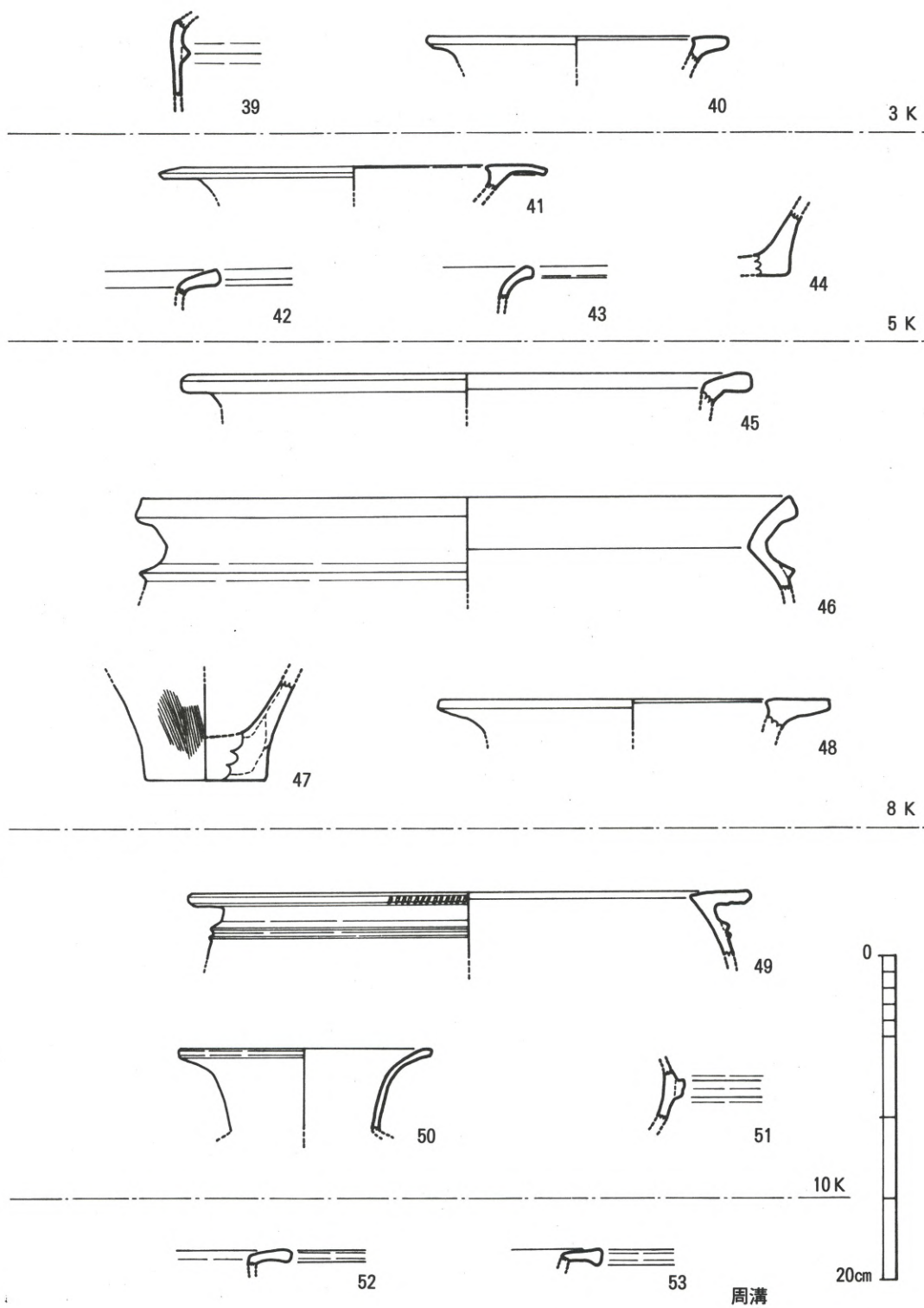
40は鋤形口縁壺の口縁部片で、未発達な口縁である。須玖I式である。



第54図 木棺墓（木槨墓）検出土器実測図（1/4）



第55图 木棺墓（木槨墓）検出土器実測図（1/4）



第56图 甕棺墓、周溝部検出土器実測図(1/4)

5 K 検出土器 (第56図, 42~44)

42、43は屈折口縁甕の口縁部片である。44は甕の底部片でやや薄い造りである。41は鋤形口縁壺の口縁部片で発達しており、丹塗土器片もある点から、須玖Ⅱ式に位置付けられよう。

8 K 検出土器 (第56図, 45~46)

45、46は屈折口縁甕の口縁部片で、47は甕の底部、48は鋤形口縁壺の口縁部片で、未発達な造りである。須玖Ⅰ式でも古相を示す。

10 K 検出土器 (第56図, 49~51)

49は口縁の発達した丹塗磨研の甕口縁部片であり、口縁下にM字状突帯を配す。口縁端部にはキザミ目を施す。50は広口壺の口縁部片、51は壺の胴部片でコ字状突帯を施す。特に、丹塗の甕は須玖Ⅱ式を示す。

周溝内検出土器 (第56図, 52~53)

両者とも屈折口縁の甕口縁部で、須玖Ⅰ式と考えられる。

(3) 青銅器

当遺跡では、細形銅戈1点、中細形銅戈2点、細形銅劍(切先)1点を検出している。

細形銅戈 (第57図、巻頭図版1)

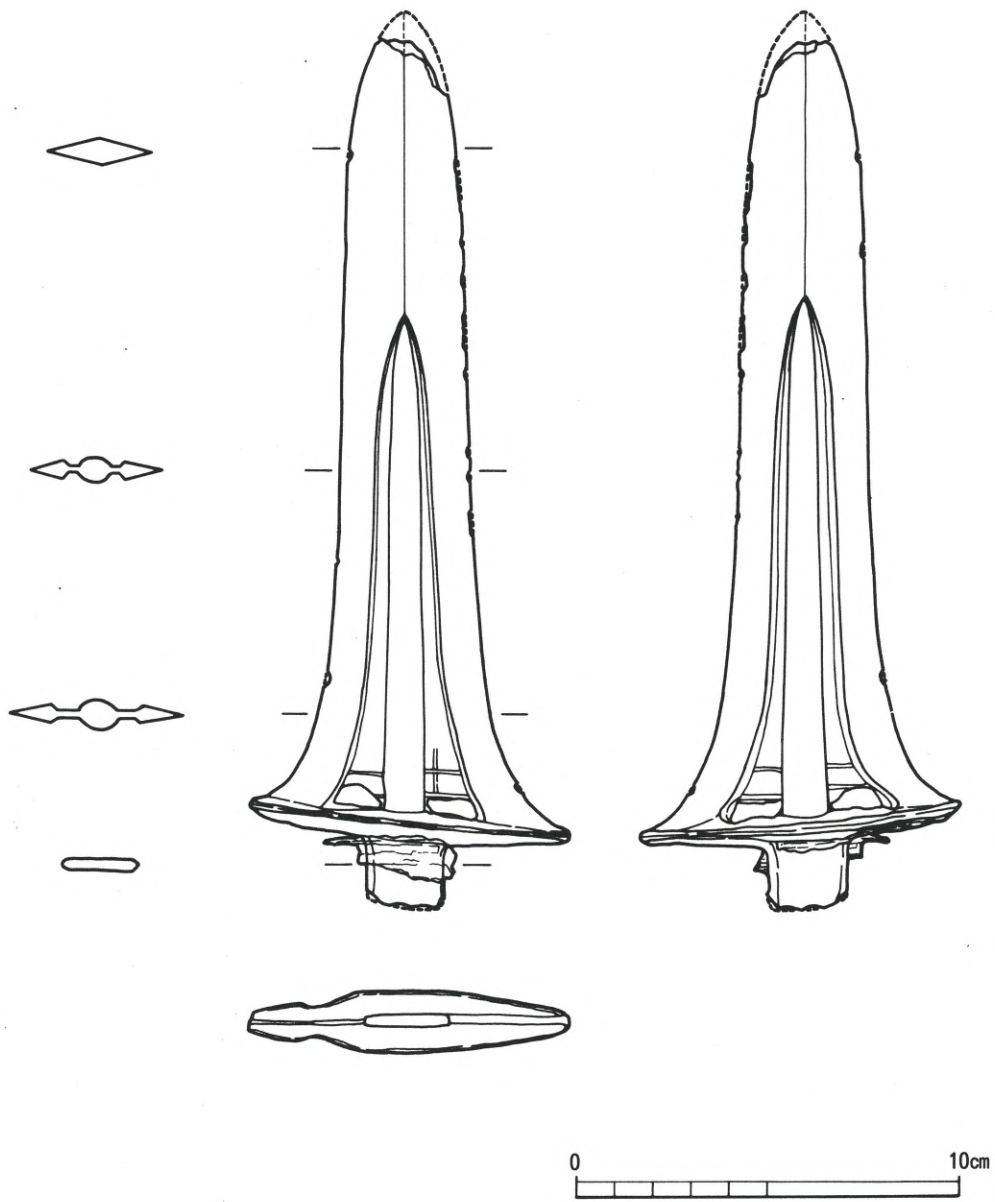
9 Kの下甕内より検出されたものである。色は灰緑色を基本とするが、全体に鉛色がかった光沢を放つ。全体に保存の良好な整品で、重量感がある。全長23.2cm、推定全長23.9cmの重厚な作りである。身は直線的な緩やかなラインで、厚さは0.6~0.8cmである。関幅8.5cm、厚さ1.6cm、茎は方形で、長さ1.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmを測る。背は断面形が楕円形で鏑はない。樋の基部には双孔があり、その直上には2本の横線(突線)がある。また、樋部分はサビによって明確ではないが、綾杉文は見られない。ただし、一部に縦線文(突線)的なものが確認される。茎の両面には木質が残っており、断定は出来ないが黒漆が塗られた柄を装着していたようだ。

岩永氏分類⁽⁵⁾によるところの細形銅戈ⅡC類で、法量やスタイル的に近いものは、福岡県須玖岡本13号甕棺内検出例である。

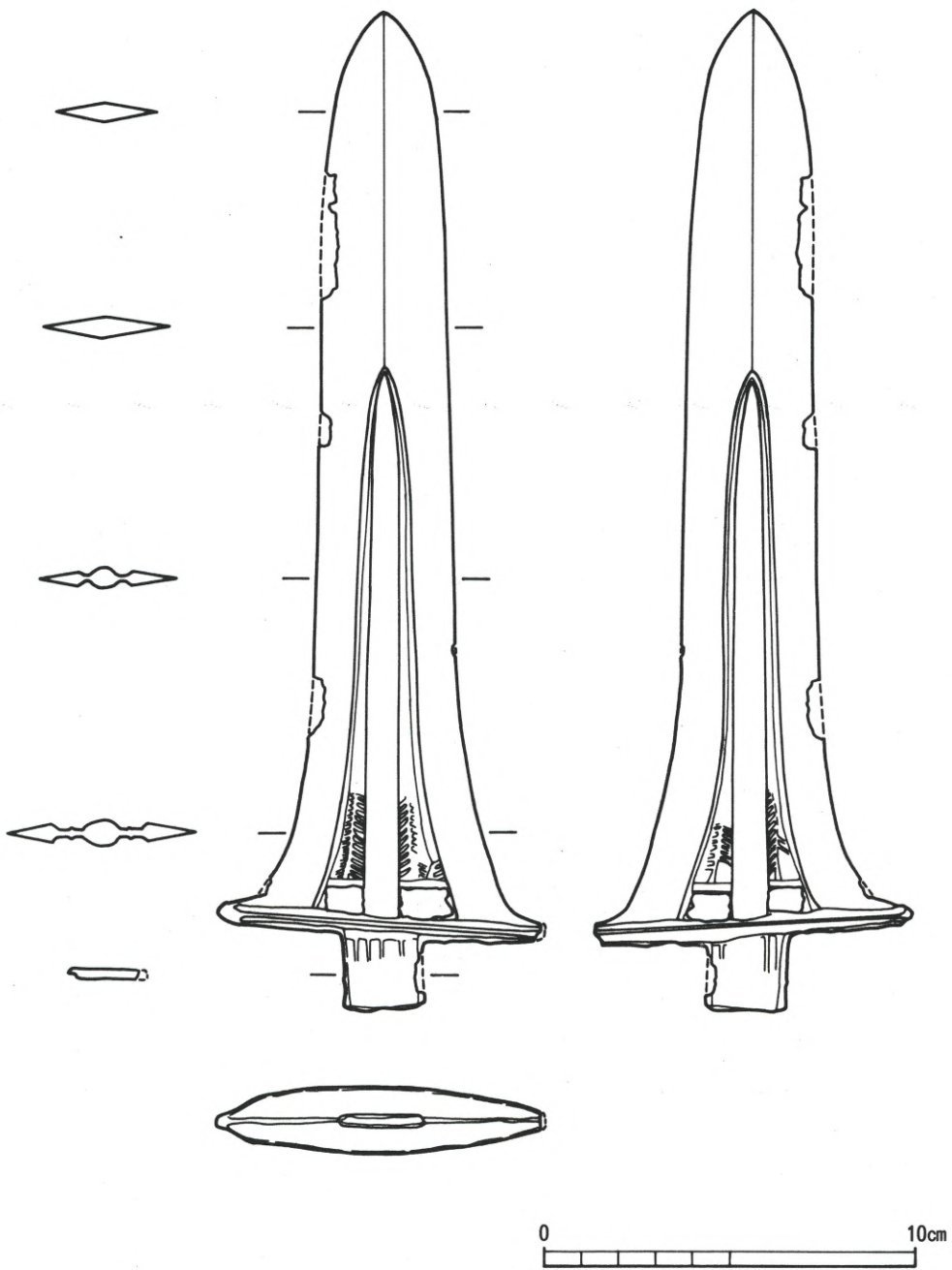
中細形銅戈 (第58図、巻頭図版1)

8 Mの下甕内より検出されたものである。色は明灰緑色でほぼ完形品である。全長27.8cmで身幅は、先の細形銅戈とほぼ同じであるが、長さのみが加わったという感じで、直線的に延びて行き、厚さは0.5cmである。関幅8.8cm、厚さ1.8cm、茎は方形で、長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmを測る。背は断面形が楕円形で鏑はない。樋の基部には双孔があり、その直上には1本の横線(突線)があって、その位置から上部へと綾杉文が施される。刃部は作り出されているし、茎には連続的な縦線文が見られる。

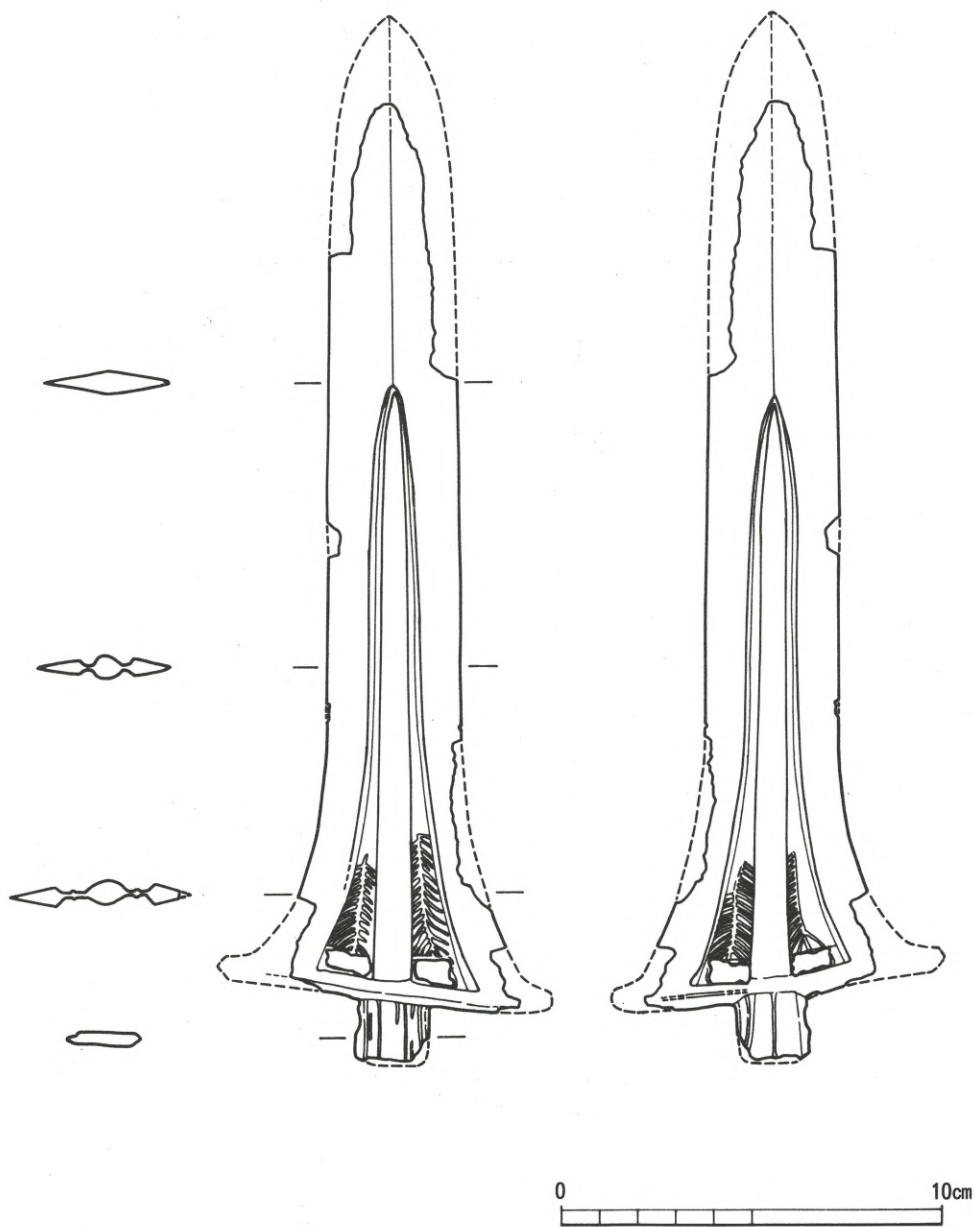
岩永氏分類⁽⁶⁾によるところの中細形銅戈a類である。



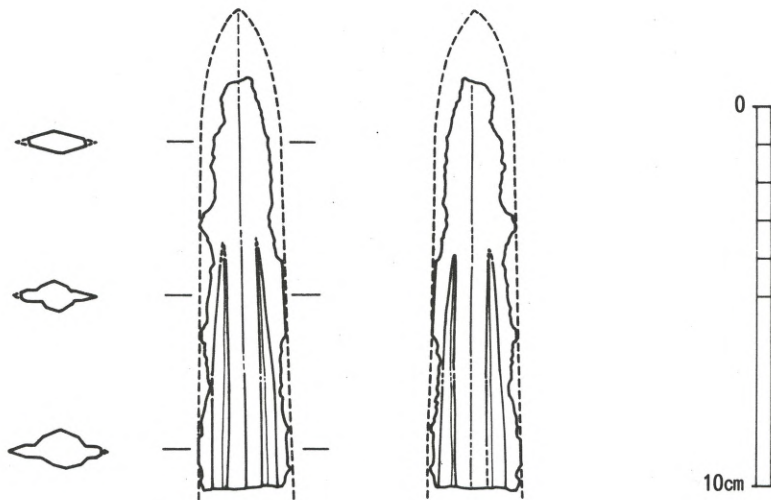
第57図 9号甕棺内検出細形銅戈実測図(1/2)



第58図 8号甕棺内検出中細形銅戈実測図(1/2)



第59図 6号木棺墓（木槨墓）内検出中細形銅戈実測図（1/2）



第60図 2号木棺墓内検出細形銅剣切先実測図(1/2)

中細形銅戈(第59図、巻頭図版1)

6 M (M') 内より検出されたものである。色は暗灰緑色を呈し、切先及び関等の一部を欠くが、本来は完形品である。現長25.8cm、推定長は28cm前後であろう。身幅や厚さ、ラインの延び等8 K内検出の例と同じである。茎は方形であり長さ1.7cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmを測り、8 Kのものより小ぶりであるが若干厚味がある。背は断面形が楕円形で鑄はない。樋の基部には双孔があり、その直上に細い1本の横線(突線)があつて、その位置から上部へと綾杉文が施される。刃部は作り出されているし、茎には連続的な縦線文が見られる。ちなみに、8 Kの銅戈の場合、樋あるいは背の長さが15.3cm前後であり、本資料が16cm前後と若干長くなっている。

岩永氏分類⁽⁷⁾によるところの中細形銅戈a類である。

細形銅剣(切先)(第60図、巻頭図版1)

2 M内より検出されたものである。色は黒味をおびた緑色を呈し、先端と身中央下半を欠くものである。表面は重機のキャタピラによって剥離したケ所があり、先端も同様に欠損しており、遺構面に露出していたものである。従つて、本来は切先か完形品かという判断は出来ない。また、折れた面が古いからといって棺内で折れる場合もあり断定の材料にはならない。現長10.75cm、推定長は12.5cm前後であろう。身幅は2.6cm、厚さ1cm程である。鑄が通り、樋部も左右対象である。ただし、断面形では両面の鑄にズレが生じており、研ぎ出しに問題がある。⁽⁸⁾刃部はよく研ぎ出されている。



第61図 3号木棺墓内勾玉、管玉検出状況実測図(1/4)

(4) 玉類

玉類は3Mから一括で検出されており、翡翠製獣形勾玉1点、翡翠製勾玉6点、碧玉製管玉178点から成っている。検出状況(第61図、図版14)は、長さ30cm、幅21cmの楕円形状に玉類が集中しており、管玉の間に勾玉があり、間隔は一定のように見受けられる。

翡翠製獣形勾玉(第62図、巻頭図版1)

1 色調は白色部分が1/3で、他は緑色である。全体に厚味のある丸い感じで仕上げられる。孔は両側から開けられ、背とは反対の腹部側に2ヶ所の袂りがある。袂り面はそのまま表面が白く風化し、周囲の綾線はやや磨滅する。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ1.8cmである。

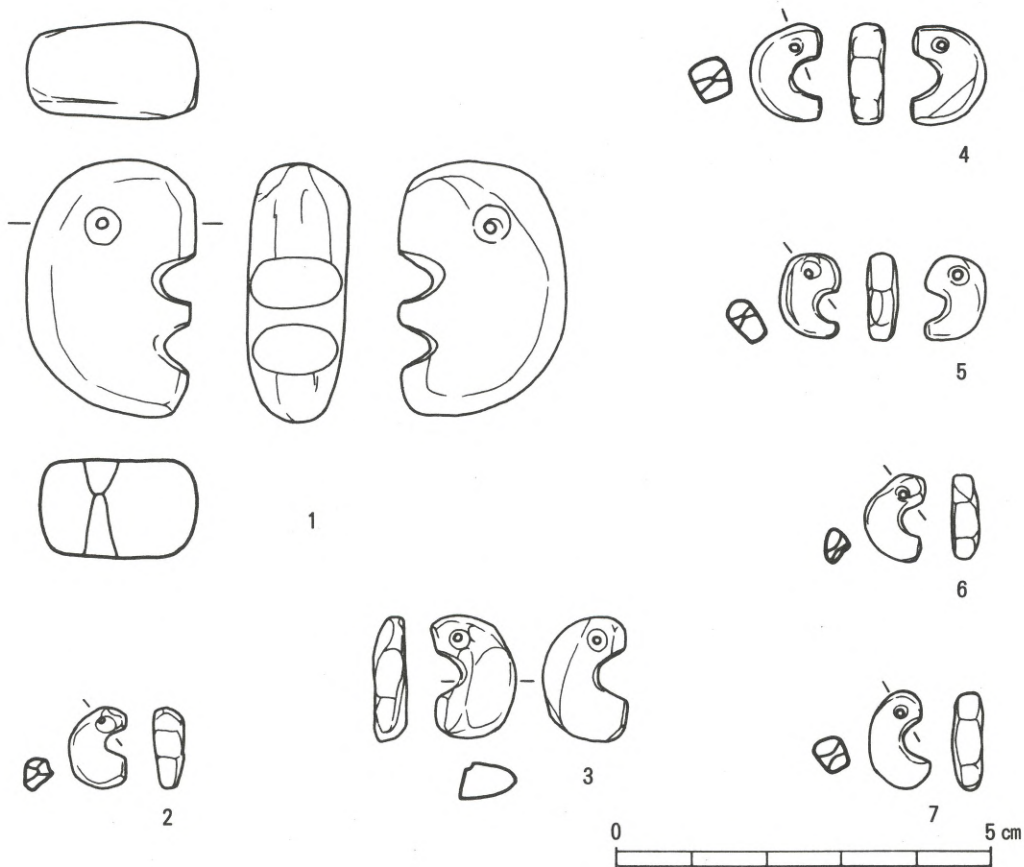
翡翠勾玉(第62図、巻頭図版1)

2 色調は白色部分が多く薄い緑色を呈す。研磨面に凹凸があり雑な作りである。長さ1.2cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmである。3色調は白色部が多いが緑色を呈す。一部に削りこまれた傷状の部分がある。長さ1.6cm、幅1cmで雑な作りである。4は袂状耳飾的な形態で、緑色を呈す。上下端部を研磨してそろえている。長さ1cm、幅0.6cm。5は最も定形化した勾玉に近く、色調は白緑色であり、研磨もていねいである。長さ1.1cm、幅0.8cm。6は袂状耳飾的な形態で、白色部分が多いが緑色を呈す。長さ1.1cm、幅0.8cm。7は勾玉的で緑色を呈す。長さ1.3cm。幅0.8cm。いずれも孔は両側からのもので、5以外の袂り込みは、そのための研磨のみであり、1の獣形と同様である。5は形態や色調、研磨が違っており異質であると同時に、それ以外は一連の製品とも考えられる。

なお、勾玉類については、新潟県の糸魚川周辺で産出した翡翠を使用したようである。

碧玉製管玉(第63図、巻頭図版1)

178個の製品は、色調が全部薄い灰緑色で統一され、径は2mm前後と均一である。長さは4~10mmで、5~8mmが最も多く見られる。色と大きさが均一で、大きさは規格的であり、完成



第62図 3号木棺墓内検出玉類実測図(1/1)

度の高い良品であり、翡翠製の勾玉との組み合わせが興味持たれる所である。

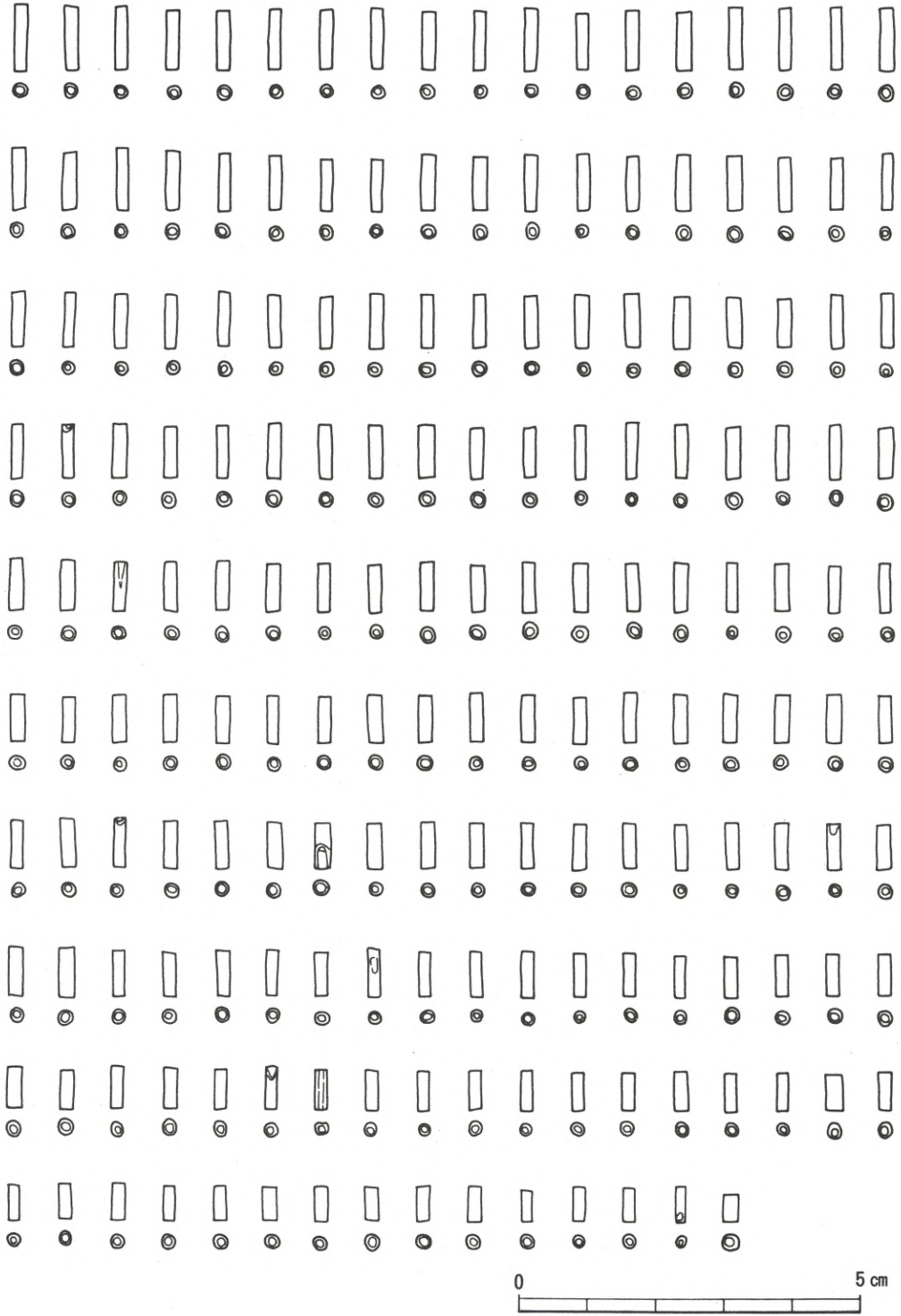
(5) 石器(遺構内検出)

6M(M')⁽³⁰⁾内検出石器(第64図、巻頭図版2)

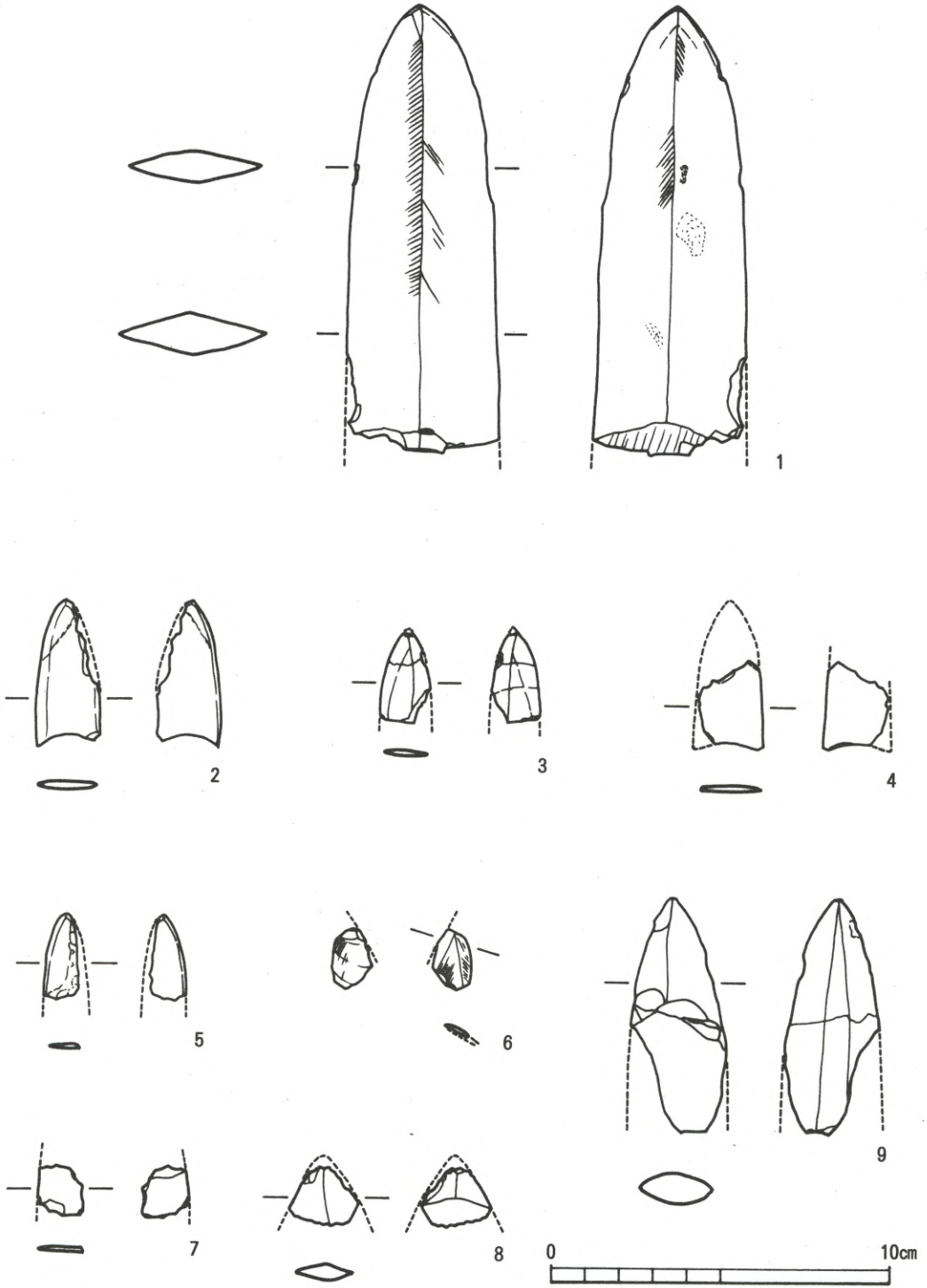
1は磨製石剣の切先部であり、現長13.5cm、刃部の幅4.5cm、厚さ1.3cmを測る。頁岩製で身の半ばから折れている。表面の一部に黒色の付着物が見受けられる。

7M内検出石器(第64図、巻頭図版2)

2は磨製石鏃で一部を欠損するが完形に近い。片岩製で長さ4.5cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmを測る。側縁部周囲には稜線が見受けられる。3は磨製石鏃の先端部片である。現長2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る。頁岩製で両面に稜線が見受けられる。4は磨製石鏃の基部片である。現長2.7cm、幅2cm、厚さ0.15cmを測り、頁岩製である。5は磨製石鏃の先端部片である。粘版岩製で現長2~6cm、幅1.05cm、厚さ0.15cmを測る。6は磨製石鏃の先端部付近の破片である。長さ1.8cm、幅1.15cm、厚さ0.15cmを測る。材質は頁岩である。7は磨製石鏃の中央部の破片で、



第63图 3号木棺墓内検出管玉実測図 (1/1)



第64图 6·7·8号木棺墓(木槨墓)内検出石器実測図(1/2)

頁岩製である。現長1.5cm、幅1.35cm、厚さ0.1cmを測る。8は磨製石剣の切先で先端部を欠く。頁岩製と思われるが判然としない。現長1.75cm、幅2.1cm、厚さ0.45cmを測る。なお、もう1点磨製石鏃の完形品が存在したが、台風19号（平成3年）のため紛失してしまった。従って、磨製石鏃は7点、磨製石剣が1点となる。

8 M内検出石器（第64図、巻頭図版2）

9は磨製石剣の切先である。一面には鑄状のラインが認められ、もう一方には2本のラインが見られる。現長7.1cm、幅2.3cm、厚さ0.9cmを測る。破片はさらに中央から折れていて、検出時点では8cmほどの間隔を有していた。

当墳墓群での石製武器の検出状況を観察すると、1の場合は埋土中に存在している。2～8は底面に存在したものの、磨製石鏃の場合、完形品が2点（1点は紛失）、先端部2点、中央部2点、基部1点である。9は2つに折損しており、両者が8cmほど間隔があった。以上は、墓壇内より検出される切先等が人体への嵌入例という観点を再度考え直す必要を示すものと思われる。それは、切先が埋土中へ存在する点、石鏃の先端ではなく、中央部や基部が残る点、切先の折れた部分が8cmほど放れる点、さらに、2の質量2gの場合の殺傷能力や矢として使用可能かどうかという点である。これらを合理的に説明するのは困難ではなかろうか。県道改良工事に伴い、原田遺跡で検出された多くの切先を伴う墳墓例に見られるように、切先の供献例も存在するという観点からも十分な観察をすべきであろう。

5. おわりに

(1) 甕棺の変遷と型式

時期を決定する場合、甕棺の存在は大いにその力を示すこととなる。ここでは、遺物の甕棺の所で示した大まかな変遷を基本として型式的な位置付けを行い、墓壇中より検出された土器との対比に基づいて検証するものである。

先に把握した序列を示すと、8Kと9Kが口縁下に突帯がなく、甕棺群では古式の様相を示すものである。次に、逆L字状の口縁部が内傾するためにくの字状に近づき、胴部突帯はコ字状でダレた感じや大形のものを付す2K、3Kは、最も新しい様相を示しており、8・9K⇒1・4・6K⇒11K⇒10K⇒2・3Kの順となる。

型式的な位置付けと編年については橋口達也氏の論考を基本とする。

まず、1・4・6Kは上甕に鉢を使用し、口縁部がT字状でやや外傾する。口縁下には1条の三角突帯、胴部には2条の三角突帯を付す。⁽¹⁾調整は内外面ともナデであり、KⅢa（須玖式）の特徴を示す。次に、5Kであるが、口縁下と胴部突帯の形状は三角であるが、2条と3条というように1条ずつ増加しており、口縁部も水平気味となっている。これは、KⅢaの一群の中で突帯数の増加と口縁部の水平化は同一型式内での新相として把握され、5Kが4Kを切っ

ているという前後関係で証明されるものである。

次に、2 Kは口縁部がくの字状に近い逆L字形で、胴部のやや下方にダレたコ字状突帯を2条配す点、全体のスタイルからして立岩K10号のタイプに近似する。また、3 Kはかなり地域性の強いタイプであるが、内傾する逆L字状口縁を呈し、胴部突帯はかなり大きく門田K24号下甕を思わせる。口縁上の浮文は、須玖Ⅱ式以降に見られるものである。2者は同時期の所産と考えられKⅢC（立岩式）に比定されよう。

11・10KはKⅢaの新相とした5 Kに対し、新しい様相を示す。11Kは口縁部が逆L字状で外方に大きく突出し、内面は少し突出するのみである。口縁下は2条の三角突帯であるが、胴部の突帯が、3条の内一番下方のみコ字状に変化している。墓壙の切り合関係から10Kに先行するものである。10Kは口縁部がT字形であるが水平であり、口縁下及び胴部突帯がコ字状突帯を呈す。形態変化からすると11Kは5 Kと10Kの中間的位置を示すようで興味を持たれる。また、2・3 Kよりは古相を示しており、KⅢbに位置付けられよう。

最後に8・9 Kである。これらは先のKⅢaに先行することは口縁下に突帯が付されない点を見ても明らかで、KⅡ段階に位置付けられよう。さらに、両者を比較すると、9 Kは口縁部がより内側に発達しており、水平か若干外傾するかである。胴部突帯の位置も8 Kより高位置にあって、古式な様相を示す。8 Kは口縁部が外方へと発達しており、外傾度が強い。胴部突帯はやや下方へと移り新しい様相を示す。型的には9 KをKⅡbに、8 KをKⅡC（汲田式）に位置付けることが出来よう。従って、KⅡbからKⅢCへと連続した変遷が追えるわけである。

以上の点を考慮した上で、これを土器やその他の遺物によって検証してみよう。

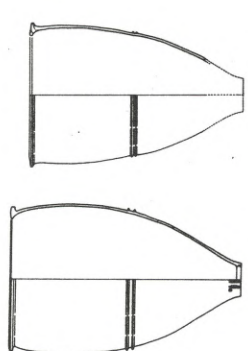
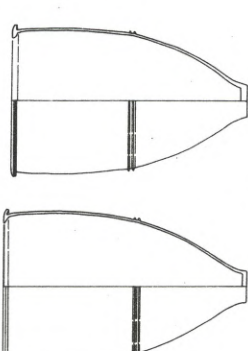
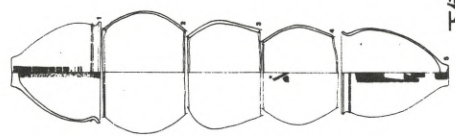
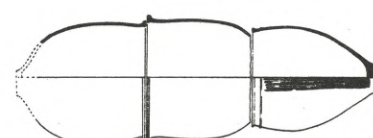
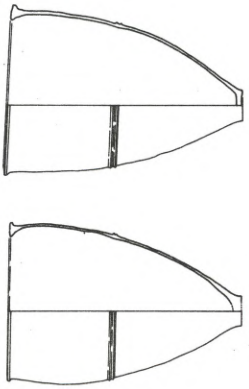
墓壙内検出土器は、3 Kが須玖Ⅰ式、5 Kが須玖Ⅱ式、8 Kが須玖Ⅰ式の古相、10Kが須玖Ⅱ式となっている。どれも墓壙中にはやや古い時期のものが混っているようであるが、新旧の逆転といった矛盾はない。10Kの須玖Ⅱ式は丹塗磨研土器で、混入というよりは墳墓祭祀に関係するものであろう。

9 Kと8 Kにおいて、検出された銅戈によれば、9 Kは細形のⅡC式で8 Kが中細形a式ということで、型的的にスムーズな展開を示しており、9 K⇒8 Kという関係は成立する。

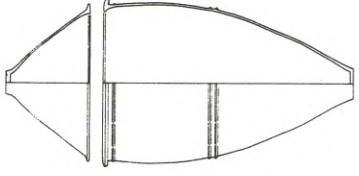
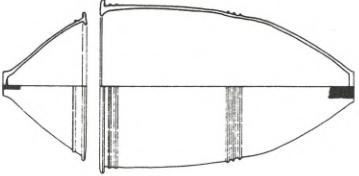
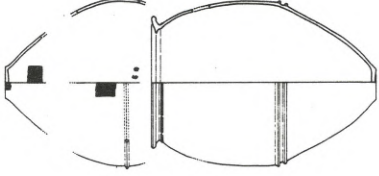
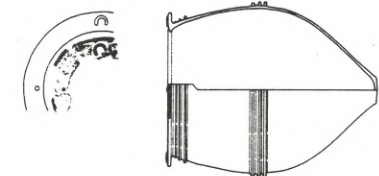
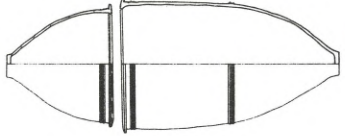
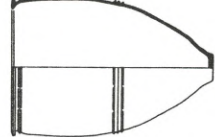
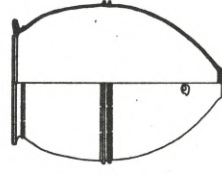
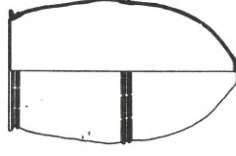
9 K=KⅡb、8 K=KⅡC（汲田式）、1 K・4 K・6 K=KⅢa（須玖式 古）、5 K=KⅢa（須玖式 新）、11 K・10 K=KⅢb、2 K・3 K=KⅢC（立岩式）となる。

なお、鎌田原遺跡の甕棺の編年は第65・66図に示す。

補註1 スダレ遺遺の甕棺^①は、弥生中期前半のやや新しい時期として位置付けられている。形態の特徴は、まず、口縁部が平坦口縁とやや外傾する平坦口縁で、内側に張り出し、厚味がある。胴部2条の三角突帯が、胴部中位に位置しているというものである。KⅡbに相当するものと考えたい。

	K I C (金海式)	K II a (城、越式)	K II b	K II c (汲田式)
鎌田原遺跡			 <p>9 K</p>	 <p>8 K</p>
嘉穂地方	 <p>下伊川</p>	 <p>森原</p>	 <p>スダレ遺跡 (ハ木山バイパス調査)</p>	

第65図 鎌田原遺跡と嘉穂地方の甕棺（大形）編年

K III a (須玖式)		K III c (立岩式)			
		古相	新相		
鎌田原遺跡					
	1 K	5 K	2 K	3 K	
	嘉穂地方				
		スダレ遺跡 K-3	立岩遺跡 19号甕官	立岩遺跡 10号甕官	立岩遺跡 32号甕官
		10 K			

第66図 鎌田原遺跡と嘉穂地方の甕棺（大形）編年

補註 2 立岩遺跡^②の40号甕棺は、口縁部と胴部の突帯の形状がコ字状であり、条数は口縁下1条で胴部が3条となっている。口縁形態は逆L字状の水平口縁である。胴部の最大径は突帯付近と下方に位置する。編年では立岩I期（須玖式）である。そこで、同じ立岩I期（須玖式）の19・33号甕棺と比較すると、前者が逆L字状の水平口縁で、突帯はすべてコ字状、胴部最大径は突帯付近という点に対し、後者は、外傾のT字形口縁で、突帯はすべて三角形、胴部最大径は胴部中位と高い。従って、19・33号⇒40号という前後関係が成立し、19・33号はKⅢaの新相、40号はKⅢbとして位置付けられよう。

註① 浜田信也他「ル木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告」嘉穂郡穂波町所在遺跡群の調査1983

② 立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」河出書房新社1977

(2) 墳丘墓の形成について

木棺墓等の時期について整理しよう。

遺構の切り合関係から7M⇒6M(M′)⇒2Mという前後関係がわかる。甕棺との切り合関係では6M(M′)⇒5Kという関係が成立しており、その時期をKⅢa以前に限定出来る。

墓壙内検出土器から導き出される時期は、7Mは須玖I式の壺を共伴し、なお、墓壙内からも同時期の土器片を伴出しており、須玖I式相当の時期とすることが可能である。

6M(M′)は、墓壙内崩落土中より多くの資料が得られており、城ノ越から須玖I式段階であり、一部に須玖I式の新相を含む。また、伴出した中細形a式銅戈は、8K検出例とほぼ同じであり、両者の時期は近いものである。従って、6M(M′)⇔8Kという関係が成立し、7M⇔9Kという関係もなり立つようである。

2Mは須玖I式土器を検出、6M(M′)との前後関係から、KⅢa段階の甕棺と重なる時期と考える。

1M・4M・8Mは須玖I式土器の段階であり、8Mに限っては新相という位置が示されている。3Mについては、翡翠製の獣形勾玉といった古式の玉類を伴出し、木口板部に石を配すといった古い墳墓の様式を示すことから、先の1M・4M・8Mに近い時期のものであろう。

さらに、詳しい時期を知るために各墳墓と各々の主軸方向との関係を整理する。

甕棺墓の型式と主軸方向との関係について以下に記す。

- | | | |
|----|------------|----------|
| 1. | 9K (KⅡb) | N-5° -E |
| 2. | 8K (KⅡC) | N-88° -E |
| 3. | 1K (KⅢa 古) | N-65° -E |
| | 4K (KⅢa 古) | N-21° -E |
| | 6K (KⅢa 古) | N-16° -E |
| 4. | 5K (KⅢa 新) | N-12° -E |
| 5. | 11K (KⅢb) | N-85° -W |
| | 10K (KⅢb) | N-85° -E |
| 6. | 2K (KⅢC) | N-78° -W |
| | 3K (KⅢC) | N-47° -E |

9 Kの主軸は南北方向を取り、8 Kでは東西方向へと大きく変化する。1 Kから4 K、6 Kと主軸は再び南北方向へと移り、5 Kの段階まで継続する。しかし、11K、10Kの段階で主軸は大きく東西方向へととなり、2 K、3 Kの最終段階となる。これは、時期の移行と主軸方向の変化が、相関々係にあることを示唆していよう。

これを木棺墓等で見るとどうであろうか。

① 7 M (須玖 I 式段階) $N-5^{\circ}-E$

② 6 M (M') (須玖 I 式段階) $N-3^{\circ}-E$

③ 2 M (須玖 I 式段階) $N-80^{\circ}-W$

7 Mと6 M (M')は主軸を南北に取るが、2 Mでは東西へと大きく変化する。8 M (須玖 I 式新相)も $N-80^{\circ}-W$ と2 Mと同じである。つまり、甕棺と同様の展開が木棺墓等にもあり、前者の主軸方向に従って後者の展開を考えるなら、より確実な時期への位置付けが可能となる。

9 K ($N-5^{\circ}-E$)と7 M ($N-5^{\circ}-E$)・9 M ($N-9^{\circ}-E$)・6 M ($N-3^{\circ}-E$)

8 K ($N-88^{\circ}-E$)と2 M ($N-80^{\circ}-W$)・8 M ($N-80^{\circ}-W$)

1 K ($N-65^{\circ}-E$)と3 M ($N-70^{\circ}-E$)・1 M ($N-78^{\circ}-E$)

4 K ($N-21^{\circ}-E$)・6 K ($N-16^{\circ}-E$)・5 K ($N-12^{\circ}-E$)と4 M ($N-4^{\circ}-W$)・

5 M (D) ($N-13^{\circ}-E$)

以上となり、11K、10K、2 K、3 Kでは、甕棺墓のみの展開となるようだ。木棺墓等では、7 M・9 M⇒6 M⇒2 M・8 M⇒3 M・1 M⇒4 M・5 M (D)という序列が完成する。

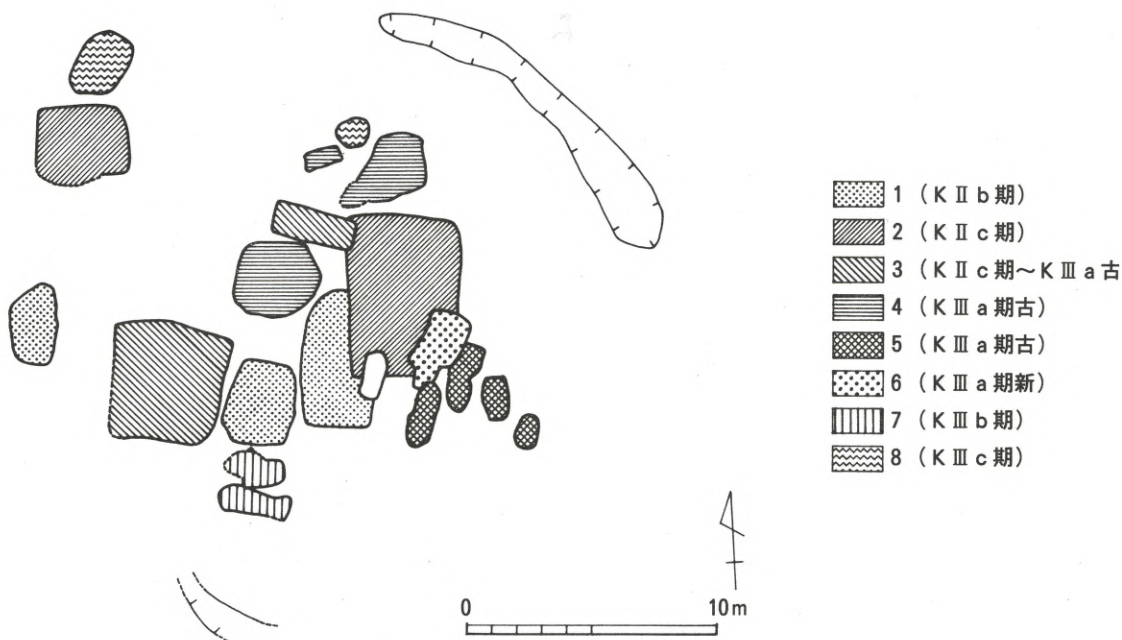
また、甕棺墓との関係を以下に示すと

7 M・9 M・9 K⇒6 M (M')→8 K⇒2 M・8 M⇒1 M・3 M・1 K→4 M・5 M (D)
・4 K・6 K→5 K⇒11 K・10 K⇒2 K・3 K

変遷は連続的であり一線を画しながらという判断は困難であるが、その流れは理解されよう。

墳墓群造営変遷図 (第67図)を観察すると、墓域内における墳墓群の形成過程に大きな特徴があることがわかる。まず、墓域中央部で7 Mと9 Mが、その西端で9 Kが造営される。次に6 M (M')が造営され、同時期か若干後に北西端の8 Kが造営される。次に6 M (M')を切って2 Mが、また、9 M近くに8 Mが造営される。その後、3 Mが中央付近、北側に1 Mと1 Kが造営される。次に、6 M (M')の南東付近に4 M・5 M (D)と4 K・6 Kが出来、続いて5 Kが造営される。そして、11 Kと10 Kが出来て、最後に2 Kと3 Kが北側の端部に造営される。

- ① 大形の木棺墓や木槨墓は墓域の中心付近で造営が続けられ、端部へ移ることはない。
- ② 小形の木棺墓等は、甕棺と一緒に外側に造営される。
- ③ 甕棺墓は、当初から端部に造営され、大形木棺墓等のアウトライン上に最後まで位置する。
- ④ 大形木棺墓等は反時計回りに展開し、甕棺墓は時計回りに展開する。



第67図 墳墓群造営変遷図 (1/300)

⑤ 木棺墓等と甕棺墓は組み合せて(セット的)造営されており、両者は同時に存在する。ただし、前者の終了が早く、大形に至っては弥生中期中頃で終わっている。

中心は大形の木槨及び木棺墓であり、甕棺はあくまで、その周囲に造営され、中心墓域のアウトラインを示すような位置に存在する。

大形の木棺墓等は、当初、甕棺墓と平行して造営されながらも、弥生中期中頃で終了する。一方、甕棺墓は、中期末まで継続するが、墓域の中心に来ることはなく最後を迎える。以上の展開は注目すべきものであろう。

次に、各墳墓の深さからアプローチしよう。

各墳墓の深さを示そう。

7 M (H=90.61m)	9 M (H=91.11m)	9 K (H=90.21m)	6 M (H=90.00m)
8 K (H=89.93m)	2 M (H=90.86m)	8 M (H=90.71m)	1 M (H=90.82m)
3 M (H=90.77m)	1 K (H=90.21m)	4 M (H=90.81m)	5 M (H=90.83m)
4 K (H=90.90m)	6 K (H=90.83m)	5 K (H=90.62m)	11 K (H=90.76m)
10 K (H=90.20m)	2 K (H=90.56m)	3 K (H=90.45m)	

木棺墓等では、7 Mから6 M (M')と移行する弥生中期前半段階では、60cm近くも深くなり、中期中頃の2 Mから5 Mでは再び80cm近く浅くなり横ばい状態が見られる。甕棺墓では、

9 Kから8 Kで深くなり1 Kとやや浅くなり、次は4 Kから10 Kで一気に70m近く浅くなり、横ばい状態となる。最も深い6 M (M')と8 Kは時期的に同じであり、深さも標高90mラインで一致している。また、2 Mから5 Mは、4 Kから5 Kと同じ弥生中期中頃の時期で、両者ともに標高90.80m前後で一定レベルのラインが見られる。この場合、墓壙をどのレベルから掘り込むかが問題となろう。私は、当初の7 M・9 M・9 Kは、地山面から墓壙を掘り込むものとする。ただ、この段階では墓域を選定したのみであり、墳丘や周溝は存在しないと考える。次に、6 M (M')・8 Kに1 Kも含むかどうかであるが、この時点で、墳丘墓形成に着手されたものである。ただし、6 M (M')や8 Kは、墳丘部の地山整形段階で掘り込まれたもので、盛土はその後と思われる。盛土の標高を93mと想定したが、地山整形の位置であれば深さ2mの墓壙を設ければよい。盛土完全後に墳頂部から墓壙を掘り出すのは、2 Mや4 K以降であり、やはり、頂部から約2mの深さで一定のラインを保っている。

鎌田原墳丘墓は、当初から墳丘墓として存在したわけではなく、後の項で触れるが6 M (M')という大陸系の墓制(木槨墓)を導入した段階で、大型の墳丘墓を造営することになったと考える。従って、この墳丘墓の真の主体は6 M (M')に他ならない。

(3) 木槨墓について

墳丘墓の中心主体は、木槨墓という極めて大陸的な様相を示した。ここでは北部九州地方における木槨墓例を示しながら、当木槨墓との比較を行うとともに、韓半島西北部に多く分布する楽良墳墓との対比を行いたい。

1. スダレ遺跡 福岡県嘉穂郡穂波町大字椿字スダレ

D-35 墓壙は東西長447cm、南北長425cmのほぼ正方形で、中央に標石が置かれていて、その周辺には丹塗土器等が供献されていた。木槨は箱形と推定され、外法の長さ225cm、幅は東端で102cm、西端で57cm、内法の長さ175cm、幅は東端で60cm、西端で33cmを測る。それを取り囲むように幅約10cm、深さ5cm内外、内法長210cm、幅98cmの長方形の掘込が確認されている。

調査された橋口氏は断定はさけているものの木槨墳の可能性を示されている。また、まとめの所で、この問題は可能性を言及するだけで相当の問題をひきおこすであろうと述べられている。また、D-49は通常の木槨の大きさでの木槨の存在も示された。

北部九州において木槨墓の存在を示されたのは、これが最初であろう。1976年のことでありその15年後に同じ嘉穂郡内で再び確認されたことになる。時期的には弥生中期前葉ということで当木槨墓と同時期かやや古い頃の可能性を有す。D-35以外にも墓壙の大きなものが何基か存在していた。いずれにしても、嘉穂郡内に弥生中期前半の時期に2ヶ所も木槨墓が存在する点は大いに興味が持たれよう。

2. 比恵遺跡 福岡県福岡市博多区博多駅南

S X 03墓壙は4.1×1.8mの隅丸長方形を呈し、中央には側辺長2.7m、小口幅0.5~0.6mを測

る割竹状木棺が位置し、その周辺に約25cm以上に立上がる板材存在が推定されており、木槨墓の可能性を示されている。時期的には、弥生中期前半頃とされており、当木槨墓と同時期頃と思われる。ただし、棺の形態は異なる。

3. 柚比本村遺跡⁽¹⁴⁾ 佐賀県鳥栖市柚比本村

S P 1100木槨墓、墓壙は長さ7m以上、幅は約3.5mを測る。棺は割竹状の木棺で側面には板石を配し粘土でおさえている。そして木棺と板石の間には板材があり、槨的な存在を示す。しかし、その規模から二重木棺という指摘もある。副葬品として細形銅剣、石製把頭飾、不明青銅器を共伴している。時期的には弥生中期前半以前である。

以上は木槨墓としての資料であり、今のところ時期的には弥生中期前半頃であり、墓壙は著しく広い。墳墓群の中心主体と位置することが多く、青銅器等を所有する特定有力集団墓で墳丘墓や区画墓の形態を呈する場合が多い。スダレ遺跡の場合は、通常の集団墓的であるが、その中でも中心的位置を示しているよう。

大形墓壙を有する木槨墓群としては、吉武高木がある。木棺も大形であるが木槨を有する槨槨構造ではない。時期的には弥生中期初頭⁽¹⁵⁾（城ノ越式相当）であり、木槨墓の示す中期前半より古式なもので、木槨墓以前の様相を示すものと思われ、木槨墓の時期を中期前半に限定出来るのではないか。

次に、韓半島西北部の楽良墳墓群との対比を試みよう。現在、高久健二氏によって詳細な分類と編年⁽¹⁶⁾がなされており、自らの分析力を保持しない著者は、これを大いに使用したいと考える⁽¹⁷⁾。

6号木槨墓の木槨構造は、木口板によって側板を挟み込むタイプのもので、棺は箱形を呈すと思われる。実は木槨と棺の間でその上下に空間が存在する。特に、頭位方向の上部は粘土敷が切れている所から、さらに長さ38cmほどの掘り込みラインが続き、その中に銅戈が納まる状況が見られる。銅戈の出土状況からして、棺内か棺外か微妙な所であり、後者の場合は副葬品を置くための空間としての、副槨を意識したともいえそうである。

槨の幅／長さでその度数を見ると約2.6であり細長方形の種類となる。これは高久分類のA IかA IIの型式となる。次にA IとA IIの違いである棺上部の副槨を区画するか否かで分類されるが、当木槨では判然としない。ただ、微妙な銅戈の位置と粘土敷が切れている点を考えれば何らかの区画か、その意識が存在したかもしれない。従って分類的にはA IかA IIの型式ということになろう。それは、木槨墓でも初期の型式であり、かなり早い時期にもたらされたものと思われる。

A類木槨墓は華北地域に存在するようで、その系譜は、中国の北部となろうか。時期的にはA I型式が、B・C・2C末～1C前半、A II型式がB・C・1C後半ということである。

6号木槨墓は弥生中期前半であり、その実年代を明確にするのは困難であるが、B・C・1

C前半代とすれば、これまでの九州における年代感とかなり近い頃となり、韓半島西北部における木槨墓出現から間もなく北部九州へ木槨墓の墳墓様式が伝ったようだ。しかし、嘉穂地方へほぼダイレクトに伝ったのは何故であろうか、当地域を研究する上において重要な点である。

(4) 結 語

a 立地

馬見台地上に位置する本村及び原田遺跡（拠点集落）を一望出来る位置にあつて、しかも、集落とは別に谷を挟んだ鎌田丘陵上にあり、後世の古墳のような立地を示す。なお、墳丘墓周囲には他の墳墓はなく、独立的に位置する。

b 墳丘墓

長さ31m、幅24m、高さ南側1m、北側2mで区画の周溝が巡り、形状は隅丸長方形を呈す。もしくは、長さ24m、幅24m、高さ南側1m、北側2mで区画の周溝が巡り、形状は隅丸方形だが、北西側に一部が突出するといったものを想定。その造営は当初からではなく、中心主体の木槨墓という極めて大陸的な埋葬様式を導入した時点より開始された。全体の高さは2m以下であり、低墳丘墓をなす。

c 木槨墓

現在の時点で、本例を入れて九州に4ヶ所ほど報告されており、時期的には弥生中期前半頃で一致する。しかし、墓壙が大きいという共通点はあるものの、形態や構造に大きな違いがある。その中では、特に本例が韓半島西北部の木槨墓の構造等に近く、比較が出来るようである。その結果、AⅠかAⅡ式という古式のものに近似しており、年代的には、B・C・2C末～1C後半代であり、本例が弥生中期前半頃でB・C・1C前半代とするならば、矛盾はない。また、楽良で木槨墓が造営され出した早い段階で、北部九州の内陸部へ至っており、弥生中期前半に前漢鏡をはじめとする楽良系遺物群流入の前段で、すでに墳墓様式が導入されていることは注目される。

d 墳墓群の展開

中心主体は大形の木槨墓であり、その前後の展開は、やはり大形の木棺墓である。中細形銅戈、細形銅剣、翡翠の勾玉等で、1墳墓に1点である。一方、大形木棺墓（木槨墓を含む）の周囲を区画するかのように甕棺墓が展開する。しかも、墳墓造営当初の9Kは細形銅戈を所持しながらも中心とはなっておらず、7Mや9Mが中心に来るという状況である。さらに、重要な点は、墓域中心部で展開する大形墓が中期中頃で終了し、その一方で、甕棺墓は中期末で継続しあくまで墓域の端部でその展開を見るという状況である。これは、墳丘墓の被葬者に2つの系列が存在することを想定しうる。主となる系列が墳墓の造営を中止しても、もう一方は造営を継続しており、あくまで墓域の周辺での位置を保持している。まるで、主人の墓を守り続けるかのようである。

嶋田光一氏は、9 Kの細形銅戈が須玖岡本遺跡13号甕棺墓出土例に最も近いことから、その人物を福岡平野の甕棺文化の中心地と密接な関係を有する人と推定している。私も同感である。そうすると、大形木棺墓等の被葬者達は、あくまで在地の首長クラスといえよう。甕棺の場合は、在地の人間に対し本来の系統が外来者であったともいえようか。互いにその系統を守り、一方が造営を中止しても、もう一方は造営し続ける所に当時の社会構造や慣習といったものが見えてくる。

墳丘墓への埋葬を中止した首長クラスの墓は、その後どう展開するのか。時期的には春日市須玖岡本や前原市三雲宮小路で知られるように、特定個人墓が集団墓から抜け出て、別に墓域を形成す頃である。近くは、飯塚市立岩で見られるように、副葬品等では群を抜くものの特定有力集団と墓域を同じにし、そこから抜け出ていないというものである。いずれにしても、拠点集落としての本村・原田両遺跡は継続しており、墳丘墓の中心的な人物の系列下に位置する首長クラスの墳墓は、場所を移して展開すると思われる。それが、特定個人墓なのか、特定有力集団墓なのかはわからないが、原田遺跡で検出された弥生後期後半の墳丘墓（後漢鏡2面を検出）を考えるならば、やはり墳丘墓として展開するものであろう。

なお、調査期間中から今日に至るまで、常にご指導とご教示を賜った福岡大学 小田富士雄教授をはじめ多くの方々に深甚の謝意を表すとともに、「立岩以来の発見やな」と目を細めて喜んでいただいた故児嶋隆人先生の学恩に対し感謝申し上げます。

註1. 福岡市教育委員会「吉武遺跡群Ⅷ」1996

2. 九州歴史資料館岩瀬正信氏に御教示を得る。なお、桂化木の混入は筑豊地域の特徴を示すものかどうかである。

3. 2に同じ

4. 武末純一「須玖式土器」弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ

5. 岩永省三「日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義」古文化談叢33集1994

6. 5に同じ

7. 5に同じ

8. 岩永省三氏にご教示を得る。

9. 玉類は熊本大学 木下尚子助教授の原図を一部改変して使用。

10. 愛媛大学 下篠信行教授にご教示を賜る。

11. 橋口達也「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告XXXI」中巻 福岡県教育委員会1979

12. 橋口達也「スタレ遺跡」穂波町文化調査報告書1集 穂波町教育委員会1976

13. 吉留秀敏「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓—北部九州における弥生時代区画墓の一例—」九州考古学第63号1989

14. 渋谷 格「鳥栖柚比本村遺跡の調査」第8回 九州大学—釜山大学校考古学共同研究発表資料1994

15. 福岡市教育委員会「吉武遺跡群Ⅷ」1996

16. 高久健二「楽浪墳墓の埋葬主体部—楽浪社会構造の解明—」古文化談叢35集1995

17. 高久健二「楽浪墳墓の編年」考古学雑誌78巻4号1993

18. 嶋田光一「福岡県飯塚市の五連甕棺をめぐる」先史学・考古学論究1994

参考文献

1 立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」河出書房新社1977

付1 馬見地域の遺跡

1. 原田遺跡（県道関係調査）

調査地区内では、袋状竪穴（貯蔵穴）10基、竪穴住居跡17軒、土壙墓14基、木棺墓3基、甕棺墓（小型）1基、溝状遺構などが検出されました。

遺物としては、細形銅剣や磨製石剣の切先と磨製石鏃が一つの墓から検出されましたし、竪穴住居の跡からは、ガラスの小玉が多く見つかりました。

時期的には、袋状竪穴が弥生時代前期中頃、竪穴住居跡は、弥生時代前期中ごろから中期の初頭頃と後期の前半、古墳時代前期の初頭頃とがあります。墳墓は、弥生前期末から中期の前半ですが、大半は中期の初頭までです。

2. 鎌田原遺跡（県指定史跡）

調査地区内では、木棺墓（木槨墓を含む）8基、土壙墓1基、甕棺墓11基（大形棺10基、小形棺1基）とそれらを区画する周溝及び墳丘の一部と思われる盛土が検出されました。時期的には、弥生時代中期前半頃に墳丘墓の形成が開始され、埋葬は、同時代中期末頃に終了しているようです。遺物としては、銅戈（細形と中細）3点、銅剣（細形）切先1点、玉類（獣形勾玉1点、小形勾玉6点、管玉117点）、磨製石剣切先3点、磨製石鏃6点、成人用大形棺10点、小形棺1点、副葬壺1点が出土しました。

3. 原田遺跡（第1地点）

調査地は、遠賀川の支流である尻川と浦谷川に挟まれた馬見台地の先端に位置していて、標高75mを測ります。長さ1.8kmに及ぶ台地上の一带には、遺構群が広がっています。また、東側の丘陵上には、鎌田原の弥生墳丘墓が位置しています。

調査区内では、台地の先端部に3ヶ所の墳墓群が確認され、弥生時代中期初頭～前半頃の木棺墓16基、土壙墓47基、甕棺墓12基、同時代後期～古墳時代前期にかけての石棺墓18基、木棺墓20基、土壙墓28基、石蓋土壙墓1基、甕蓋状土壙墓1基が検出されました。他には、古墳時代後期の横穴式石室と3基の土壙、中世の土壙14基や柱穴群等が検出されました。遺物としては、弥生時代中期前半頃の有文小銅鐸と管玉、同時代後期後半頃の内行花文鏡と単夔文鏡が各一面ずつあって、鉄剣なども検出されました。

4. 原田遺跡（第2、3地点）

調査区の第2地点では、竪穴住居跡23軒、木棺墓14基、土壙墓9基、甕棺墓1基、石棺墓8基と土壙14基が検出されました。時期的には、竪穴住居跡の大半が弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃のもので、一部は古墳時代後期に下るものです。墳墓群は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃に形成されています。出土遺物としては、鉄剣をはじめ外来系土器群があって、1点のみ出土した甕棺は、西新式に近い大型の甕棺で、嘉穂地方では今のところ見受けられな

いものです。

この地点では、台地縁辺の外側に墳墓群があつて、しかも、区画された範囲の中に集中していて墳丘墓であつた可能性があります。また、内側には竪穴住居跡群が集中していました。第一地点も同様ですが、馬見台地の先端部や縁辺部には、墳墓群や墳丘墓が点々とつくり、その内側に竪穴住居群がつくられたこととなります。

調査区の第3地点では、竪穴住居跡1軒、土壙10基と溝状遺構が検出されました。時期的には、竪穴住居跡が弥生時代後期前半頃で、土壙や溝状遺構も弥生時代のものでしょうか。遺物としては、竪穴住居跡内から出土した一括の土器群があります。壺は、長頸壺が多く、袋状口縁の変化した二重口縁のものもあります。甕は、20cm前後の小形のものばかりで、口縁部の立ち上がり急になっています。高杯は、口縁部が内湾するものや大形の杯部を呈するものがあります。特徴的な点は、平底か若干凸レンズ状を呈した上に、袋状口縁を残す点等、弥生時代後期でも前半頃と考えられます。

5. 原田遺跡（第4地点）

調査地区内では、竪穴住居跡4軒、土壙30基、袋状竪穴4基、掘立柱建物跡2棟が検出されました。時期的には、竪穴住居跡は弥生時代中期初頭～前半頃のもので、土壙や袋状竪穴は大半が弥生時代中期初頭～前半頃で、一部奈良時代に下るものもあります。掘立柱建物跡は、奈良時代のもので、遺物としては、弥生時代中期初頭の一括土器群をはじめ、嘉穂地方では少ない奈良時代の遺物がありました。内容は、須恵器碗類や土馬の首部、あるいは、焼塩壺片が出土しています。

この遺跡では、弥生時代中期初頭頃という嘉穂地方でも、類例の少ない時期の遺構と遺物が検出されました。竪穴住居跡の形態は楕円形をしていて、他の時期には見られない特有の形状を示しているようです。

6. 原田東遺跡（原田遺跡）

調査地は、馬見台地上の標高77m前後を測る台地先端から東側縁辺にかけての部分に相当しています。県道を挟んだ西側は、原田遺跡第1地点となっていて、両者は同一遺跡として把握されます。

調査地区内では、竪穴住居跡20軒、箱式石棺墓2基、木棺墓1基、土壙16基、柱穴群多数が検出されました。時期的には、竪穴住居跡が弥生時代前期中頃のもので、同時代後期末～古墳時代前期初頭頃のものがあります。箱式石棺墓と木棺墓は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃と考えられます。土壙は、古墳時代前期初頭頃と平安時代頃とがあります。遺物としては、弥生時代前期中頃の板付ⅡA期頃の甕があります。古墳時代前期初頭頃にはいると外来系土器群多くなるようで、平安時代には、瓦器や土師器碗、小皿などが見られます。

7. 平塚遺跡

調査地は、馬見台地中央部付近の標高84m前後の地点に位置していて、全体に平坦地が広がっています。遺跡の西側には、接するようにして、原田遺跡第4地点が位置していますが、両遺跡は同じ遺跡（原田遺跡）の中に位置しているものと考えられます。

調査地区内では、竪穴住居跡8軒、土壙90基、掘立柱建物跡20棟、柵列状遺構、柱穴が多数検出されました。時期的には、竪穴住居跡が弥生時代前期末頃と同時代後期後半頃、それに、古墳時代後期末頃のものがあります。土壙は、一部が弥生時代中期前半～後半頃で、大半は奈良時代のものと思われます。掘立柱建物跡を含む柵列や柱穴群も、また、奈良時代のものと思われます。遺物としては、土壙一括出土の弥生時代中期前半～後半頃の土器群、奈良時代の須恵器及び土師器、製塩土器（玄界灘式、焼塩壺）緑釉陶器、ヘラ書土器、鉄器等が出土しました。

8. 馬見本村遺跡

調査地区内では、木棺墓46基、土壙墓18基、甕棺墓（大形棺2基、小形棺17基）19基が、南北に長い列状をなして検出されました。墳墓群は、基本的に2列と思われますが、一部には更に複数列をなすところもありました。また、墳墓群の西側には、区画する溝があつて、おそらくは、全体を溝によって区画するような構造を示したのではないのでしょうか。その埋土中から丹塗の土器片が検出されています。時期的には、墳墓群の形成が弥生時代中期前半頃に開始されて、同時代後半～末頃までの継続が確認されています。遺物としては、弥生時代中期前半～中頃の大型甕棺や同時代中頃～後半頃小型甕棺資料が得られています。

この遺跡では、弥生時代中期前半頃に墳墓群の形成が開始されていて、馬見台地先端での原田遺跡（第1地点）に見られた弥生時代中期初頭頃からの墳墓群造営と時期的に一部重複するところもあります。

9. 馬見本村東遺跡

調査地は、馬見台地の基部付近に位置していて、標高は100～105mを測ります。当遺跡の西側には、馬見本村遺跡の弥生の墳墓群が接しています。

調査地区内では、竪穴住居跡1軒、袋状竪穴15基、土壙42基、竪穴状遺構2基、柱穴群を検出しました。時期的には、竪穴住居跡が弥生時代前期末頃で、袋状竪穴は、同時代中期初頭頃と思われます。土壙は、弥生時代中期前半頃のもの、平安時代～鎌倉時代にかけてのものがあります。遺物としては、弥生時代中期前半頃の土器群、平安時代後半頃の越州窯青磁碗、鎌倉時代の陶器や土師器が出土しました。滑石製品では、石鍋やつまみ付の製品が鎌倉時代の遺物に相伴して検出されています。

10. 二本楠遺跡

調査地区内では、古墳（円墳）5基、土壙及び柱穴群が検出されました。時期的には、古墳

(円墳)が古墳時代後期で、土壙及び柱穴群は、鎌倉時代のものと思われます。遺物は、Ⅳa～Ⅴ期段階の須恵器と土師器、鉄鏃、鉄刀、耳環、鉄地金銅製馬具類、勾玉、小玉など多種のものが検出されました。また、土壙や柱穴群からは、土師器杯や皿、青磁片が検出されていて祭祀に関連する遺構であった可能性があります。

11. 椎木本村遺跡

調査地区は、3地点が設定され、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡13棟、土壙及び土壙墓40基、溝状遺構3基、埋甕7基、甕棺(小形)墓1基、石組遺構1基が検出されました。時期的には、竪穴住居跡が縄文時代後期後半頃、弥生時代後期末頃、古墳時代中期～後期頃の三時期のものがある。掘立柱建物跡は、平安時代末～鎌倉時代前半頃と考えられ、土壙及び土壙墓は、大きく弥生時代中期後半頃～中期末頃のもの、主に鎌倉時代～室町時代頃の二時期に分かれるようです。溝状遺構と埋甕は、縄文時代晩期前半頃のもので、甕棺(小形)墓は、弥生中期後半頃と思われます。

12. 上椎遺跡

調査地区内では、3地点が発掘され、竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構30基、土壙4基、柱穴群などが検出されました。時期的には竪穴住居跡が弥生時代後期後半から末頃のもの、古墳時代後期のものがあります。掘立柱建物跡は奈良時代頃で、竪穴遺構の一部は同時期と思われます。その他の遺構のほとんどは、古代末から中世にかけてのもので、平安時代の後半から鎌倉時代前半頃の時期と思われます。検出された遺物としては、弥生時代後期後半頃の竪穴住居跡内から、多量の土器が検出されましたし、続く後期末頃の土器群も別に検出されました。古墳時代では、須恵器や土師器類が多く検出され、古代末から中世の頃のものでは、青磁・白磁・瓦器・土師器等の資料が得られました。特に、奈良時代後半期の焼塩壺の検出は、海岸地域と内陸の当地域との、塩を通じた交流が伺える発見となりました。昭和60年8月8日から同年10月9日までの期間に、面積約5,400㎡を対象に発掘調査が行われました。

調査地区は、3地点が設定されていて、袋状竪穴(貯蔵穴)57基、竪穴住居跡15軒、円形周溝1基、土壙5基が検出されました。時期的には、袋状竪穴が弥生時代前期後半～末頃で、竪穴住居跡が古墳時代の前期初頭と後期頃、土壙は平安時代末～鎌倉時代の初期頃と思われます。円形周溝は遺物が出土していませんが、他の例から古墳時代前期頃と思われます。遺物としては、弥生時代前期後半～末頃の土器群や今山系磨製石斧と、B地点出土の古墳時代前期の外來系(布留式古段階)土器群が重要と思われます。

13. タタラ遺跡

調査区内では、袋状竪穴13基、竪穴住居跡32軒、土壙6基、古墳1基が検出されました。時期的には、袋状竪穴が弥生時代前期末頃、竪穴住居跡は、弥生時代後期後半と古墳時代後期後半頃と思われます。土壙は、竪穴住居跡と同時期頃で、古墳は、古墳時代後期の円墳でした。

遺物としては、弥生時代後期後半頃の土器群が一軒の竪穴住居跡内から一括出土していて、その共伴資料に、鉄鎌の完形品が得られました。また、古墳時代後期の竪穴住居跡から単独で小形の内行花文仿製鏡片が出土しました。

14. 宮ノ脇遺跡

調査地は、遠賀川の支流である屏川西岸に形成された、標高92m前後の河岸段丘上に位置しています。北側のタタラ遺跡は、支谷を挟んだ段丘上にあつて、南側には、浄土寺遺跡があります。

調査区内では、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構が検出されました。時期的には、竪穴住居跡は古墳時代後期と平安時代の中頃と思われます。掘立柱建物跡は、奈良時代頃と考えられるし、溝状遺構は、平安時代の中頃と思われます。遺物としては、縄文時代晩期の土製紡錘車、古墳時代後期の須恵器、平安時代の瓦器碗や土師器杯が出土しています。

平成3年度の調査では、竪穴住居跡12軒、袋状竪穴53基、土壙17基が検出されました。時期的には、竪穴住居跡が弥生時代前期初頭～中頃と古墳時代後期とがあります。袋状竪穴は、弥生時代前期初頭～中頃で、土壙も同時期頃と思われます。また、調査区東側に平安時代頃のピット群が検出されている。遺物としては、轟B式、曾畑式、黒川式に突帯文土器（山ノ寺式？）と続きます。方形の竪穴住居跡からは、板付Ⅰ式相当の資料が若干得られています。円型竪穴住居跡及び袋状竪穴からは、板付Ⅱa式相当の土器群が、多数出土しました。

15. 尾畑遺跡

調査地区内では、袋状竪穴23基、竪穴住居跡11軒、土壙22基、木棺墓6基、土壙墓11基、甕棺墓8基、古墳2基、溝状の祭祀遺構及び溝状遺構、掘立柱建物跡などが検出されました。時期的には、袋状竪穴は、弥生時代前期後半頃で、竪穴住居跡が弥生時代後期後半～同時代後期末頃と思われます。土壙は弥生時代と中世のものがあり、墳墓群は、弥生時代中期後半～同時代後期前半頃のようなようです。古墳（円墳）は、古墳時代後期後半頃と思われます。溝状の祭祀遺構は、中世のものと思われます。遺物は、縄文時代前期の轟B式、曾畑式、同時代後期の西平式～三万田式、同時代晩期前半の黒川式と各型式の縄文土器が検出されています。その他には、弥生時代前期後半～末頃の土器群、同時代中期前半の赤彩文土器、同時代中期後半～後期前半の土器群、古墳時代後期後半頃の須恵器、土師器、円筒埴輪、馬形埴輪、人物埴輪など多数が検出されました。

報 告 書 抄 録

ふりがな	はるだ かまだばるいせき						
書名	原田・鎌田原遺跡						
副書名	福岡県嘉穂郡嘉穂町大字馬見字原田・鎌田原所在の遺跡発掘調査報告書						
巻次	1						
シリーズ名	嘉穂町文化財調査報告書						
シリーズ番号	18集						
編著者名	福島日出海						
編集機関	嘉穂町教育委員会						
所在地	〒820-03 福岡県嘉穂郡嘉穂町大字大隈町733番地 ☎0948-57-0080						
発行年月日	1997年3月24日						
所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
	所在地	市町村 遺跡番号	° ' "	° ' "			
鎌田原	ふくおかけん かほぐんかほ ちょうおおあ ざうまみ 福岡県 嘉穂郡嘉穂 町大字カマ タ		33° 23' 33"	131° 12' 00"	199)		土取り工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鎌田原	墓地 (墳丘墓)	弥生時代	木棺墓(木槨墓) 土壇墓 甕棺墓	甕棺 細形銅戈 中細形銅戈 細形銅剣(切先) 勾玉 管玉 磨製石剣(切先) 磨製石鏃			



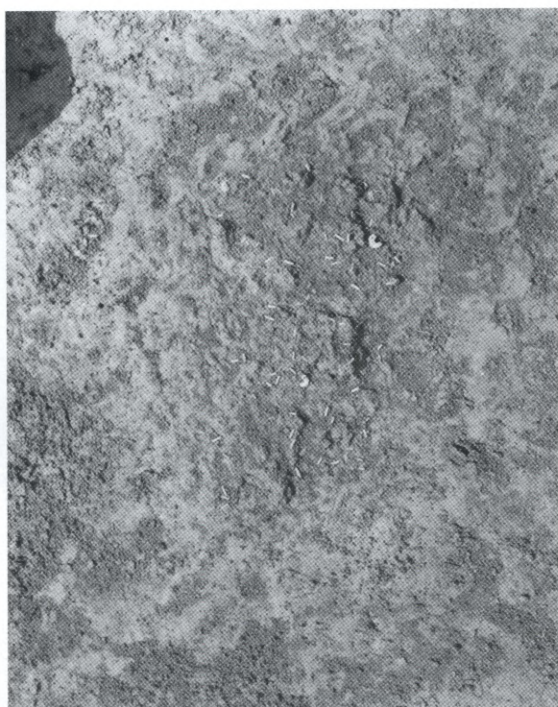
1 鎌田原遺跡全景



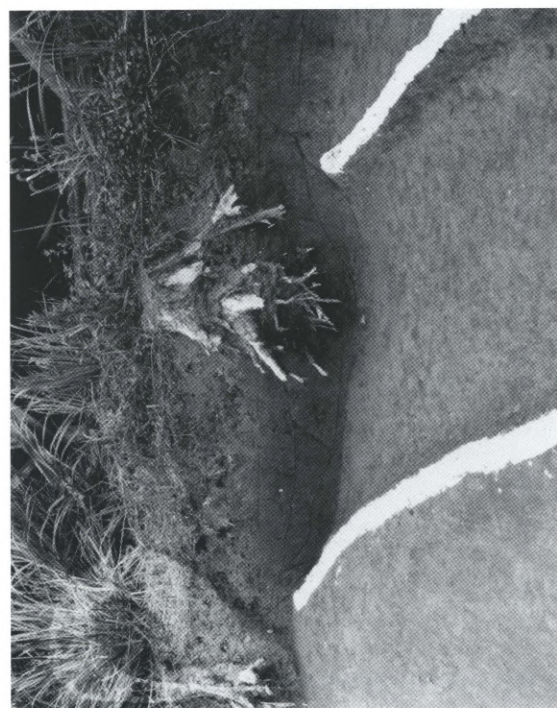
2 鎌田原遺跡中心部全景



3 3号木棺墓



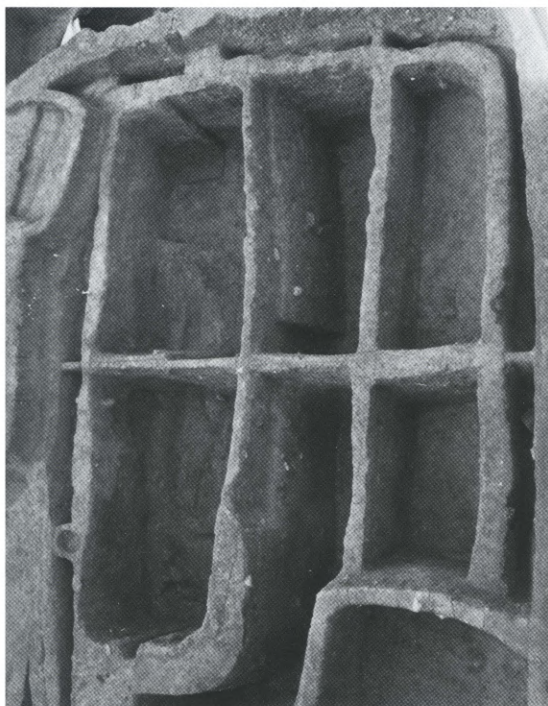
4 3号木棺墓内勾玉管玉检出状况



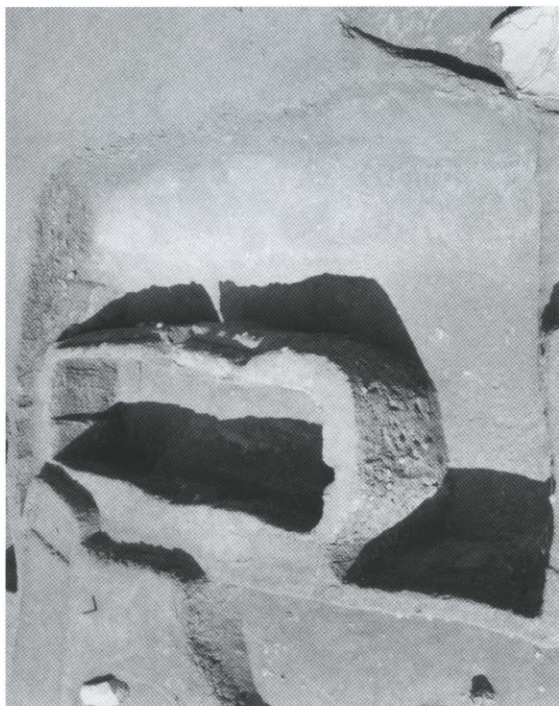
1 周溝断面



2 1号木棺墓



3 6号木槨臺 (調査中)



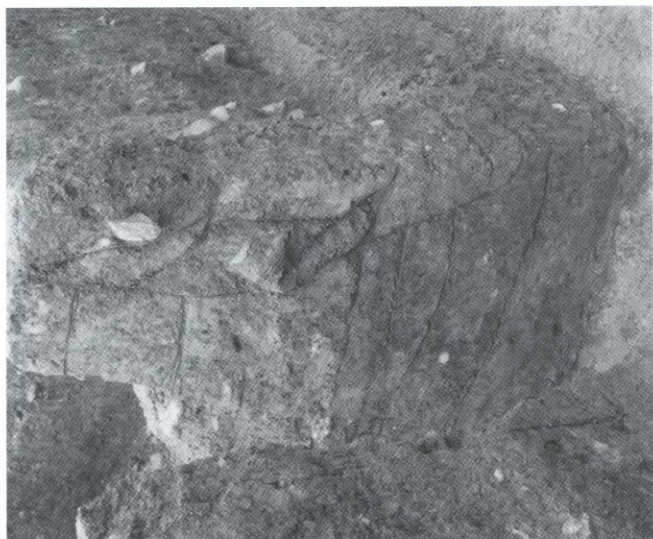
4 6号木槨臺



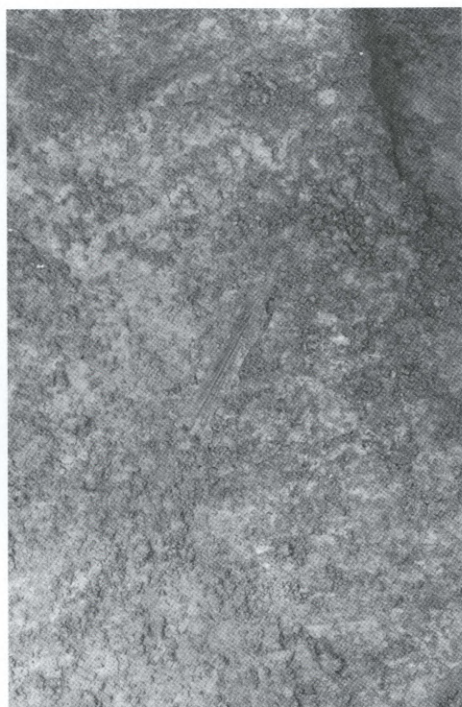
1 4号木槨臺



2 5号木槨 (土槨臺)



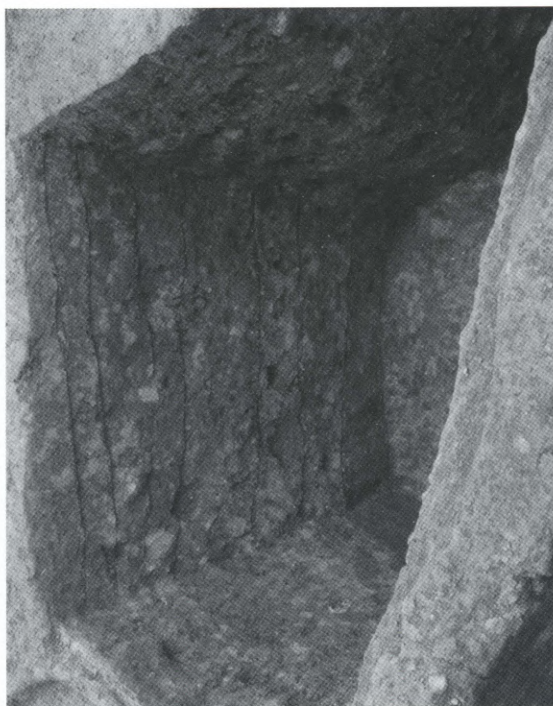
3 6号木槨墓断面(真込と崩落土)



4 6号木槨墓銅支検出状況



1 6号木槨墓断面



2 6号木槨墓南側断面(版築状真込)



2 7号木棺墓内粘土核出状况



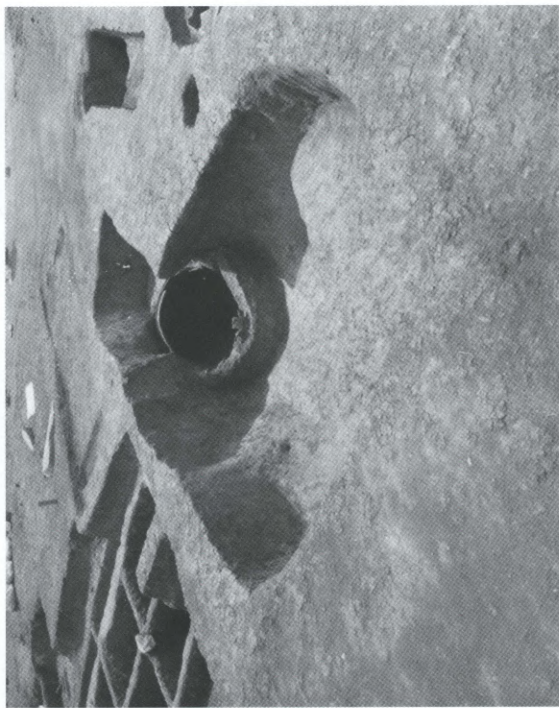
3 7号木棺墓内石讫 石刻切先核出状况



1 7号木棺墓



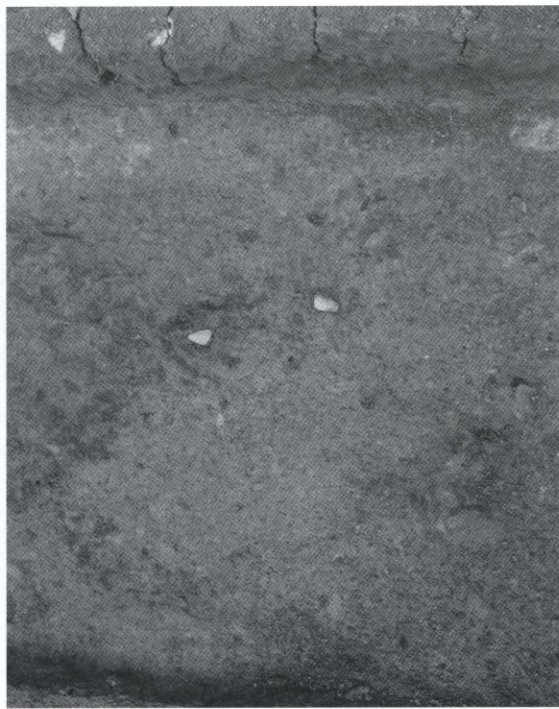
3 9号木棺墓



4 1号墓棺墓



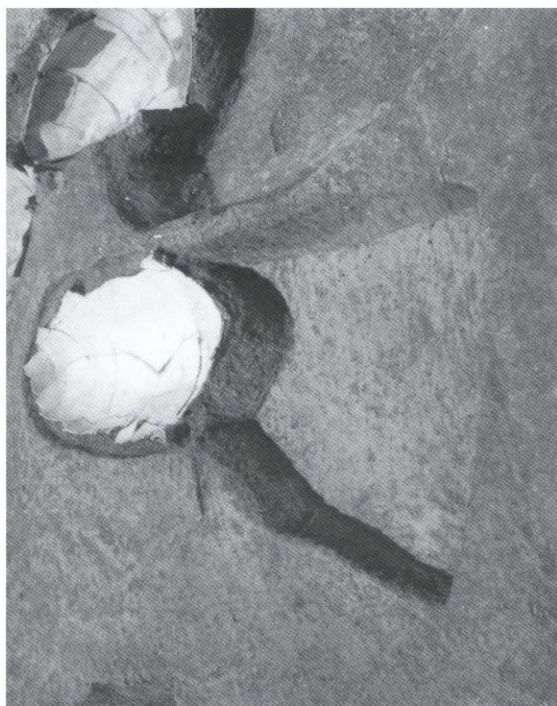
1 8号木棺墓



2 8号木棺墓内石制切先·刃部突出状况



3 3号墓棺墓



4 4号墓棺墓



1 1号墓棺墓棺椁出土状况



2 2号墓棺墓



3 7号墓棺盖



4 8号墓棺盖



1 5号墓棺盖



2 6号墓棺盖



3 9号墓棺室



4 9号墓棺室内铜戈横出状况



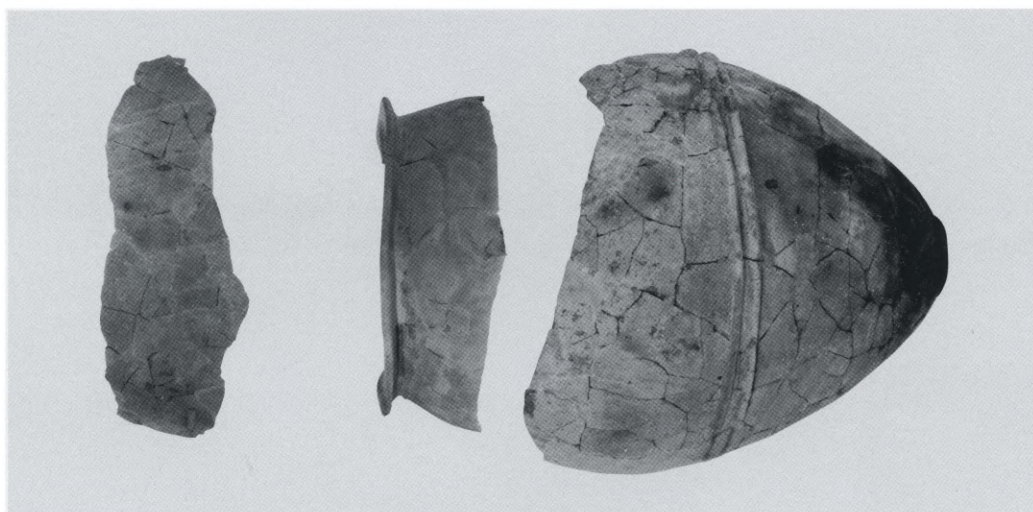
1 8号墓棺室内铜戈横出状况



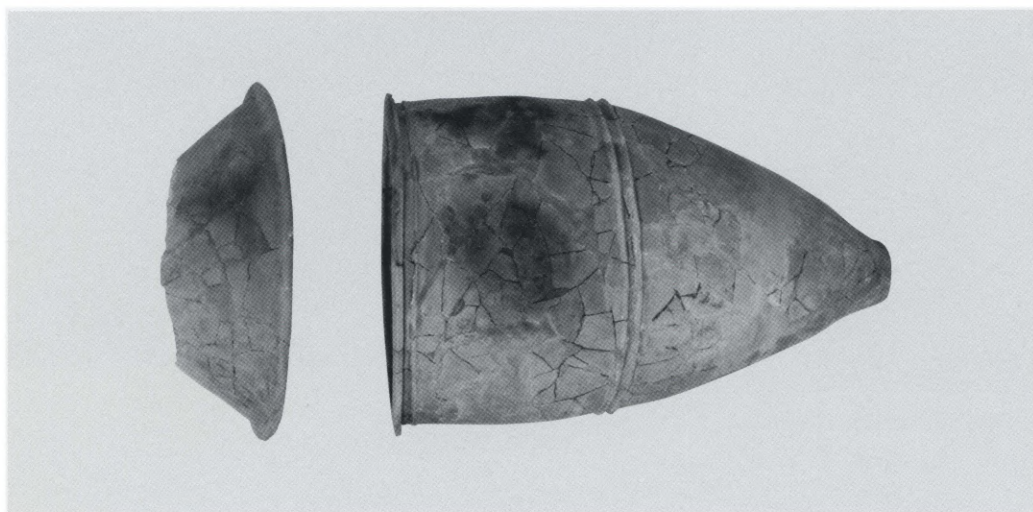
2 10号墓棺室



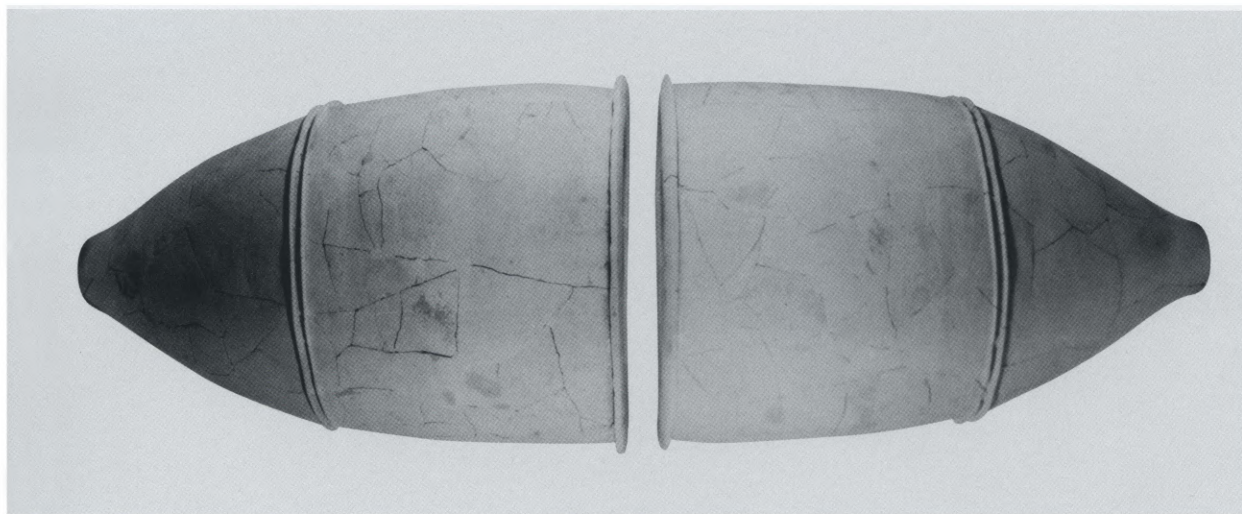
4号墓棺



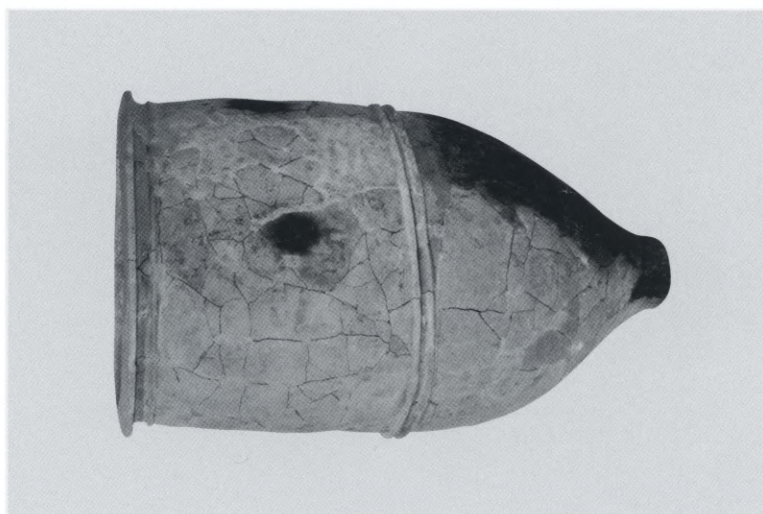
3号墓棺



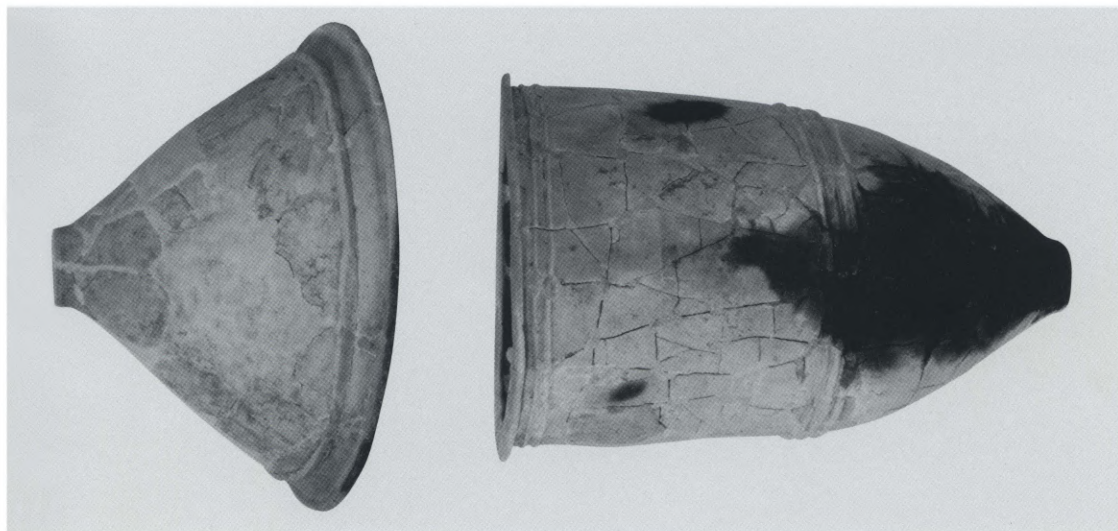
1号墓棺



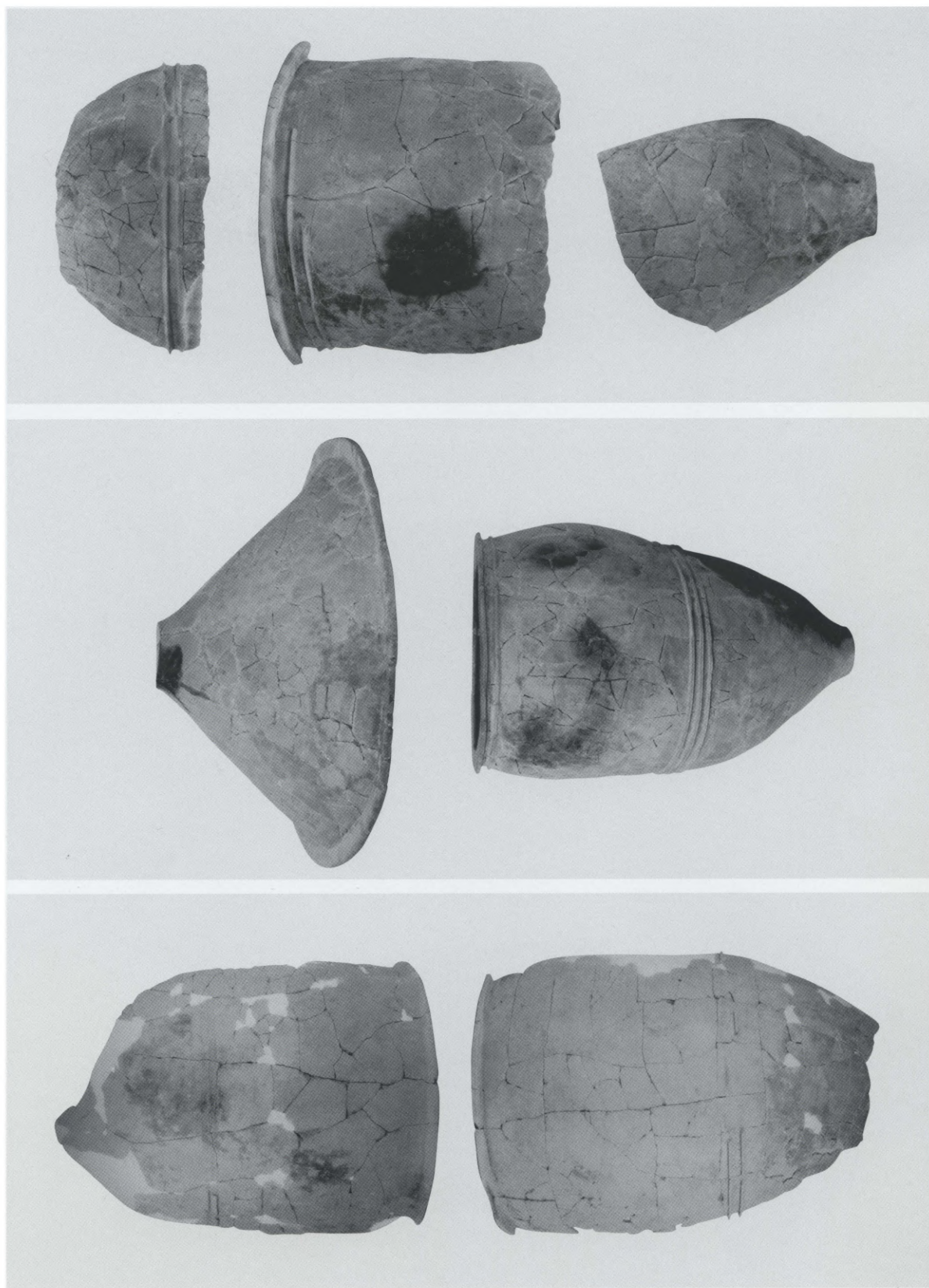
8号甕棺



6号甕棺



5号甕棺



11号墓棺

10号墓棺

9号墓棺